

姫野四葉は勇者である

水甲

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それはただ世界のために戦いたいと願った少女の物語。

だけどそれは彼女にとって、長く辛い戦いの日々になるとは思っても見なかった。

結城友奈は勇者であるにオリ主を投入したのですが、最初は乃木若葉編からになります。

あと少し話が進んでからになります。花結の方に出すつもりです。

目次

乃木若葉の章

01	すべての始まり	1
02	仲間	6
03	初戦闘	12
04	千景の恋愛問題	17
05	千景のデート	23
06	四葉の秘密	33
07	勇者たちの守り神	41
08	力の使い方	49
09	再起	55
10	決戦と新たな旅立ち	60
11	諏訪での一時	66

12	合流先へ	74
13	合流	80
14	その身を犠牲にしても	87
15	末路と現実	97
16	堕ちたもの	106
17	終わる恋	113
18	決心	120
19	形見	126
20	託した未来	132
21	花を結う	141
鷺尾須美の章		
22	新たな始まり	145
23	祝勝会	150

3 4	対話と選択	218
3 3	銀の道	213
3 2	友を助けるために	206
3 1	またね	200
193		
3 0	二人の問題を解決しよう	
2 9	姫野と神宮	186
2 8	突然のお見合い	180
		172
2 7	温泉でのひとときと深まった絆	
2 6	合宿	167
2 5	合宿へ	161
2 4	姫野家について	155

4 6	残された時間と2本の刀	291
4 5	決意	284
4 4	樹の歌	277
4 3	四葉の歌	268
4 2	おめでとう	261
4 1	三好夏凜つて子	255
4 0	勇者任命	250
3 9	守り神の転入	244
3 8	戦い再び	238
3 7	二年の歳月	231
3 6	目覚めた勇者	
	結城友奈の章	
3 5	笑顔の君に会うまで	225

姫野四葉の章

47 先代からの願い

48 絆

49 守護の勇者

最終話 守ってきたもの

306

313

320

326

乃木若葉の章

01すべての始まり

2015年7月30日

私は一人、あるものをお父さんに届けるために熊本城近くに来ていた。

来たのはいいけど、私は少し困り果てていた。何故なら……

「お父さんの職場……どこだろう？」

地図を確認するけど、全然わからない。これはきつと……迷子だ。携帯で連絡を取りたいけど、私、携帯なんて持ってないし……それにここ最近地震が多くてあんまり外出歩きたくないのに……

「帰ろうかな……お父さん、明日には帰ってくるだろうし……」

私はお父さんに渡そうと思っていた小箱を見つめた。これはお父さんの誕生日プレゼント……折角だからすぐに渡したかったのに……

私はため息をつき、来た道に戻ろうとした瞬間、地面が大きく揺れた。私は咄嗟に身を縮めた。地震はしばらくしてから止まったけど、突然私の目の前に何かが降ってきた。

「えっ!？」

そこには白くうごめく無数の何かだった。ソレは私に気が付き、巨大な口を大きく開けた。

ああ、私はこのまま食われて死ぬんだ……お父さんにプレゼント……渡せなかったな……

私はすべてを諦めて目を閉じた。だけどいつまで経っても痛みがない。死ぬときって痛くないのかなって思いながら、目をそつと開けると、白い何かと私の間を何かを防いでいた。

「これは？」

一体何が起きているのか分からない。だけど何故かポケットに仕舞つてあるプレゼントが気になり、私は開けてみると中にはいついた勾玉が光り輝いていた。

「なんでこれ……」

どうしてこんな風になつてるのかわからない。だけど何故か使い方が分かる「お願い……力を貸して……」

私は勾玉を強く握りしめ、迫り来る白い何かに向かって思いつきり振つた瞬間、白い何かを何かが貫いた。

握りしめた手から勾玉が鎖のようになっていて、白い何かを貫いていたのだ。

「これって……でも、これなら……」

私は目の前にいる無数の白い何かと戦うのであった。

どれくらい時間が立ったのか、襲ってきた白い何かをすべて倒した私は疲れ果てて、地面に座り込んだ。

「一体……何が起きてるの？」

私の問いかけに、誰も答えてくれなかった。仕方のないことだけど……今はこの場を離れることが先決だ。

きつとどこかしらに避難所があるはずだ。そこならきつとお父さんもお母さんもうるはずだと思い、疲れ果てた体で私は歩き出すのであった。

それから三年後、あの日私は避難所を見つけたけど、避難していた人たちの中に両親の姿がなかった。幸い近所の人がお父さんたちのことを聞いたら、二人共あの化物に殺されたと聞かされた。

私はショックでそのまま気を失い、目を覚ますと一人の女の子に呼び出された。その子は言うには私にはあの化物と戦う力があるとされた。私は両親の仇と生き残った人たちを守ると誓い、その子と共に戦うことを決意したのだった。

「今日も早いな。四葉」

「若葉ちゃん。おはよう」

声をかけてきた女の子、乃木若葉ちゃん。彼女は私に化物……バーテックスと戦う力があると教えてくれた人だ。

「若葉ちゃんはいつも早いね。ひなたちゃんは？」

「ひなたなら少し遅れるみたいだ」

「そっか、それじゃ先に教室で待ってよう」

「そうだな」

私と若葉ちゃんは教室へと向かうのであった。

そう、これはすべての始まり。私に……私達にとって長く辛い日々の始まりであった。

02 仲間

若葉ちゃんと一緒に丸亀城の教室に入るとどうやら私達が一番みたいだった。

「まだ誰も来ないみたいだね」

「いや、多分だがそろそろ……」

若葉ちゃんがそう言った瞬間、廊下の方から誰かが走ってくる音が聞こえると、

「ああ！また若葉と四葉が一番のりか!!タマが一番かと思ったのに!!明日こそはタマが一番乗りしてやるからな!!」

「タマっち、喧嘩売るのはやめようよ」

若葉ちゃんに詰め寄る少女、土居珠子ちゃんとその親友の伊予島杏ちゃん。この二人も私達と同じように勇者である。

「おはよう。杏ちゃん、タマっちちゃん」

「四葉！そのタマっちちゃんっていうのはやめてくれないか？何だかちゃん付けされるとむず痒くなるんだよ」

「それじゃタマっちで」

「うむ」

「おはようございます」

すると今度はひなたちゃんが教室に入ってきた。彼女は勇者ではなく、巫女だ。巫女はこの国を守る神樹様の声を唯一聞ける重要な役職でもある。

「おはよう。ひなたちゃん」

「おはようございます。四葉さん。今日は早いですね」

「あはは、今日は目がさめるのが早くてね」

「四葉さんって、早いか遅いかのどちらかですものね。今日は夢を見なかったんですか？」

「うん」

私が見る夢はかなり変わっている。夢の中の私は、今の私とは少し違い、見覚えのない女の子と一緒にいる夢……その夢は何故か楽しくって、目がさめる頃には遅刻ギリギリの時間だったりする

こんな夢を見るようになったのは、あの日からだ。一体どうしてこんな夢を見るようになったんだろう？

「四葉さん、貴方の持っているその勾玉ですが……」

ひなたちゃんが何かを言いかけた瞬間、私はいつの間にか来ていた郡千景ちゃんに気がつき、声をかけに行くのであった。

「おはよう。千景ちゃん」

「…………おはよう」

何だか浮かない顔をしている千景ちゃん。もしかしてまだ来てない彼女のことを気にしているのかな？

「おはよーございまーす」

「来たみたいだよ。友奈ちゃん」

私がそう告げると千景ちゃんは嬉しそうな顔をするのと一瞬私のことを睨みつけた。

「おつはよーグンちゃん、四葉ちゃん」

「おはよう。高嶋さん」

「おはよう。友奈ちゃん」

「あれ？四葉ちゃん、今日は早めの日だった？てつきり私の後かなって思ったんだけど…………」

「それひなたちゃんにも言われたよ」

私達三人が他愛のない話をする中、私はさつきひなたちゃんがいいかけた言葉が気になった。何を言おうとしたのかな？休憩時間の時に聞いてみよう

休憩時間になり、私はひなたちゃんを人気のない所に呼び出した。

「四葉さん、どうかしたんですか？」

「ひなたちゃん一人？」

「ええ、二人っきりのほうが都合がいいと言ったのは……あのもしかしていじめとか……」

「気に入らないから人気のない所に呼び出して殴ったりとか？そういうことしないよ。ただ、朝、ひなたちゃんが何か言いかけたから……」

「ああ、そのことですか……もしかして気を遣って……」

「二人っきりのほうが言いやすいかなって……それで私の勾玉がどうかしたの？」

私はポケットからあの日、お父さんに渡すはずの勾玉を取り出した。これのおかげで私は勇者の力を得ることが出来たけど、ただのレプリカのはずの勾玉が形を変えたりなんてするのは少しおかしい気がしていた。きつとひなたちゃんの話は何かわかったのだろうか？

「その勾玉ですが、やはり何かしらの逸話を持っているものではなく、その……そこら辺

「のお店にある作り物でした」

「うん、それは知ってるよ。私を買ってきたものだから……」

「ただ、何故そのようなものが人類の敵と戦える武器に変わったのかはわかりません。四葉さんは勇者、巫女とは違う何かしらの力を宿したりとかは……」

「うーん、私としてはあの日から変わった力を使えるようになったのは、勇者に変身できるようになったくらいだし……」

「もう少し大社の方でも調べてみるのとことです。何か異変があったら……」

「ええ、伝えるわ。ただ今度からは皆にも伝えたほうがいいかもね」

私はある所まで歩き、覗き込むとそこには若葉ちゃんたちがいた。

「若葉ちゃん!？」

「盗み聴き?」

「いや、これは……」

「おい、若葉! お前がいい出したことだろう」

「だからやめようって言ったのに……」

「何だかこういうのって楽しいね。グンちゃん」

「え、ええ」

どうやら皆、ひなたちゃんみたいな事を思っていたみたいだった。私って、不良とか

いじめっ子に思われてるのかな？

「すまない。何だか二人が深刻そうな顔をして、出ていったから……心配で」

「ごめんね。若葉ちゃん。これからは皆にも話すようにするね」

私は小指を若葉ちゃんの前に突き出した。若葉ちゃんは最初は困惑していた。

「えっと、四葉？」

「指切りしておこうかなって」

「そうか……それじゃ……」

私は若葉ちゃんたちと指切りを交わすのであった。ちゃんとか何かあったら話すようにと……

03 初戦闘

数週間後のことだった。放課後、私は勾玉を見つめていると端末から耳障りな音が鳴り響いた。

「これは……来るのね」

私はあることを確かめに外へ出ると、舞い散る木の葉や鳥が止まったまま、そして周辺の景色が変わり始めた。

そして気がついた時には、辺りが木々に覆われていた。そっかこれが樹海化……
「みんなと合流しなきゃ……」

私は端末でみんなの位置を確認し、皆が若葉ちゃんの所に集まっていることに気が付き、私もそこに向かった。

「お待ちせしました。って何かあったの？」

「どうやら私で一番最後みたいだったけど、何故か皆の空気が重い。いや、一人だけは違った。」

「あつ、四葉ちゃん。大丈夫？」

「うん、遠い場所にいたから集合に遅れちゃったけど、何があつたの？」

「えつとね。とりあえず喧嘩の原因を倒しちやおうって話になつたの」

喧嘩つて、私に来る前に本当に何かあつたのかな？でも、今は気にしない方が良くも
もしれない。

「それじゃみんなで勇者に変身!!」

友奈ちゃんの掛け声と共に、私たちは勇者に変身した。私は灰色の衣装に手には鞭の
ように繋がった勾玉が装備された。

これならバーテックスを倒せるはずだと思っていたけど、杏ちゃんだけ勇者に変身し
てなかった。

「ごめんなさい。私……」

「伊予島さん……」

「大丈夫。タマたちだけで十分だから」

「杏ちゃん……戦うのが怖いっていうのは当たり前だよ。私だって戦うのは怖い。だけ
ど、少しだけ考えてみて、何のために戦うかって……」

私は笑顔で杏ちゃんにそう告げた瞬間、先に戦場へと向かった若葉ちゃんの後を追っ
た。

「力を見せて……ハアアア!!」

鞭をバーテックス目掛けて振った瞬間、真つ二つに切り裂かれた。この武器凄い。手足のように自由に使えるし、どこまでも伸ばすことも出来る。

すると心配してきたのか、若葉ちゃんが私のところへやってきた。

「姫野!!大丈夫そうだな」

「若葉ちゃんこそ、一人で先走らないほうがいいよ」

「そ、そうだな」

突然上からバーテックスが襲い掛かってきた。私と若葉ちゃんは立ち向かおうとした瞬間、どこからともなく飛んできた矢がバーテックスを撃退した。矢が飛んできた方を見ると、杏ちゃんが勇者に変身し、私達を助けてくれたみたいだった。

「怖いけど……私も戦います」

「伊予島さん……」

「覚悟決めたみたいだね。おっと、話してる場合じゃないみたいだね。敵が……」

バーテックスが一つの場所に集まってきた。どうやら敵も私達に対して、合体を始めたのかもしれない。

合体し、現れたのは巨大な棒状の姿に変わった。更に棒状から透明な板が現れた。何だか形がよく分からない。一体どんな攻撃をしてくるのか……

「様子見してる場合じゃないよね。ハアアア!!」

私は勾玉で進化体に攻撃を食らわせるが、思いつきり攻撃が弾かれた。更に後方から杏ちゃんも球子ちゃんが攻撃を放つが、透明な板によって、攻撃が反射された。

「厄介な敵だね」

「ああ、攻撃は弾かれるか反射されてしまう。それだったらここは私が……」

若葉ちゃんが何かをしようとした瞬間、友奈ちゃんが前に飛び出した。もしかして『切り札』を発動させるつもり？

「切り札『一目連』」

神秘的な衣装に姿を変えた友奈ちゃんは何度も何度もパンチを透明な板に喰らわしていった。あれが神樹様に蓄積された無数の概念記録にアクセスして、抽出された力を自らに顕現させる力……『切り札』

友奈ちゃんのは暴風を司る精霊『一目連』。殴り続けていく友奈ちゃん、透明な板は見ると見るうちにヒビが入っていく。でも、何でだろう？あの力は……

「友奈ちゃん、それ以上は駄目!!」

私が叫んだ瞬間、鞭状になっていた勾玉が私の両拳に装着された。これって……

「よく分からないけど、喰らえエエエエエ!!」

私の両拳に装備された勾玉が回転され、私は右拳で進化体を殴った瞬間、進化体は見

る見るうちに崩れていった。

「勝ったのね」

「四葉ちゃん、格好良かったよ」

友奈ちゃんは笑顔で私に抱きついてきた。私としては美味しいところを奪ってしまったのでちよつと気が引けてるけど……

「ごめんね。美味しい所だけ……」

「ううん、気にしないで、こうやってみんなで戦ったんだから、手柄とか考えないほうがいいよ」

「そ、そうかな……」

「そうだよ」

何だか友奈ちゃんらしいなと思うと、私を使用した勾玉が元の鞭の形に変わった。何で形を変えたのか気になる。一体この勾玉は何なんだろうか……

それにあの時、友奈ちゃんが切り札を使った時に感じた不安感は一切……

04 千景の恋愛問題

敵を粗方倒し終えた私達。そのためかみんな気が抜けてしまい、若葉ちゃんの後ろに現れたバーテックスに気がつくのに、一瞬遅れてしまった。

「若葉ちゃん!？」

「若葉!？」

私と珠子ちゃんが同時に叫んだ瞬間、ギリツブチツという音が樹海の中に響いた。だがその音が聞こえたのは若葉ちゃんではなく、襲ってきたバーテックスの方からだった。若葉ちゃんというとバーテックスの肉を食べていた。

「……まずいな。食えたものじゃない」

いや、バーテックスって食べられるものなの？おまけにバーテックスは真つ二つに切り裂かれてるし……本当に若葉ちゃんって色々と凄いな……

「これから若葉の事を怒らせないようにしよう」

「うん」

珠子ちゃんと杏ちゃんの二人はそう呟くのであった。

初めての戦闘も終わり、私たちは祝勝会でうどんを食べていたのだけど、

「変なもの食べちゃ駄目でしよう!!お腹壊したらどうするの!!」

「いや、昔あいつらが友達を食べたから……」

「だからといって食べるのは駄目です」

バーテックスを食べたことをひなたちゃんに怒られる若葉ちゃん。まあ普通、あんな化物を食べるって言うことは誰もしないからな……

「全く、そういえば四葉さん」

「何?」

「武器の形状が変わったというのは本当ですか?」

「四葉ちゃん凄かったよ、両腕に勾玉がくっついて、回転してたし、火も出たよね」

あの時は本当に咄嗟に友奈ちゃんを助けないと行けないと思って出来たけど、私の武器って本当に何なんだろう?

「友奈さんの切り札発動……それに伴っての四葉さんの武器の形状変化……本当に不思議ですね」

ひなたちゃんはそう言う中、私は勾玉を取り出し見つめた。何でただのお土産の勾玉がバーテックスを倒す力を宿してらんだろう？もしかしてこの勾玉だけが特別製なのか……それとも……

「あの四葉さん、折角の祝勝会なんですから難しい顔はしないほうがいいですよ」「あつ、ごめんね。杏ちゃん。そうだね。今は初勝利を祝わないとね」

考えるべきことはあるけど、今は初勝利を祝わないと……

それから珠子ちゃんが若葉ちゃんに暫定的なリーダーじゃなく、本当のリーダーになっただけと言ったりなどあって、楽しい祝勝会になったのだった。

千景SIDE

『だって、あなたは勇者なのだから……』

『あなたを産んでよかったわ……愛してる……』

母さんの病気が悪化したと話を聞き、私は故郷に戻った。故郷に戻り、今まで私のことを無価値だと言っていた人々が、私のことを誇らしいと告げてくれ、お母さんも愛し
てるとも言ってくれた……

「私は価値のある人間なのね……」

電車で揺られながら、私は小さな声で呟いた。すると私の前に誰かが立っていた。

「郡千景さんですか？」

「……誰？」

「まあ僕は……貴方のファンです」

「……」

私は端末を取り出し、110とボタンを押した。

「すみません。警察ですか……」

「ごめん、警察は勘弁してくれないかな。個人的に困るので……」

私は慌てる男の子を見て、ため息をつきながら端末をしまった。それにしてもファ

ンって……

「私が勇者になってファンになったから声をかけたということかしら？」

「いや、君が勇者になる前から……あとファンと言うのは君に声をかけるきっかけみたいなものだよ」

ファンじゃないとしたら、一体彼は何のために声をかけてきたのだろうか……

「僕は貴方のことが好きです。付き合ってください」

「……………ハア!？」

いきなり告白されてしまった。

丸亀城に戻り、私は自分の部屋のベッドに倒れ込んだ。いきなり告白され、戸惑って

しまった私、彼は私の反応を見て困った顔をしていたが、すぐに彼は『付き合うかどうかはいつでも答えを待っているの、出来れば……一緒に出かけませんか』と言われた。これって、言うなればデート……

「どうすれば……」

昔のことを思い返すと恋愛というものには興味がなかったというより、人と接するのを避けていた。そんな私がああのとデートなんて……断ることも出来たのに……

「こういう時……本当にどうすれば……」

「ここは高嶋さんに……でも高嶋さんは恋愛とかは疎そうだ。乃木さんと土居さんもそうだったことは苦手だろうし……残った三人は……」

「悩んでいてもしょうがないわ」

私は相談するため、上里さん、伊予島さん、姫野さんに連絡を取るのであった。

「い、いえ、大丈夫ですが……」

「あの、私達を呼び出したのって、その、やっぱり……」

「ええ、あなた達ならそれなりに知識があるかと思つて……」

私たちはドキドキしながら千景さんの言葉を待った。これ、本当に告白だったらどうしよう

「その……この間実家に戻つた時に……告白されたの」

「「はい？」」

今、千景ちゃんはなんて言つた？告白……告白……告白……

「あの友奈さんにですか？」

「伊予島さん、どうして高島さんが出てくるのかしら？」

「え、えつとそれは……」

「そ、その千景さん、告白っていつされたんですか？」

「さつきも言つたように実家に帰つたときによ。まあ、細かく言えばこつちに戻つてくる電車の中で……」

こ、これは私たちに告白するよりも大事件だ。まさか千景ちゃんに彼氏が……でも何でわざわざこんな所に呼び出して、私達だけに伝えるのだろうか？若葉ちゃんたちにも教えてあげたら良いのに……

「でも……告白されたのはいいのだけど……私、返事もしていないし……というよりも恋愛自体どうしたらいいのか……」

「それで私たちに相談ですか……」

「上里さん、伊予島さん、姫野さんはここにいる中で詳しくそうだから……」

詳しいって、私は初恋もまだなだけど……でも千景ちゃんが私達を呼び出したのは分かる気がする。ここに呼ばれてない三人って何だか恋愛とかそういうの疎そうだし……

「あの千景さんが私達を頼ってくれるのは嬉しいのですが……」

「私もひなたさんも、四葉さんも千景さんが思っているように恋愛とか詳しくは……」

「そう……でもそれでもいいわ。私にアドバイスを……」

千景さんは私たちに頭を下げていた。ここまで千景さんがするなんて……これで力になってあげない方がおかしいわね。

「分かった。千景ちゃん、私達、出来る限り手伝うわ」

「姫野さん……」

「そうですね。こういう時でも力を合わせないといけませんもんね」

「伊予島さん」

「私達に任せてください。それに……ちよつと気になることがありますし……」

「上里さん、ありがとう」

私たちは場所を移動し、千景ちゃんから改めて事情を聞くことになった。相手の名前は聞かなかったみたいだけど、どうやら今度の休日にデートをすることになったらしい。本来休日とかは大社から許可をもらわないと出かけることも出来ないのだが、どうにもその許可があつさり認められたりもしている。

「うーん、まさか……」

「どうかしたの？ひなたちゃん」

「いえ、ちよつと……」

その話を聞いて、ひなたちゃんは何だか気になることがあるみたいだけど……何があつたのかな？

千景SIDE

姫野さん、三人にアドバイスを貰らい、私はとうとうデートの日を迎えた。少し集合時間よりちよつと早めに行くともう彼は来ていた。

「またせたかしら？」

「いいえ、そんなに待ってませんよ。僕も来たばかりですから……」

彼は笑顔でそう告げるが、大体こういうときって私が思っているよりも早く来ているかもしれない

「それじゃ行きましょうか。郡さん」

「ええ」

私と彼は一緒に歩き出した。それにしてもちよつと気になるのは出かける際、相談した三人の姿がなかったのが気になる……

「こちら四葉。対象二人が動きました」

「あの……一緒に行動してるんですからわざわざ報告しなくてもわかりますよ」

「杏ちゃん、こういうのはノリが大切なのよ。ねえ、ひなたちゃん」

「え、ええ、そうですね……でも、まさか本当に彼なんて……」

「知っている方なんですか？」

「杏さんも名前くらいは聞いたことがあるのでは？彼は大社でもかなり力をもっている方で……」

「あつ、対象二人、食事をとるみたい。行きましょう」

「何というか……」

「四葉ちゃん、ノリノリね……」

近くで食事を済ませた私たち。私は彼の他愛のない話を聞いていたけど、どうしても彼は私なんか好きになったのだろうか？

やっぱりこういう時は正直に聞いたほうが良いのだろうか？

「あつ、郡さん、ゲームセンターありま……」

「聞いてもいいかしら？」

私は意を決して彼に聞くことにした。何で私のことが好きなのか……

「何ですか？」

「どうして私なんか好きになったの？」

「好きになった理由ですか？」

正直恋愛というのとはよく分らない……そういう事を教えてくれるはずの両親は……全く教えてくれず、ただ悪い手本のみだけだった。

だからこそ私は彼にこんなことを聞いたのだろうか？彼は少し恥ずかしそうにしながら、私に微笑んだ。

「一目惚れでしょうか？」

「一目惚れ？」

「はい、それにあなたと会うのは今回で二回目ではなく三回目だったりします」

私は彼と前にもあつているといふの？ 思い出そうとするが全く思い出せなかった。

「思い出さなくてもいいですよ。ただ今日はこうして一緒に出かけることが出来ただけで十分ですから……」

彼はそう言つて立ち去ろうとしていた。私は咄嗟に彼の腕を掴んだ

「ま、待つて……」

「郡さん？」

「私は恋愛つていうのはよく分からない。見本になるはずの両親が……あれだったり……」

私はずつと悩んでいた。彼のことが好きになつた時、私は本当に彼と幸せな日常を歩めるのかどうか……

「貴方は私が好きでかまわないわ。でも、私は貴方のことを幸せにするなんて無理かもしれない。もしかしたら貴方を傷つけるかも……」

突然、彼は私のことをそつと抱きしめてきた。こう言う時、拒否するべきなのだけど、私はそれができなかつた。

「千景さん……大丈夫です。千景さんが僕を幸せにしなくても……僕が貴方のことを幸せにします。それに……千景さんが僕のことを傷つけたとしても僕は全然気にしませんから……」

「……なにそれ……」

私は彼から離れた。そして彼のことを見つめた。

「気にしないって……あなた、変わってるわね」

「よく言われます」

「……なるべく貴方のことが好きになれるように努力はするわ」

私はそう言って、帰るのであった。そういえば彼の名前、また聞きそびれた……

四葉SIDE

千景ちゃんが去った後、ひなたちゃんやんが何故か例の彼に近寄り、声をかけていた。

「……………」

「よかったですね。好感触で」

「上里さんか。それに勇者も二人……尾行してたのか？」

「千景さんのことが気になったというよりも貴方のことが気になったので」

「僕のことかね……………」

彼はそう言つて、ため息を付いた。というかこの人、ひなたちゃんと親しいみたいだけど、大社関係者なのかな？

「それでちよつと聞きたいのですが、千景さんと一度会つたことがあるというのは……………」
「彼女は覚えてないだろうけど、昔ね……………まあ郡さんには思い出してもらわなくても良
いことだけどね」

彼はそう言いながら、笑顔で去つていくのであつた。というか本当にあの人は何者だ
ろうか？

「ねえ、ひなたちゃん、あの人、親しいみたいだけど大社関係者なの？」

「ええ、あの人は神宮蛸。大社の中ではかなりの重役の家系なのですが……………」

そんな人が千景ちゃんをね……………何だか今後どうなるか気になるな……………

06 四葉の秘密

私は勾玉をじっと見つめていた。本当にこの勾玉は何なんだろう？ ただの土産の
はずなのに何でバーテックスと戦える力があるのだろうか？

いつもそんな事を考えるけど、全く答えが出てこなかった。

「あの四葉さん？」

「ん？ どうしたの杏ちゃんに球子ちゃん」

「杏が四葉のことを心配してるんだよな。勾玉じっと見つめて……」

「たまっち先輩、言わなくていいのに……」

何だか心配かけられちゃって、ちよつと申し訳ない。私は勾玉を机の上に置き、二人
に話した。

「この勾玉が本当に何なんだろうかなって思ってたね……」

「タマたちが使ってる武器みたいに逸話とかないんだろ」

「そうなんだよね。ただのお土産だし……」

「……もしかして……でもまさか……」

杏ちゃんは何か思い当たることがあったみたいだ。それとも何か気がついたのかな

?

「杏ちゃん、何か分かったの?」

「えっ、いえ、ただ……四葉さんが使っているのは八尺瓊勾玉だったりしないかなって

……」

「八尺瓊勾玉?」

それって確か三種の神器って奴じゃなかったっけ?

「四葉さんが使ってる武器が勾玉ですから、もしかしてって思ったんですけど……」

「いやいや、四葉も言ってたろ。ただのお土産にそんな逸話あるわけないって」

「そう……だね。ごめんなさい四葉さん」

「ううん、大丈夫だよ。でもちよつとした手がかりもらえたからいいかもしれない」

まさかお土産が八尺瓊勾玉に変わったって言うわけないよね。

ひなたSIDE

私は大社に呼び出され、ある書類を見つめていた。そこには四葉さんのことが書かれていた。

「特別彼女には変わった経歴はないみたい……でも」

若葉ちゃんたちから聞いた武器の形状が変わったこと……そしてその時四葉ちゃんが友奈さんの切り札を使用を止めようとしたこと……一体彼女に何が起きているの？

「四葉さんの精霊は鬼神………精霊の影響だったらと思っただけど、特に関係がないみたい」

調べても特に得られた情報はなく、私は丸亀城へ帰ろうとした時だった。一枚の書類が目に入った。

「これは……姫野家の……」

私はその記事を読んだ瞬間、ただ驚きを隠せないでいた。四葉さんは巫女や勇者ではなく………

四葉SIDE

三回目の戦い。奥の方には大量のバーテックスの他に一体だけものすごいスピードでこっちに向かってくる進化体の姿が確認できた。

「何だか今までのより人型に近いわね」

「それに小型だよ」

「小回りもきいて機動力もある。見た目と違って厄介な敵だ」

私、友奈ちゃん、若葉ちゃんの三人が身構えると球子ちゃんが不敵な笑みを浮かべていた。

「ふふふふ、ここはタマに任せタマえ!!バーテックスに知性があるらしいし、おまけに今回は割と人型に近い。それだったら……」

球子ちゃんはあるものを進化体の進行方向に投げつけた。それは最高級手打ちうどんだった。もしかするとバーテックスもうどんを好むかもしれない。それだったらバーテックスのことを知れるかも……

だけど進化体はうどんに見向きもせず、ただ走り去っていった。まさか……うどんをここまで愚弄するなんて……

「許せないね」

「ああ、結局奴らとは分かり合えない」

私と球子ちゃんの二人は同時に進化体に攻撃をするが、かわされ、進化体の鋭い蹴りを喰らってしまった。

「つう、球子ちゃん!!」

「だ……いじょうぶだけど……腕が……」

腕を負傷した球子ちゃん。敵もここまでやるなんて……どうしたものかと思っていると杏ちゃんが駆けつけてきた。

「タマっち先輩、四葉さん」

「杏、これぐらい大丈夫だ。杏は下がって……」

「ううん、一緒に倒そう。四葉さん、敵の動きに制限をかけられますか?」

「制限? とりあえずやってみる」

私は勾玉で敵の進行方向を遮ると同時に、敵は方向展開をした。その瞬間、球子ちゃん
の旋刃盤が投げつけられたけど、このままだと外れる。だけどその瞬間、一本の矢が
旋刃盤の軌道を変え、進化体に命中し、撃退した。

「杏……すごいじゃないか」

「タマっち先輩のおかげだよ。それに四葉さんが……」

「いやいや、杏ちゃんの作戦勝ちでしょ。さて残りを一気に倒しましょうか」

私達三人は残ったバーテックスを倒しに向かうのであった。

無事に敵を倒し終え、みんなで食事を楽しむ中、私はひなたちゃんに呼び出されてい
た。

「どうかしたの？」

「四葉さん……………お聞きしたいのですが、貴方のお家は神事や何かに関係したものですか？」

「ううん、普通の家だよ。何で……………」

何でいきなりそんなことを聞くのかと思っていると、ひなたちゃんは真剣な表情であることを告げた。

「姫野四葉……………貴方は勇者や巫女ではなく、神に近い存在なんです」

神に近い存在……………意味がわからなかった。特別な家系というわけじゃないのに何で私がそんな存在に？

「姫野家にはあるしきたりがあったんです。それはその時代に生まれた子に神を宿すというもの……………」

「ちよつと待って、私はそんな……………神様だとかそんなわけないじゃない。私はただの間……………姫野四葉だよ」

私の訴えを聞いて、ひなたちゃんは首を横に振った。

「貴方に宿った神……………それは触れたものを特別なものへ変えてしまう力があります。その力であなただけの……………その勾玉を武器へと変えた」

それじゃ……………この勾玉は……………

「武器の形状が変わったのは、その力の影響でしょうか……………」

「……………そんな……………そんなわけないよ!?! 私は……………」

私はひなたちゃんという言葉信じられず、その場から逃げ出すのであった。私がそんな特殊な人間なわけ……………ないのに……………

07 勇者たちの守り神

私はただただ走って行く。私が普通の人間じゃないから？その身に神を宿した存在だと聞かされたから？

違う、ただシヨックだったからだ。

「私が……神を宿す存在……それだったら何で……」

何である日、あの時私はお母さんをお父さんを救うことができなかつたんだろうか？特殊な力があるのに、どうして……

誰かに問いかけるが、誰も答えてくれなかつた。私は……

「どうすればいいの……」

四葉とひなたの様子が気になり、少しだけ様子を見に行くと何故かひなたが立ち尽くしていた。

「どうしたんだ。ひなた？」

「若葉ちゃん……私……」

ひなたは涙を流しながら、私に抱きついてきた。本当に何があったというのだ？

「私……四葉さんを傷つけた……だから……」

「一体何があったんだ!?!四葉は……」

私は泣きじゃくるひなたを落ち着かせようとしていると、そこに友奈たちもやってきた。

「若葉ちゃんが……ひなたちゃんを……」

「……痴情のもつれてやつかしら？」

「何だ？喧嘩か？」

「若葉さん、何があったのかわかりませんが、謝ったほうが……」

「ち、ちがう。話を聞いてくれ」

私は皆に誤解を解いていると落ち着きを取り戻したひなたに何があったのか聞いた。それは四葉のことだった。

「四葉が……神を宿した人間だって……」

「はい、姫野家の書物にそう書かれていました」

「それでショック受けて……」

「四葉さん……」

あいつからしてみればショックだったのだろうな。今まで普通に暮らしていたのに、今更普通の人間じゃないって言われて……

すると友奈は何故か落ち着いた顔をしていた。

「大丈夫だよ」

「友奈……」

「私は四葉ちゃんは何だって、今までと同じ仲間友達だもん」

「そうね……高嶋さんの言うとおりね」

「そうだな。あいつが神様だって私達の仲間に変わりないんだからな」

「うん、それだけ変えちゃ駄目だよね」

みんなの言うとおりだ。四葉が何だって私達の仲間に変わりない。それだったら私達がするべきことは……アイツを探すことだ

「探しに行こう。そして四葉に私達の思いを伝えよう」

皆で四葉を探そうとした瞬間、突然端末からアラームが鳴り響いた。こんな時に敵が

……

四葉SIDE

私は樹海に来ていた。遠くの方でみんなが戦ってる。私も戦わないといけないのに……

「どうすれば……」

何故か戦う意志が持てなかった。神を宿しているのに救えなかった私が……勇者になっても……

『そんなことありませんよ』

突然誰かの声が聞こえ、辺りを探すが誰もいなかった。するとまた声が聞こえてきた。

『誰も救えないってことはないですよ』

「誰？」

『私は貴方に宿る神……ヒメノです』

「ヒメノ……」

『貴方は確かにあの日、両親を救えなかった。だけどそれは私のせいでもありません』

神様のせいって……あの時、私がこの力を知っていれば……

『私には天の神々からすべての人類を守る力はありませんでした。ただ貴方を守るだけの神様……でも貴方だけは違う』

突然私のポケットから勾玉が飛び出し、赤い光が灯った。これって……

『貴方はこれから先、勇者として……生き残った人を……今あそこで戦ってる仲間を守る力があります。違いますか……』

守る力……そうだよ。昔の私だったら怖くて逃げ出していたかもしれないけど、今の私は……みんなを守る力がある

「……ありがとう。神様……私、頑張るよ」

ゆつくりと歩き出し、みんなの所へと向かった。そうだ、過去のことを気にしていた

ら駄目だ。今するべきことは……みんなと一緒に……

「力を貸してね。切り札発動!!」

変身すると同時に切り札を発動させた私、黒い神秘的な衣装に変わり、体中に勾玉が巻きつかれ、両手には弓と剣を持った姿……これが鬼神リヨウメンスクナ。

飛び上がると同時に持っている武器を全部使って、みんなを取り囲んでいるバーテックスを撃退した。

「四葉……」

「お待たせ。若葉ちゃん……」

「四葉ちゃん、あのね、私達……」

友奈ちゃんが無か言いかけたけど、私はそれを遮るように襲ってきた敵を切り裂いた。

「大丈夫だよ。みんなの事わかってる。私がどんな存在でも、きつと皆が受け入れてくれるって……」

バーテックスが一箇所に集まり、進化しようとしていた。私は体に巻き付いた勾玉を全部引きちぎり、バーテックス目掛けて発射し、命中したと同時に爆発した。

「私は勇者として……ううん、みんなの守り神として戦う……それが私だよ。友奈ちゃん」

「……………うん、そうだね」

「四葉……………行こう」

私たちは一気に駆け出すのであった。

戦いが終わり、宿舎に戻るとひなたちゃんが私のところへ駆け寄り……………

「ごめんなさい。私……………」

「ううん、気にしないで……………ありがとうね。私の事調べてくれて……………」

「でも……………」

「それに逃げちゃったのは、自分が情けないからで……………謝るのは私の方だよ。ごめんね」
私がそう告げた瞬間、ひなたちゃんは私に抱きついてきた。どうすればいいのか困ったけど、ひなたちゃんはすぐに笑顔で……………

「これからも一緒に……………」

「うん、戦うよ。勇者として、守り神として」

……………こうして私はわたしのことを知り、皆を守ることを誓うのであった。だけど……………私の

力
つ
て
ど
う
す
れ
ば
発
動
で
き
る
の
だ
ろ
う
？

08 力の使い方

今日は皆で温泉に来ていた。これまでの戦いの功績もあつて、大社が私たちに休息をくれたみたいだけど……

「うーん」

私の目の前には小石、輪ゴム、クリップが並べられていた。どうにも上手くいかないな

「どうかしたんですか？ 四葉さん」

「さつきから唸ってどうしたんだ？ トイレでも我慢してるのか？」

「タマっち先輩!？」

「杏ちゃん、珠子ちゃん、ちよつとね。私の力について悩んでるの」

「四葉の力って、何でもないものを武器として変える力だっけ？ 便利だよな、なんでも武器にできるんだろ」

「それでもないんだよね」

「もしかして力の使い方がわからないんですか？」

「そう」

自分のことを知ってから、何度か試してみたけど全然発動できない。この勾玉の時は多分、命の危機を感じたから発動できたんだろうけど……

「今後のために武器を増やしておきたいんだけど、全然駄目だよ」

「あの四葉さん、武器は増やさなくても……」

「そうだよ。私達が力を合わせれば何とかなるって」

それはそうだけど、だけど私は皆の守り神になるって決めたんだ。だから頑張ってるって決めたんだけど……

「ん？お前たち、温泉に入りに行かないのか？」

気がつくとき若葉ちゃん、ひなたちゃん、千景ちゃん、友奈ちゃんも温泉に入りに行くうとしていた。私も色々と考えすぎて頭が疲れちゃったから少し休憩しよう

その後みんなで温泉に入ったり、ゲームをして遊んだりして楽しい夜を過ごしていた。

だけど私はもう少し力の使い方を調べるため、夜風に当たりながら適当なものを武器に変えようとしていた。

「駄目か〜」

「あら、どうしたんですか？ 四葉さん」

ひなたちゃんの声をかけてきた。どうしたんだろ？ もう遅い時間なのに……

「眠れないの？」

「ううん、ちよつと目が覚めちゃって……窓の外から四葉さんの姿が見えたから……」

「そっか」

「四葉さんは寝ないの？」

「うん、神様の力を使いこなそうとしてるんだけど、中々ね……」

「神様の力……無理はしないでください」

「無理はしないよ。でも」

「……最近胸騒ぎがしている。下手すれば誰かが死んじゃうかもしれないんだ。だから……私が……」

「あっ!？」

「どうしたんですか？」

「何となくですけど力の使い方がわかったかも……ひなたちゃん、いらぬ手鏡とか持たない？」

「え、私は持たないですけど、旅館の人に聞けば……」

私はひなたちゃんを連れて、旅館の人にいらぬ手鏡がないか聞くのであった。もしも私の考えが正しければ……きつと……

皆と温泉を楽しんでから数日後、敵がまた襲ってきた。だけど今回は今まで以上に数が多い。

「千景ちゃん、大丈夫？」

「何とか……今回は進化体はいないけど数が多いわね」

「今まで以上にしんどいことになるかもしれないけど、これぐらいタマに任せタマえっ
!!」

「タマっち先輩、無理しないで」

お互い背中合わせにしながら話している中、私はこの場にはいない若葉ちゃんと友奈ちゃんに気がついた。

「二人がいない？もしかして……勾玉よ！つながれた鎖を解き放ち、撃ち貫くものになれ!!」

無数の勾玉を私の周りに現れ、回りにいる敵を撃ち貫いていく。何となくだけと思っただ通りに形状を変えられる。

「……なあ、四葉、今の……」

「えっ、格好良いでしょ」

「えっと……」

「本人が気に入ってるならいいんじゃない？」

「何だか皆が微妙な反応をしている。いいじゃん、かつこいいじゃん……」

いや落ち込んでる場合じゃない。

私は敵の包囲を抜け、全体を見渡せる場所まで行き、敵の動きを見渡した。敵が二つの場所に集まっている。一箇所は私達がいた場所。もう一箇所にはもしかして若葉ちゃんと友奈ちゃんが……

「敵も馬鹿じゃないってことだね。それだったら……」

私は勾玉を鞭に変え、大きく振り回した。

「みんなああ————頭を下げてええええ——！！」

そう叫ぶと同時に、囲んでいる敵に向かつて鞭を横に薙ぎ払った。勾玉の長さも自由に換えられ、それに回した事で威力も強くなっている。

敵は全滅。私は直ぐ様若葉ちゃんの所へと行くとそこには傷だらけの若葉ちゃんと友奈ちゃんの姿があった。

09 再起

あの戦いで友奈ちゃんは、大怪我を負って、現在入院している。若葉ちゃんは千景ちゃんにある事を言われて落ち込んでいるみたいだ。

そんな中私は自分の部屋で訓練をしていた。

「出来た……これで今度こそ……」

私は手鏡を武器に変える訓練をしていた。あの戦いで間に合えばよかったのだろうけど、今度こそはきつと……

『……すまない。四葉、いるか?』

「いるよ。勝手に入ってきていいよ」

玄関の方から若葉ちゃんの声が聞こえ、部屋にはいるように言うと若葉ちゃんはまだ落ち込んでいた。

「まだ千景ちゃんに言われたこと、気にしてるの?」

「……正直、今まで戦ってきた理由を否定されたからな……堪えたよ」

「若葉ちゃんは復讐のために戦ってたの?」

「……殺された人々の怒りと悲しみを奴らに返すために、戦場に立つてきた。だけどそ

れを否定されたら私はどうすればいいのか……」

復讐か……私も復讐のために戦っていたのかもしれないな。お父さんとお母さんを殺したバーテックスを憎んでいた。

「ただ今は皆を守りたい……勇者の守り神として、一緒に戦いたいと強く思っている。ひなたちゃんは何か言われなかったの？」

「ひなたには自分で答えを探すしかないって言われた」

自分で答えをか……ひなたちゃんらしいかな。私もひなたちゃんと同じ意見だ。これは自分で解決するしかないのだから……

「若葉ちゃん、自分を一度見つめ直すか、周りを見つめ直したほうがいいよ」

「自分と周りを……」

「きつと若葉ちゃんなら見つけられるから……」

「あ、ああ」

若葉ちゃんはそのまま自分の部屋に戻っていった。きつと若葉ちゃんなら答えを見つけられるよ。私がそう信じているから……

次の日、私とひなたちゃん二人で大社に来ていた。ひなたちゃんは神託の儀を行うために、私はどうと大社が用意してくれた剣型のアクセサリーを受け取り、ひなたちゃんのことを待っていた。

このアクセサリーはもしかしたら今後のために使えるかもしれないと言われた。

「やあ、姫野さん」

「えつと……神宮さんでしたっけ？」

ひなたちゃんを待っていると千景ちゃんの彼氏である神宮螢さんに声をかけられた。この人、大社の重役であるけど、普通に話してもいいものか……

「この間戦いがあったって聞きましたけど、千景さんは大丈夫ですか？」

「怪我はそこまで大きくは……」

「いえ、僕は……そうか、まだ気づいていませんね」

「何がですか？」

神宮さんは何かを知っているのかな？もしかしてかなり重大なことだったりするかもしれない

「千景さんに伝えておいてください。何かあったときは僕が助けになると」

「そういうのは自分で言ったほうがいいですよ。神宮さん」

「そうしたいですけど、今はやるべきことがあるので……それではまた」

神宮さんはそう言ってどこかへ行くのであった。あの人って、本当に何者なんだろうな……どこまで知ってるのかな？

「お待たせしました」

巫女服姿のひなたちゃんが戻ってきた。どうやら神託の儀は終わったみたいだ。

「どうだったの？」

「……みんなに後で話すべきなのでしょうが……四葉さんには今伝えます。敵の総攻撃が迫っています。数もこれまで以上に……」

「……そっか、勝てるかな？」

「それは……」

ひなたちゃんが答えようとした時、端末にメッセージが入った。メッセージは若葉

ちゃんからだった。

「『もう自分ひとりで復讐のために戦わない。今を生きる人々のために、皆と戦う。私が見つけた答えだ』だって」

「これならきつと……」

「うん、皆となら絶対に勝てるはずだから……」

私とひなたちゃんは笑顔でそう言うのであった。そして私も急がないとな……3つめの武器を作るのを……

10 決戦と新たな旅立ち

若葉ちゃんが再起してから一週間が経ち、私たちはこれまで以上の数である敵と対峙していた。

「敵はこれまで以上、みんなで力を合わせて、四国を、人類を守るぞ!!ファイター!!」
「「「「「おおー!!」」」」」

円陣を組み、私たちは気合十分だった。それに今回は杏ちゃんが考えた作戦もある。その作戦は役割分担をしっかり行い、丸亀城の正面、東西に勇者を一人ずつ配置し、杏ちゃんと勇者1人は後方で待機するということだ。そして私はと言うと……

「四葉さん、作戦通りに」

「了解!!」

私は勾玉を鞭状にし、思いっきり敵を撃退していった。私の役目は攪乱、殲滅の二つ。私の攻撃で敵の動きを乱しつつ、敵を撃退。前衛に立った勇者たちは動きが乱れ敵を倒していくというものだった。

「四葉さん、東側を一緒に!!」

「行くよ!!」

杏ちゃんとタイミングを合わせて、遠距離からの攻撃で数を減らしていく。それに伴い疲労した若葉ちゃんと千景ちゃんの二人を交代させられる。サポートメインだけど、守り神としては十分な役割だ

しばらくすると敵の動きが変わってきた。これって集まってきている？

「どうやら進化体みたいだな。だが!!」

若葉ちゃんは居合抜きで進化体を切り裂いた。進化したてで脆いかと思ったけど、何だか二体に別れていた。

「二体!？」

若葉ちゃんが二体の進化体に囲まれてしまった。ここは直ぐ様助けないと思った瞬間、どこからともなく放たれた炎に二体の進化体は焼き尽くされた。炎は円盤状の何かを包んでいった。あれって、球子ちゃんの？

「どうだ!! 輸入道の力は!!」

「タマ、頼りになるやつだ」

「だけどこいつは焼き尽くすのは難しいぞ」

球子ちゃんの言うとおり、残ったバーテックスが一箇所に集まっていく。あの大きさはこれまで以上の……普通だったら怖んだりするんだらうけど、今の私たちは怯むなんてことはない。

「杏ちゃん!! 敵を攪乱するよ!」

「はい!」

私は手鏡を取り出すと同時に、大型進化体の周りに無数の鏡が現れた。杏ちゃんは鏡のひとつに何十本もの矢を放った瞬間、鏡に当たった矢が反射し、敵を貫いていく。しかも矢は消えること無く、無限に反射し続ける。これが私の二つ目の武器の能力。守りと攻撃を兼ね備えた鏡だ。

「若葉ちゃん!! みんな!! 今だよ!!」

「[[[[ハアアアアアアアアアアア!!]]]]」

五人が同時に大型進化体に向かって、攻撃を繰り出した。五人の勇者たちの攻撃を喰らい、大型進化体は塵になって消えていった。

「勝った……私達……勝ったんだよね……」

勝利に安堵した私だけど、突然意識が遠のいていった。なんだろうコレは……私に何が……

『戦いはひとまず終わりです。ですが、貴方が本当に守り神となりたのであれば……一人の勇者と一人の巫女を救う必要があります。そのための力は貴方は持っているはずですよ』

この声……ヒメノ様の声……

「四葉、さつきの……四葉？」

「あれ？四葉ちゃんがないよ」

「勝手にいなくなるってことないわよね」

「杏、近くにいたから見てただろ。何処に行ったんだ？」

「そ、それが急に四葉さんが倒れると同時に……消えちゃったんです」

「一体何が……」

気がつくとその前は荒れ果てた神社の前にいた。ここって四国じゃない？

「みんなは？大丈夫だよね」

一体何が起きてるのかわからないけど、今は私が何処にいるのかわかるべきだ。とりあえずこの神社は何処なんだろうかと思い、調べると石碑に何かが刻まれていた。

「諏訪大社……ここって諏訪に……」

執拗に破壊されてる……ここが結界の要だとしたら、他の人達は……それに若葉ちゃんと言っていた諏訪の勇者は……

突然剣型のアクセサリーが何かに反応した。私はその反応が強い方に向かっていくとそこには二人の少女の遺体を見つけた。

「死んでる……供養してほしいからってことじゃないよね」

正直出来るかどうかかわからないけど……私はアクセサリーを一本の剣に変え、二人の

遺体に突き刺した。その瞬間、遺体が光り輝き、命が吹き返すのを感じた。それと同時にものすごい疲労感が襲った。

「うう……」

「うた……のん？」

「みーちゃん？」

「良かった。成功したみたいだね……でも私は……眠い……」

私はそのまま地面に倒れ込んだ。もしかしてかなり無茶をしたからかな？とりあえず起きたら……若葉ちゃんたちに……連絡を……

1 1 諏訪での一時

目が覚めると最初に目に入ったのは見慣れない天井だった。

「……は……」

「あつ、やつと目が覚めたみたいだね」

「あなたは……確か……」

何故か一人の女の子が私の顔を見つめていた。見覚えのあるような……たしか私は……

「そうだった……私、諏訪にいたんだっけ？」

起き上がろうとするとちよつとめまいがした。あの時、あの剣を使った後に倒れたんだっけ？ それに彼女は私が生き返させたんだった。

「吃驚したよ。バーテックスとの戦いで死んだと思ったら、眠ってただけみたいだし、それに貴方が倒れてたんだもん」

「いや、あはは……」

実際死んでも死んでも気さくな人だな……

「うたのん、あの子の容態は……あつ、起きたんですね」

「みーちゃん。大丈夫みたいだよ。あつ、そうだった。ねえ貴方の名前教えてもらって
いっ？」

「私は姫野四葉。四国で……」

「姫野!？」

私の名前を聞いた瞬間、彼女は驚いた顔をしていた。

「姫野つて乃木さんが言っていた子だよね!!一緒に勇者やってるっていう……」

「う、うん、その姫野です……あのもしかして白鳥さんと藤森さん?」

「アンビリバボー!!まさか四国の勇者に会えるなんて吃驚だよ」

「あ、あの、姫野さん。どうして諏訪に……」

「それは……」

諏訪に来た理由を話そうとした瞬間、お腹が鳴ってしまった。結構恥ずかしいな……

「あはは、そういうえば朝ごはんまだだったね。みーちゃん」

「うん、用意できてるよ」

「何だかありがとう。ご飯まで食べさせてくれるなんて……」

「いいって、食事しながらでもいいからさ。話し聞かせて」

私たちは早速食事をする事になったけど、まさか朝から蕎麦だなんて思ってた。でもお腹が空いてるから食べられるかな

「てつきり四国の勇者つて蕎麦とか毛嫌いしてるかと思っただけど……」

「偏見だよ。私はうどんも蕎麦も好きだから……」

「それで姫野さん。どうして諏訪に……」

「えつと……とりあえず長くなるけどいいかな？」

私は二人にこれまでのことを話した。四国で起きた戦いのこと、そして私の事を話した。

二人は驚きを隠せないでいた。それはそうだよ。神を宿した子だなんて信じて……

「す、凄いよ。ひめのんは凄いよ!!もしかしてひめのんの力で私達を生き返らせてくれたの」

「え、う、うん」

「みーちゃん、良かったね」

「うん、うたのん」

「何だか思っていたより反応が違うんだけど……」

「だって、乃木さんから聞いていた仲間のことを不気味に思ったり、信じられなくなったりとかしないよ」

本当に良い人だな……歌野ちゃんって……

「ひめのん」

「あの、水都ちゃん、その呼び方って……」

「えっ、うたのんが呼んでるから……」

いいのかな……

「その剣の力はあるし使わないほうが良いかもしれないよ」

「どうして?」

「私達を生き返せてくれた時、何とかというか身体の中に命が流れ込んできた感じがしたの。もしかしたらひめのんの生命力を私たちに分けたからだと思うけど……下手すればひめのんが……」

そっか……だからあの時……使用はあるししないほうがいいかな

「それでひめのんはこれからどうする? 私とみーちゃんは畑の様子を見に行くけど……」

「あー、私は四国のみんなと連絡取れないか試してみる」

「でも、通信機壊れてるよ？」

「あの、それだったら神の力を使って、あちらの巫女に……」

その手があったか……ちよつと試してみよう。

二人が畑仕事をしている間、私は水都ちゃんに言われたとおりに、神の力を使って、ひなたちゃんに通信を行ってみた。やり方はわからないけど、ひなたちゃんのことを思いながら……

『もしもし……ひなたちゃん』

『……………の声……………』

繋がったみたいだ。やり方は合ってた。もう一度呼びかけてみよう

『ひなたちゃん。聞こえる？』

『四葉さん？四葉さんなんですね』

今度はしつかり繋がったみたいだ。

『一体何処にいるんですか!!急になくなって、みんな心配してるんですよ!!』

『ご、ごめんなさい。えつと気がついてたら……』

私はひなたちゃんに今の状況を説明した。諏訪に居ること、剣で死者を生き返らせたことを……そして今、歌野ちゃんたちと一緒に居ることを……

『そうですか……死者を生き返らせる……でもそれは四葉さんの命を……』

『うん、あんまり使えないみたい……とりあえず何とかして四国に戻るよ』

『それならどこかで合流しませんか? 私達も今、生存者確認などのために遠征に出かけています』

『そうなの?』

『はい』

それだったら合流場所を決めて、私もそこに向かわないと

私はひなたちゃんと合流場所を決め、通信を切った。きつとみんな、心配してるだろうな……

歌野ちゃんたちが畑仕事を終わらせ、私は二人にここを出ていくことを話した。

「そっか、もう出ていっちゃうんだ」

「うん、みんな、心配してるだろうし……一応合流場所も決めてるから……」

「ねえ、うたのん」

「うん、みーちゃん。ねえ、ひめのん」

「何？」

「私達も一緒に行つていいかな？」

歌野ちゃんという言葉を聞き、私は驚きを隠せないでいた。一緒に行くつて……この諏訪を捨てるつていうこと？それつていいのかな？

「あの、それつて……」

「畑仕事をしながら二人で話したんだ。もう諏訪は敵の手に落ちちゃったんだつて……二人で再興をしていたらどれぐらい掛かるかわからない。それだったら……今必死に戦つてる乃木さんたちと一緒に戦おうつて……」

「でも、一時的にだよ。ちゃんとここに戻つてこようつて二人で話したから……」

「歌野ちゃん、水都ちゃん……」

「それに四国の大地に蕎麦を広めるように頑張らないとね」
「頑張つて、うたのん」

「この二人は……でもありがとうね二人共」

1 2 合流先へ

私は今、歌野ちゃんたちと一緒に遠征している若葉ちゃんたちのところへと向かっていた。交通手段はなく徒歩で行くしかなかった。

四国と違って、敵も普通にいるし、どれくらいの時間がかかるかわからないけど、私たちは勇者に変身して、先へと進んでいた。

「やあー、こういう時は便利だねーよつちゃん、みーちゃん」

「うん、これならすぐに合流先に行けるね。うたのん」

「ちよつと待って、何だか私のあだ名、変わってない？」

「ソーリー、ひめのんだと私と被るから変えたんだ」

被るっていう理由で変えていいのか……まああんまり気にしないようにしてるけど……

「よつちゃん、四国の巫女さんたちは今何処に？」

「えつと、後何日したら大阪に着くみたいだよ」

「私達もこのまま何事もなければ、すぐに乃木さんたちと合流できそうね」

歌野ちゃん、それ、何だかフラグみたいなんだけど……気のせいだよ

それから何日か進んでいくと、私たちは名古屋にたどり着いた。まだ大阪までは遠いけど何事もなく合流場所につける……はずだったのだけど……

「歌野ちゃん、ストツプ」

「どうしたのよっちゃん？」

「あそこのビル、見て」

「どれどれ……あれって!?!みーちゃん!?!」

歌野ちゃんは水都ちゃんに双眼鏡を渡し、ビルの方を見ると驚いてそのまま固まっていた。

「あれって……卵……」

「みたいだね。パーテックスってあんなふうに見えるんだね」

「歌野ちゃん、素直な感想はいいから……どうする?」

「ここは焼き払ったりとか?」

「そんな事したら、すぐに敵に囲まれちゃおうよ」

水都ちゃんの言うとおり、ここは穩便に済ませないと……

「とりあえず敵を刺激しないように……」

私がそう言いかけたその瞬間、何体ものバーテックスがこっちに向かってきていた。

「歌野ちゃん、水都ちゃんを守りながら、先に進んで!!」

「よっちゃんは!!」

「私は殿を務める!!切り札発動!!リョウメンスクナ!!」

切り札を発動し、迫り来る敵を撃退していった。別に切り札を発動させる必要はないのだけど、ある程度敵を引き付けないと殿の役目にならないもんね。

「ハアアアアアアアアアアア!!」

迫りくるバーテックスを撃退し、ついでに卵も破壊し終えた。これぐらいだったら私の役目も終わりだよ。

私は元の姿に戻り、水都ちゃんに通信をした。

『こちら姫野。今何処にいるの?』

『今、廃ビルの中にいるんですが……ちよつと……』

何だ様子がおかしい。もしかして歌野ちゃんの身に何かあったのかな?

『今から向かうね』

私はすぐに二人がいる場所へと向かうのであった。

二人がいるらしい廃ビルに入ると二人は特に怪我もなく、私のことを待っていてくれた。

「何かあったの？」

「よっちゃん、実は……」

私は歌野ちゃんが抱えているものをみた。それはボロボロの服に、体中傷だらけの女の子だった。

「死んでるの？」

「ううん、まだ少しだけど息はしてる。でもこのままだと……」

放っておいたら死んじゃうってことか。悩んでる暇はないよね。

「歌野ちゃん、後のことはよろしくね」

「了解」

「ごめんね。よっちゃん」

「大丈夫。見捨てる訳にはいかないから」

私は剣を取り出し、少女に突き刺した。私の中の何かは少女に吸い取られていく感じがするけど、私は気にせず続けた。

「ふう」

生命力を送り終わると軽いめまいが襲ってきた。二人を生き返らせた時に比べるとまだいいほうかもしれないけど……

「大丈夫？ よつちゃん」

「本当に無理はしないで……」

「大丈夫よ。それで彼女は？」

「怪我也呼吸も落ち着いてきたみたいだよ」

「なら、よかつたけど……」

この子はどうするべきか……このまま一人、名古屋に残しておくべきではないし、歌野ちゃん、この子も一緒に連れて行っていいかな？ こんな場所に一人じゃ……」

「私はOK。元はと言えば私が助けてほしいって言ったからね」

「見捨てられないもんね」

二人の了解も得たことだし、この子を連れてみんなの所に行かないと……

すると少女が目を覚ました。

「ママ？」

「はじめまして」

「……どこ？何で私は……」

「この子……もしかして……」

「よつちゃん、この子、バーテックスに襲われたショックで……」

「記憶喪失って事だね。ねえ、名前は言えるかな？」

「名前……四葉……姫乃」

「WAO、よつちゃんと同じだね」

「名字と名前を入れ替わってるけどね。それじゃ姫乃ちゃん、ここは危ないからお姉ちゃんたちと……」

「ママ……」

何で私のことをママって言いながら、抱きついてくるのかな？私ってそんなに老けてみえる？

「よつちゃん、記憶喪失からかよつちゃんのこと、お母さんだと思ってるみたいだよ」

「この歳で母親って……ハア、仕方ないか」

「ごねたってしょうがないし、私は姫乃を背負って、先へと進むのであった。」

13 合流

姫乃を連れて、私たちは大阪へと向かっていた。姫乃は記憶を失っているけど、この世界の状況について簡単にんだけど説明はした。最初は戸惑っていたけど、すぐに理解はしてくれた。

「もうすぐママの友だちに会えるの？」

「そうだよ。あと……そのママっていうのは……」

「よっちゃん、いいじゃん。その子はよっちゃんの事お母さんだっと思ってるんだしさ」

「そうだけど……まだ14歳だよ。14歳でお母さんになるだなんて……はあ」

正直子育てとかよくわからないし、こういうこと相談できる人なんて……はあ
に……どうしたものか……

というかそのうち、パパは？つて聞かれた時どうしよう？死んだって言ったら悲しむ
だろうし……ここは若葉ちゃんあたりに男装させて……

そんな事を考え込んでいる内に、目的地である大阪の街にたどり着いた。

「ここが大阪……」

「今までの街と変わらないね……」

「どこも……バーテックスは何の目的で人類を狙ってるんだらうね？」

歌野ちゃんが悲しそうな目をしながらそう告げた。歌野ちゃんの言うとおり、どうしてバーテックスは私たち人類を滅ぼそうとしているのだろうか？前にひなたちゃんに聞いたら、人類に何かしらの原因があるかららしい。だからといって滅ぼしていいものなのか……

『神樹と私は人類の可能性を信じた』

突然声が聞こえた。今のつて、ヒメノ様？私たちの可能性つて……

「どうかしたの？よっちゃん」

水都ちゃんが心配そうに私のことを見ていた。私は笑顔でなんでもないと告げるのであった。

「合流場所はここでもいいのかな？」

「うん、朝出る前に話したら、ここで合流つて言つてたから……とりあえずじつと待つていたほうが……」

あんまり動いたら合流できそうにないしつていいかけたけど、そうはさせてくれないみたいだった。

私たちの周りを囲むように何体ものバーテックスが現れた。

「水都ちゃん、姫乃のことお願いね」

「うん」

「戦いの音を聞けば乃木さん達も気がつくよね」

「そうだね。それじゃ狼煙代わりに……やりますか」

私と歌野ちゃんは武器を取り出し、迫り来るバーテックスを撃退していった。

「ハアアアアア!!」

「よっちゃん!!合わせて!!」

私の勾玉と歌野ちゃんの鞭で何十体もの敵を打ち付けていった。即興でやってみただけ、中々なものかもしれない

「流石はよっちゃんだね」

「歌野ちゃんこそ……所でちよつと気になつてることがあるんだよね」

「気になること?」

ここまで来る間、敵と遭遇しては撃退、または逃げてきたけど、四国での戦いに比べると襲ってくる敵の中には進化体の姿はなかった。これって……

「敵が油断してるって言うことかな?」

歌野ちゃんの言う通りならまだいいかもしれない。ただ私としてはずっと嫌な予感がしている。

「もしくは敵の戦力を四国に向けて温存してたりしてね」

だとしたら本当にやばい。前に襲ってきたクラスの奴がまた襲ってきたら……

気がつくのと私の目の前に敵が大きく口を開けていた。しまった!! 考えすぎて……

だけど横から鞭の一撃が放たれ、敵が消えた。

「よっちゃん、今は目の前のことに集中しよう。無事にみんなの所に合流するってことをね。考えるのは後でも出来るからさ」

「……そうだね」

今は考えるのはやめておこう。それに私たちには頼れる仲間たちが……

「ハアアアアアアアアアアアア!!」

突然空から誰かが降ってきては、迫り来るバーテックスを切り裂いた。うん、やっばり

「頼れる仲間たちがいるから大丈夫だよね」

私たちの前に五人の勇者たちが並び立っていた。どれ位ぶりの再会だろうか……

「またせた。四葉」

「迎えに来てくれてありがとうね。若葉ちゃん、みんな」

「もう心配したんだからね」

「………急に消えて、諏訪に行くなんてね」

「でも、またこうして出会えましたからいいじゃないですか」

「ほら、みんな、今は話してる場合じゃないだろ」

さっきまで不安でいっぱいだったけど、こうして皆と一緒にいるだけで不安どころか
勇気が湧いてくる

「とりあえず当面の目的は達成したから……杏ちゃん」

「えっ、はい!!」

私は無数の鏡をそこらじゅうに出現させ、杏ちゃんは鏡に向かって矢を放つと同時に
周りにいたバーテックスを撃ち貫いていった。

「今のうちに避難しようか」

私たちは一旦撤退し、ひなたちゃんがいる場所に行くところには水都ちゃんと姫乃の二人もいた。どうやらこつちも合流できたみたいだ。

「お久しぶりです。四葉さん」

「ひなたちゃん、久しぶり」

「本当に無事でよかったですけど……お聞きしたいことが……」

ひなたちゃんは姫乃のことをチラチラ見ていた。若葉ちゃん達も彼女のことを気になってる様子だった。なんて説明すればいいものやら……

「ママ、この人達は？」

うん、人が考えている時に限って……とんでもない爆弾発言を……

「おい、四葉!? こいつ、今ママって……」

「諏訪に行ってる間に……どうしたんですか!？」

「もしかして四葉ちゃんが産んだ子なの？」

「な、ななななな、何があつたんだ!？」

球子ちゃん、杏ちゃん、友奈ちゃん、若葉ちゃんの4人は驚き……

「……冷静に考えて、母親代わりみたいな感じかしら？」

千景ちゃんだけが冷静でいてくれた。本当に助かるよ……

「千景ちゃんの言うとおり、色々あって、彼女の母親代わりになってるのよ」

「……………その色々というのは劍の事も含めてですか？」

ひなたちゃんはそのことをじつと睨んでいた。まあ仕方ないよね。使わない方がいいって言われていたのだから……………でもね。

「ひなたちゃん、私は見過ごせなかったから……………」

「そうそう、短い付き合いだけど、よっちゃんは見過ごすなんてこと出来ない人だからね」

「うん、私達のことも助けてくれたから……………」

歌野ちゃんたちの言葉を聞き、ひなたちゃんはため息を付いた。

「分かっていますよ。彼女は見過ごすことはしないって言うことは……………でも、使用は控えて下さい。下手すれば……………」

ひなたちゃんが何かを言いかけた瞬間、突然ふらつき倒れそうになった。それは水都ちゃんもだ。もしかして神託かなにかが……………

「……………神樹様からの神託？ 四国にまた敵が攻め込んでくる……………」

14 その身を犠牲にしても

神託を受け、私たちは四国へと戻った。歌野ちゃんと水都ちゃんは戻ってからすぐは大赦へ行き、外のことについて話、今後私たちと一緒に行動をとにもすることに決めた。私はと言うと……

「ママ、行ってらっしゃい」

「うん、行ってきます」

姫乃に見送られながら、丸亀城に向かっていった。姫乃の今後を考え、大赦の誰かの家の養子になると言うことになったのだけど、まだどこに行くのか決まらず私と一緒にいることになった。彼女の将来を考え結果そうするべきなのだろうけど……

「本当にそれで良いのかな……」

姫乃の幸せを考えるとそれが正しいことなのか分からないでいた。

「ん？あれって……」

寮の近くにある空き地で見覚えのある姿があった。あれって歌野ちゃん？なんで畑仕事してるんだらう？

もしかして前に言っていた四国にも蕎麦を広めるって言ってたけど、まさかそのために

「一から……」

私は声をかけようとする。歌野ちゃんのそばに誰かが近寄ってきた。

「白鳥さん」

「ん？乃木さん。どうしたの？もしかして蕎麦に興味でも？」

「いや……そういうわけでは……ただ……」

何故若葉ちゃんは言いよんどんでいた。何の話をしようとしてるか分からないけど、盗み聞きは良くないよね。普通は……

二人がどんな話をするか興味があつて、私は物陰に隠れながら二人の話を聞くことにした。

「ひなたから聞いた。四葉が生き返らせてくれたんだな」

「ええ、でもよつちゃんは自分の命を掛けてただけだね」

「……正直そんなことをした四葉を怒る所んだけど、それよりもなによりも……私は白鳥さんが生きていたことが嬉しかった」

「……そっか」

「これから一緒に戦ってくれるんだろ」

「当たり前でしょ。諏訪を守りきれなかったけど、四国は絶対に救つてみせるから……」
「そうか……それじゃ白鳥さんなんて余所余所しいな。歌野って呼んでいいか？」

「もちろん。私も若葉って呼ぶよ」

二人は熱い握手を交わしていた。二人の友情のために私も守り神として頑張らないとね

丸亀城に着き、私は杏ちゃんに呼び出された。一体何の話だろうと思いつつ杏ちゃんの前に向かった。

「お待ちしました。四葉さん」

「いきなり呼び出して……どうかしたの？」

「実はと言うと……切り札のことです」

切り札の……なんでまた……

「……何回かの戦いにおいて、私以外の勇者は切り札を使用しました。その影響なのか体の不調が見えるようになってきているのは気がついていますか？」

体の不調……なんとなくみんな調子が悪そうに見えた。でも、切り札を使ってる私は特に問題はないし……

「初めての戦いの際、四葉さんは友奈さんにそれ以上ダメって言ったのは覚えていますか？」

覚えている。何故かあのときはものすごく不安を感じていた。それにみんなが使う度にその不安に押しつぶされそうにもなっていた。この不安は神の子としての何かしら感じているのだろうか？

「あくまで仮説ですが、切り札は人の身に精霊の力を宿す……何かしらの悪影響が出てくる可能性があるかもしれません。四葉さんに何の影響がないのは……」

「私自身、人外じみてるからね」

「あつ、そうは……」

「気にしなくていいよ。それで杏ちゃんはどうしたいの？」

「……………切り札の使用を控えるべきかどうか……悩んでいるんです」

切り札を控えるか……確かに何が起きるかわからない以上はそうするべきだけど、でも使わざる置けないときは……

「杏ちゃんの意見には賛成よ。それにもしも……」
「もしも?」

今更言うことじゃないよね。とりあえず杏ちゃんには改めてみんなを集めて話すべきと伝えるのであった。

それにもしものときは私がなんとかするから……剣の力を使ってから更に自分の力の使い方がわかるようになってきた。

「守り神として……頑張るから……」

数日後、私たちは樹海に来ていた。

「杏から切り札の使用は控えるべきという意見が出た。なるべく今回の戦いでは使わないようにしよう」

みんな、杏ちゃんの意見に賛成だった。何が起こるかわからない以上、使用は控えるべきというのはみんな分かっていた。

「でも、必要なときは使うしかないわよ」

「そう……ですけど……」

「千景、大丈夫だって、ようするに切り札を使わざるおえない状況にならなければ良いんだろ。タマに任せタマえっ!!」

「それって合体する前に潰しちゃうってこと? それだったら頑張らないとね」

「ぐんちゃん、それじゃダメかな?」

「……………それなら……………まあ」

合体する前に倒しちゃうか……確かにそれなら簡単だろうけど……まあ、勇者もこれで7人になったし、私も頑張れるかな

「敵が来たみたいだ。みんな、気合を入れて行くぞ!!」

若葉ちゃんの号令のもと、私たちは迫りくる敵を撃退していった。みんな、それぞれ戦う中、杏ちゃんは確実に敵を倒していつている。もしかして融合阻止のために……

「杏? みんな! あれを!」

球子ちゃんの声が聞こえ、振り向くと一部の場所で星屑が集まっている。融合しようとしているのか? それなら勾玉を分裂させて放とうと思った時、白い何かが周辺を包み

込んだ。

「融合はさせません!! 切り札『雪女郎』」

あれが杏ちゃんの切り札……猛吹雪で敵の動きを止めつつ撃退していくけど……大丈夫なのかな?

「杏、切り札を使って良いのか? お前が一番危険視していたのに……」

「私は今回が初めてですから、皆さんよりは安全かと……」

何ていうか無茶をするなくでも、これなら……

そう思った刹那、何かしらの気配を感じた。なにこれ? あの時の大型バーテックスと同じ気配……まさか!!

吹雪が止むと球子ちゃんと杏ちゃんの前にはこの間戦った大型バーテックスと同じくらいの奴が現れていた。敵も馬鹿じゃないということなのかな?

「四葉!?! 何処に行く!?!」

「若葉ちゃん、あとのことを頼める? 二人が危ないの」

「……守り神としての感か?」

「そんな所……あとは任せたよ」

杏SIDE

新たに現れた大型バーテックスの尻尾の先端の針を喰らい、腕が上がらなかつた。ギリギリの所でタマつち先輩が切り札を使って助けてくれた。

「大丈夫か？杏」

「タマつち先輩……」

「あとは休んでろ。ここは私が……全開火力だ!!」

大型バーテックスに攻撃を当てるけど、全く効かず、バーテックスの尻尾に叩き落され、切り札が解除されてしまった。

「このままだと……」

なんとか起き上がろうとしたけど、落下のダメージで動けない。大型バーテックスはそんなのお構いなしと言わんばかりに巨大な針で攻撃を仕掛けてきた。もうだめかと思つた瞬間、

「やらせるか!!」

タマつち先輩が攻撃を防いでくれた。でも、タマつち先輩もダメージが大きいはずなの……

「逃げ……て、逃げて、タマつち先輩」

「逃げられるわけないだろ。杏を置いて……」

「タマつち先輩……」

「こいつをぶつ倒したら、祝勝会としてみんなで遊ぶぞ。遠征の時みたいにキャンプとかでもいいし……今度は歌野と四葉と水都と姫乃も一緒に……」

何度も攻撃を防いでいくタマつち先輩。だけどこのままじゃタマつち先輩が……

「くっ!?!」

よく見ると旋刃盤にヒビが入った。だめ、このままじゃ……誰か……神様……

バーテックスの攻撃が私達に迫りくる瞬間、何かが私達と針の間に入り込み、針を破壊した。そして私達の隣には……

「それじゃその願いを叶えてあげるよ……なんてね」

「四葉……」

「四葉さん……」

「二人とも休んで、ここは……」

四葉さんは手鏡を取り出し、切り札を発動させた。以前見たときの切り札とは違い、白く神秘的な衣装だった。これって切り札なの？

「切り札発動!! 『ヒメノ神』」

15 末路と現実

やってみるものだ。神の力がそれなりに使いこなせるようになったから、切り札としてこの姿になった。

私は迫りくるバーテックスの尻尾を鏡で防ぎ弾いた。このサイズだと一人で戦うのは難しいけど……

私はバーテックスの周りを無数の鏡で囲んだ。鏡には私の姿が映し出され、その中から無数の私が現れた。

「勾玉よ。やつを貫きなさい!!」

無数の勾玉がバーテックスの身体を貫いた。中が弄くられるのが苦しいのか、何とか逃げ出そうとしていた。仕方ない、とどめを刺すか

「バラバラになりなさい」

無数の私が同時に勾玉を引くと、バーテックスの身体がばらばらになった。これでは残りの敵を……

「かはっ!」

残りの敵を倒そうとしたけど、突然私は血を吐いていた。なんで……それに何だか力

が……

「四葉さん!？」

「あんず……ちゃん……すぐに毒を……」

駆け寄ってくる杏ちゃん。私は解毒のため、剣を腕に突き刺した瞬間、意識が消えた

気がつくと自分の部屋にいた。だけど自分の部屋だとは思えない。そして部屋の中に巫女装束姿の女の子が一人いた。

「あなたは……」

女の子は悲しげな表情で私を見つめていた。この子、どこかで会ったことがある気がする。一体何処で……

「こうして会うのは初めてだね。四葉」

彼女の声を聞いてすぐにこの子が誰なのか気がついた。そつか会ったことがあるはずだよ

「ヒメノ様だよね」

「はい」

なんで私がこんな場所に来て、彼女と話しているのかわからない。それに彼女はずっと悲しい顔をしている。

「四葉、貴方はずっと戦い続けました。神の力も扱えるほどに……」

「うん、剣の力で人を癒やし、切り札も貴方の力を宿すことが出来るようになりました」
「……………その結果、貴方は死にます」

死ぬって……なんでそんな事をいきなり言われなきやいけないの？と普通だったら怒鳴り散らしたりするのだろうけど、彼女がそんなことを言う理由はわかっている。

「人の身で神の力を使えば使うほど、人の身では耐えきれず、いずれ死にます」

「なんとなく分かってたことだよ。剣を使っただけだからね。でもね、そうしなければならなかったから……」

私は笑顔でそう告げるが、彼女はまだ悲しそうにしていた。大丈夫、これから先の末路を知っても、私は最後まで戦い続けるから……

「ごめんなさい。こんな運命を背負わせて……」

「いいんです。みんなの守り神になれるのなら……」

千景SIDE

大型バーテックスとの戦いで、姫野さんは意識不明の重体。伊予島さん、土居さんの二人は命に別状はなかったとは言え、治療のためこれから先の戦いには参加できない。そして大社からカウンセリングを受けるようにとの指示が入っていた。理由として

は伊予島さんが言っていた切り札の影響についてだろうけど……カウンセリングで何が分かるわけは……

「千景さん」

「……………何しに来たの？」

病院の待合室で一人で待っていたら、彼に出会った。

「カウンセリングですか？」

「上里さんからある程度のことば聞いているわ。あなた、大社の人間なのよね」

「ええ、そうですよ」

「何も知らない人々に嘘をつく気分はどういう気分かしら？」

私がそう言った瞬間、何故か彼は悲しそうな表情をしていた。一体急にどうしたのだろうか？

「嘘というのは、勇者たちが遠征に成功したということですか？あれは僕がというよりも他の幹部の仕業ですよ。少しでも人々に希望をもたせたいからっていうね」

希望……聞こえは良い。だけど……いつかはバレるんじゃないの？

「……………それにそんな人達の思惑にはずれて、人々は気がついてますよ」

「どういう……意味？」

彼の言った言葉がよくわからなかった。だけど彼は立ち上がり、どこかへ去っていこ

うとしていた。ここで呼び止めるべきなのだろうけど、何故かそれができなかった。

『あの男はうそつきよ。あの男が言っていることは全部ウソ』

何故か頭のなかに声が響く。一体この声は……

若葉SIDE

「……………四葉」

病院のベッドで眠り続ける四葉。医者が言うには度重なる戦いの疲労で眠り続けているとのことだけど、大社やひなたの見解では四葉は神の力を使い続けた結果らしい

「若葉ちゃん、四葉さんはまだ……」

「ああ、眠り続けてる」

「……………剣の力で自分自身の生命力を他者に与え、ましてや切り札として神の力を使い

……………もしかしたら……」

「ひなた、それ以上は言わないでほしい。あいつはこの事をわかった上で杏や球子をおけるために自分を犠牲にしたんだ」

「……………」

私は眠り続ける四葉の頬にそつと触れた。守り神としてみんなを守りたいって願っていた。だけど四葉のことは誰が守ってやれば良いんだ。決まっている……

「これからは私達がお前を守るからな。四葉」

決意を固めた私。ひなたもどこか満足そうにしていた。

「それでこそ若葉ちゃんです」

「きつとみんなも同じ思いのはずだ」

改めて確認するようなことじゃない。私はそう願っていた。

「それと若葉ちゃん、大社から新たに判明したことです、切り札のことです」

「切り札の？」

「大社が改めて調べた結果、切り札は肉体のダメージだけではなく、精神的にもダメージが現れ、攻撃性の増加や自制心の低下が見られ、言語等にも大きく現れるそうです」

「……杏が思っていたとおりでな。だが、これから先の戦いであるクラスのパーテックス。それよりも大きなやつが来る可能性がある」

「必要に応じて若葉ちゃんと友奈さんに実装された切り札を使用するということですよ」

か」

「ああ……」

私の『大天狗』友奈の『酒吞童子』今後のことを考えるとそれを使う必要があるはずだ。だけど負担が大きい……

「友奈には？」

「まだ……」

千景SIDE

姫野さんの様子を見に行くと病室から乃木さんと上里さんの声が聞こえてきた。扉越しだからよく聞き取れないけど……

『友奈には……』

『仕方ないことです……彼女は』

『下手すれば……』

一体何を話しているの？高嶋さんのこと？

『二人は大切な友人である高嶋友奈を犠牲にするつもりよ』

またこの声!?!一体誰なの？

『まだ気がつかないの?』

咄嗟に後ろを振り向くとそこには私がいた。私は笑みを浮かべていた。

『彼女たちはより強い敵との戦いに向けて、高嶋友奈に危険な切り札を使わせようとしている。自分たちが助かるために……』

そんなの嘘、嘘に……

『彼女たちは所詮大社の言いなり……それでいいのかな?』

そんな事は……そ……んな事……

16 堕ちたもの

千景SIDE

もうわからない。何が正しいのか、何を信じれば良いのか……

『乃木若葉たちはうそつき、上里ひなたはうそつき。このままだと貴方の大好きな高嶋友奈が殺されちゃうわよ』

違う。乃木さんたちはそんな事言わない

『それは本当に信じられるの？貴方は前から彼女たちのことが大っ嫌いだった』

そんなこと……そんな訳ない

『周りの人たちだつて上っ面はあなた達を褒めているけど、本音は……』

私は自分の声から逃げるように無我夢中で走るのであった。

気がついたら自分の部屋にいた。あの声が聞こえなくなった。このまま眠ってしまいたい。だけどあの声が言っていた言葉が頭によぎった。

『周りの人たちだつて上つ面はあなた達を褒めているけど、本音は……』

あの言葉はただの嘘。そう思いたく、私はネットで調べ始めるとあるサイトにたどり着いた。

そこにはこの間の戦いで現実世界で被害が起きたことだけじゃなく、私たちの悪口まで書かれていた。

「なんで……なんで……」

なんで必死に戦っていた土居さんや伊予島さんの悪口まで……それに今も眠り続けている姫野さんのことまで……

「どうして……」

『それが真実。誰も信じられない。乃木若葉たちは嘘をついている。貴方を褒め称えてきた人たちはあなた達を蔑む』

もう私の耳に入ってくるのは自分だけの声だった。そしていまするべきことは……

「千景、入るぞ」

私は部屋に入ってきた乃木さんを見て、勇者に変身し、斬りかかるのであった。

若葉SIDE

四葉の見舞いに来なかった千景の事が気になり、千景の部屋に入った瞬間、千景がいきなり切りかかってきた。

私は咄嗟に避け、勇者に変身した。

「どうしたんだ千景!!」

「うそつき……嘘つき!!」

切りかかってくる千景。私は生太刀で受け止めるが……様子がおかしい。何が……

「まさか……精霊の……」

「聞いたわ。あなた達は高嶋さんを利用して……犠牲にするつもりだって……」

「千景!!よく聞け!今のお前は……」

「黙れえええええ!!」

大鎌の一撃を受けきった瞬間、思いっきり私を蹴り飛ばした。外まで蹴り飛ばされ、私は周辺に人がいないか確認した。こんな状況見られたくないな……

「まずは貴方を殺して……その次は上里さん……そうすれば高嶋さんを助けられる」

「千景……話を聞かないなら……」

何とかして止めないと……このままだと千景が壊れてしまう。

私は生太刀を構えた。次の一撃をかわし、千景を気絶させる。今はそれしか方法は

……

「グンちゃん？」

突然声が聞こえ、振り向くとそこには友奈がいた。友奈は変身し、私と千景の前に飛び出した。

「どうしたのグンちゃん!? 若葉ちゃんと喧嘩してるの?」

「高嶋さん、乃木さんは貴方を犠牲にしようとしている。私は貴方をたすけ……」

「違うよ!! 若葉ちゃんはそんな事するわけないよ。グンちゃん、落ち着いて……」

友奈の言葉を聞き、千景から感じていた殺気が消えた。これで暴走は止められたのか?
?

「落ち着いて、暴力で解決しちゃダメ。ちゃんと話し合おう。言葉で喧嘩しよう」

友奈は優しい笑顔でそう問いかけながら、千景を抱きしめた。友奈には感謝だな

「……………がう」

「えっ?」

落ち着いたと思った瞬間、千景は友奈を突き飛ばし、大鎌を構えた。

千景SIDE

「千景さん、落ち着きましたか？」

「……………どうして貴方が……………」

「だって、貴方のことを守りたいから……………」

私は自分がしたことを今更後悔した。乃木さんたちを信じられず、高嶋さんも信じられなかった。そして彼の腕を……………」

「私……………私は……………」

私は傷つけてしまった。彼のことを……………もう取り返しが……………」

「千景さん、覚えてないですが、僕は一度貴方に助けられたんですよ」

「いつ？」

「貴方が初めて大葉刈を手にした時、バーテックスに襲われそうになっていた時にですよ……………」

「覚えてない……………あのときはただ呆然として……………」

「ただど確かに誰かがいた気がした。それが彼だったの？彼は苦しそうにしながら優しい表情をしていた。」

「千景さん、誰も信じられなくっても、僕だけを信じてもらえませんか？ 貴方を苦しめるものは……僕が救いますから……だって僕は」

彼は何かを言おうとした瞬間、そのまま倒れ込んだ。血がたくさん出ている……このままじゃ……

「ねえ、ねえ、起きて……起きてよ。蛍……」

17 終わる恋

千景SIDE

気がついたら私は病室のベッドで眠っていた。あのあと私は大声で泣き叫び、そのまま気を失ったみたいだった。

「起きましたか？」

病室のドアの前には上里さんが立っていた。上里さんは私を思いつきり引つ叩こうとするが……

「ここで貴方を引つ叩いたら……神宮さんには悪いですよね」

「……………彼は……………」

「郡千景、大社から知らせを預かっています。人々に見られなかったとは言え、勇者に対する暴行、大社幹部に対しての暴行……以上のことを踏まえて郡千景は勇者として失格です」

「……………」

当然の結果だ。精霊の影響とはいえ私は沢山の人を傷つけた。反論なんてするつもりはない。

「そしてこれから先、郡千景として生きていくことは許さないということです。ご家族には貴方は死んだと伝えていきます」

「……………誰かに首でも切られるのかしら？」

「……………千景さん」

「これからは郡千景ではないですよ」

突然聞き覚えのある声が聞こえた。私は声の聞こえた方を見るとそこには彼がいた。彼は私に近づいてきた。

「どうして……………死んだんじゃ……………むぐつ」

何故か彼は私にキスをしてきた。突然のことで何とか引き剥がそうとしたけど、何だかだんだん力が抜けてきた。

「んん、んむ、んんんん」

「ふう」

「神宮さん、ひと目を気にして下さい」

「ああ、ごめん」

腰が抜けてしまった。なんで彼が生きているの？

「どうして……………」

「それは彼女に助けられました」

彼は剣型のアクセサリーを私に見せた。これって姫野さんの武器のひとつ、能力は人を癒やす……それって……

「千景さんが気を失ったあと、白鳥さんと水都さんがそれを持ってきたんです。二人は突然光りだしたって言ってましたけど……」

「彼女が守ったってこと？」

「そうなりますね。それと大社からの通達、続きを読みますね。千景さん、貴方はこれから神宮千景として幸せになつて下さい」

「……………神宮千景……………はあ!？」

それってつまり彼と結婚しろってこと? いや、もう結婚しているということなの? 何が何だかわからなくなってきた。

「それでは私はお邪魔なので失礼しますね」

「ちよつと待って」

私の声を無視し、上里さんは部屋から出ていった。正直二人つきりにしてほしくないのだけど……

「千景さん、一応まだ結婚してないですよ」

「人の心を読まないでほしいのだけど……」

「形式上は許嫁として僕の家に住むことになりました」

許嫁として……だからって……

「私は貴方のことを傷つけた。幸せにするなんて……」

「前に言ったじゃないですか？ 貴方が僕のことを幸せに出来なくつても、僕が幸せにするって……」

「………そうだったわね」

何故か私の心は嬉しい気持ちでいっぱいだった。こんな気持は初めてだ。

「千景さん、結婚してくれませんか」

「………約束守ってね」

私のことを幸せにしてくれるって約束してくれたのだから……

彼は笑顔で力強く……

「はっ」

「………あとその……」

私はそつと目を閉じた。彼はそつと私の肩に触れた。これで私の恋は終わる

「正直、キスだけで終わらす気ないですよ」

「………好きにしているから」

キスをされ、ベッドに押し倒され、彼は私の着ている服を脱がそうとした。

「千景!!」

そんな時だった。突然乃木さん、土居さんたちが思いっきり扉を開けて入ってきた。「目が覚めたってひなたから聞いたぞ」

「だいじょうぶ……か？」

二人は今の光景を見て、固まっていた。そして固まった二人の後ろから伊予島さんと高嶋さんの二人が顔を赤らめていた。

「タマっち先輩、若葉さん……」

「邪魔しちゃ悪いよ。ごめんねグンちゃん。出直してくる」

「……………ねえ、大葉刈持ってきてくれないかしら？」

色々と邪魔してくれたお礼をしないとイケなくなつた。彼はというと笑顔で

「ダメですよ。千景さん」

四葉SIDE

「間に合ったのかな？早く確認しに戻らないと……」

何だか嫌な予感がして、剣だけ持っていつてもらうようにしたけど……私はいつになつたら目がさめるのかな？

「それは大丈夫ですよ」

「あの、ヒメノ様。私はいつになつたら戻れるんですか？」

「………姫野四葉、よく聞いて下さい」

「何？」

「神の力を使い続けた貴方は、もうすぐ死にます。そして私は貴方に力を与え続けた結果、消滅します」

「消滅………」

それって私のせいだよ。何だか申し訳ない。

「だけど勇者たちは戦い続ける。貴方はどうしますか？」

「もちろん、戦うよ。死ぬまで……」

そう決めたんだ。それに守らないと……

「……………貴方にある手段を教えます。それを行えば今、このときだけは敵を倒せます。だけど……………」

「早く言ってくれない？その方法って？」

ヒメノ様は悲しそうにしながら、口を開いた。

「貴方が守り神となることです」

18 決心

目が覚めると最初に目に入ったのは見知らぬ天井だった。ここは……病院？

「……………どれくらい眠ってたんだろ？」

「まる二日ぐらいだよ。よっちゃん」

声が聞こえた方を向くとそこには歌野ちゃんと水都ちゃんと、ひなたちゃんの三人がいた。というか2日も寝ていたなんて……あっちで話しすぎちゃったかな？

「身体の方は大丈夫ですか？」

「うん、何とか……あれ？」

三人に元気な姿を見せようとしたけど、何故か足が動かなかった。あの大型バーテックスとの戦いの時は特に怪我とかがしてないけど……これってアレが原因だよな

「よっちゃん、もしかして足が動かないの？」

「うん、あの時の戦いの後遺症かな？もしくは誰かを助けた時の……」

「……………四葉さん、気がついてるのですね」

ひなたちゃんは真剣な表情でそうつぶやいた。ひなたちゃんも私の身に起きていることに気がついてるんだ。神の力を使い続けた結果、もう私の身体は限界を迎えようと

していることに……

「ひなたちゃん、悪いんだけどみんなに話さないといけないことがあるの。今このときだけ戦いを終わらせる方法について……」

「……分かりました。若葉ちゃんたちは今……」

若葉ちゃんたちがいる場所を言おうとした時、ひなたちゃんの端末にメッセージが入ったみたいだ。ひなたちゃんはそれを確認すると……

「何だか厄介なことになっているみたいですね」

「厄介なこと？」

歌野ちゃんに車椅子に乗せてもらい、水都ちゃんがみんながいる場所まで車椅子を押してくれた。四人で集まっている場所に行く……

「……何事？」

私達四人が口を揃えてそう言った。何故か険しい顔をしている千景ちゃんの前に、若葉ちゃん、球子ちゃんが正座し、友奈ちゃんと杏ちゃん、それと片腕がない神宮さんが苦笑いしていた。

「神宮さん、何があつたんですか？」

「そうですね。実は……」

神宮さんがありのまますべてを話した。どうやら秘め事中を妨害されて怒ってるけど、でも、ごめん。ここって病院だよね？

「話はわかりました。神宮さん、千景さん、場所をわきまえて下さい。なんで病院でそういうことを始めようとしているんですか!!」

「そ、それは……」

「何というか流れで……」

「流れだからってそういうことをするのはどうかと思いますよ!!」

「は、はい」

ひなたちゃんに怒られる二人、というか私の話できるかな？

すると若葉ちゃん達が私のことに気がついた。

「四葉、お前も目覚めたのか」

「それにそれって……」

「あはは、ちよつと足が動かなくなつてね」

「足が動かないつて……」

「もしかして私達を助けた時に使つた切り札の後遺症で……」

杏ちゃんも本当に鋭いなくそのとおりでよ。だけど今はその話じゃない

「みんながここに集まつてるし、私の話を聞いてもらつていいかな？」

「四葉の話？」

「別にいいけど、彼はどうなの？」

千景ちゃんが神宮さんの方を見てそう告げた。一応大社の人だから聞いてもらいたい。別に拒否する理由もない。私は神宮さんに聞いてもらうように言い、私はあの世界で聞いた話をみんなに伝えた。

「私、眠つてる間にね。私の身体に宿つた神様と話したの。神様の力を使いすぎて私はもうすぐ死んじゃうみたいなの。おまけに力の使いすぎで、宿つてる神様も消滅しちゃうんだ」

なるべく暗くならないように明るく話したけど、みんな黙り込んでいた。これはどうしたものか……だけどちゃんと話しておかないと、今このときだけ戦い抜く手段を

「それでね。私は最後まで戦いたい。それを言つたら、神様からある方法を教えてもらったの。最後まで戦える方法、それは私が神様になること……」

「神様に……」

「なるって……」

「球子ちゃん、杏ちゃん、言葉のとおりだよ。人から神になるんだよ。命をかけてね」

「命って……四葉ちゃん、死んじゃうの？」

「死んで神になる。それしか方法がないの」

「貴方はそれをやるっていうの？戦い続けるために……」

「うん」

またみんなが黙り込んだ。こうなることは予想通りだね。でも私は何を言われても神になる気だ。

若葉ちゃんは立ち上がり、私の胸ぐらをつかんできた。

「四葉!!お前……」

「若葉ちゃん……私はこのまま残りの人生をただ見ているだけは嫌なの。最後まで戦い続けるために……」

「だからって……」

「ごめんね」

涙を浮かべる若葉ちゃん、それにみんなも泣きそうになっていた。ごめんね、みんな、辛い思いをさせて……

「ねえ、よっちゃん、決心は変わらないんだよね」

「そうだよ。歌野ちゃん」

「そっか、それだったら姫乃ちゃんの面倒、私とみーちゃんに任せていいかな？」

それって、白鳥家の養子にするっていうこと？いや出来るものなの？

「止めることが出来ないなら、私達がよっちゃんの代わりにね」

水都ちゃん、本当にありがとう……それだったら私からもちよつとお願いをするために神宮さんにあることを耳打ちした。

「……………時間かかりますよ。それ」

「叶えてくれる？」

「貴方の願いなら」

神宮さんなら本当に叶えてくれる。あとは戦いの時まで……

19 形見

神樹様の神託では、次の戦いではこれまで以上の戦いになるらしい。現状の戦力は若葉ちゃんと友奈ちゃんと歌野ちゃんだけ、杏ちゃんと球子ちゃんはまだ怪我が治りきらず、千景ちゃんは勇者になれなくなっているからだ。そして私は……

「ママ、お話って何？」

神宮家の有る一室で私は白い衣装を身にまとい、姫乃とある話をしようとしていた。

「ママが化け物と戦っているのを知っているよね」

「……うん」

「今度またあの化け物たちと戦うことになるけど、その戦いでママは……」

まだ幼い子に本当のことを言っていないものか……理解してくれるかどうかもあるし

……

「頑張って頑張って戦うんだけどね。その後ママは姫乃前からいなくなっちゃうの」

「いなくなるって……死んじゃうの？」

死についてわかっているんだ。そうだよ。あんな光景を見てきたんだから、分かるよね。

「死んじやうのかわからないけど、大丈夫。ママは見守っているから……そのためにこれを」

私は姫乃に勾玉を渡した。姫乃は不思議そうに勾玉を見つめ……

「これって……」

「いつでも見守ってるからね。姫乃。ちゃんと歌野ちゃんたちの言うこと聞くんだよ」

私は姫乃を抱きしめるのであった。こうして抱きしめてあげるのはこれで最後だよ
ね

姫乃が部屋を出ていって、私が次に呼んだのは若葉ちゃんだった。

「四葉、用ってなんだ？」

「若葉ちゃん、次の戦い、物凄く大変なことになるのはわかってるよね」

「ああ、だが逃げたりはしない」

「そうだよ。それでこそ若葉ちゃんだよ。それでね……これを」

私はポケットから小さな鏡がついているアクセサリーを取り出し、若葉ちゃんに渡し

た。

「これは……」

「私が使ってた手鏡の破片を加工したものだよ。言うなればお守りで……未来まで引き継いでほしいかな」

「未来まで……四葉、これはお前の形見ってやつか？」

「うん、今のうちに形見分けをって思ってたね。3つある内、一つは神宮家……言うなれば大社に、一つは姫乃に、そして一つは若葉ちゃんに……大切にしてくね」

「……やっぱりこんな方法しかないんだな」

若葉ちゃんはうつむき、身体を震わせていた。本当にごめんね。辛い思いをさせて

……

「若葉ちゃん、大丈夫。ちゃんとみんなのこと見守ってるから……」

みんなに形見分けをしてから数日が経った。その間、私は儀式を始める準備を終え、大社が用意した儀式の間に来ていた。

「そろそろ若葉ちゃんたちが戦いを始める頃だよね」

「はい……乃木様も高嶋様も切り札である『大天狗』と『酒吞童子』を使いこなしているはずですよ。万が一負けるということは……」

「精霊の影響がある以上、その万が一ということがありますよ」

私がそう言うのと大社の人は黙り込んだ。そして儀式の間に誰かが入ってきた。それは千景ちゃんだった

「千景ちゃん……」

「貴方という儀式は、もう一人必要だつて聞いた。自身の思いと他者の思いが重なることで貴方がやろうとしていることが出来る」

「そう……そのとおりだよ」

「手伝つてあげる……」

千景ちゃんは勇者に変身し、大鎌を構えた。ありがとう、こんな役割を背負つてくれて……

「……聞いたわ。彼に頼んだこと……いつか子供が出来た時に、姫乃と私達の子供を結婚させるって……」

「男の子かどうかわからないけど……繋いでほしいの。私がいたって言うことを……」
「……………」

千景ちゃんの頬から何かが流れていた。本当にごめんね。

「もしかしたら私は乃木さんたちを傷つけたかもしれない。そんな未来があったかもしれない」

「うん」

「でもそうならなかったのは彼……蛍と四葉、貴方がいてくれたから……」

「うん」

「だからかな？親友を殺すことは出来ないよ」

「千景ちゃん、ごめんね。そしてありがとう」

私は短刀を自分の胸に突き刺し、千景ちゃんが私の首を切り落とした。

「ごめん、ごめんなさい……」

気がつくヒメノ様がいた世界に来ていた。ヒメノ様は悲しそうにしていた。

「こんな運命を背負わせてごめんなさい」

「いいよ。そしてずっと見守っていてくれてありがとうね。神様」

「……………私は消滅しますが、貴方はこれから私の分まで……………」

「うん、頑張るよ」

ヒメノ様は悲しそうにしながらも笑顔で消えていった。そして私は金色の光に包まれ、神秘的な衣装に姿を変えた。

「待っててね。若葉ちゃん、友奈ちゃん、歌野ちゃん」

私はその世界を飛び出し、樹海へと向かうのであった。すべてを終わらせるために

……………

20 託した未来

樹海へとたどり着くと激しい戦闘が起きているのがすぐにわかった。それに遠くからでも分かるくらいの大形のバーテックスの姿も見えている。

「敵も本気って言うことだね。とりあえずは神樹に近い所から……」

私は勾玉をいくつも重ね翼に変えた。依代になるものもなくつても武器が使えるっていうのは神の力って言うことなんだよね。翼を羽ばたかせ、神樹に近いバーテックスのところへと行くとそこには血だらけになった友奈ちゃんと歌野ちゃんの二人がいた。

「二人とも、大丈夫？」

「つう、その声……よつちゃん……本当に神様になったんだね」

「でも姿が見えないよ……」

私の姿が見えてない？これも神様の宿命ってやつなのかな？

友奈ちゃんは酒呑童子を発動してるけど、それでも大型バーテックスには苦戦してるみたいだ。

「二人とも、ここは私に任せて……」

白く輝く剣を取り出した瞬間、地面から大型バーテックスが姿を表した。地面に隠れ

て攻撃するタイプ……でも、それぐらい読めてるよ。

剣を軽く振った瞬間、バーテックス一体は真つ二つに切り裂かれ、消滅していった。「まずは一体……」

今度は卵型の何かが飛んできた。鏡で防ぐが反射できずその場で爆発した。当たった瞬間爆発すれば反射できないって言うことか。

「それなら」

勾玉を取り出し、ミサイルを撃ってきたバーテックスの発射口を縛り上げ、もう撃てないように破壊し、剣で真つ二つに切り裂いた。

「すごい……敵が見る見るうちに……」

「ちゃんと見たかったな……よっちゃんのかっこいい姿……」

残った一体を勾玉で縛ろうとするけど、何故か幾つもの盾に防がれた。こいつの盾、どこかで見た覚えが有るけど……

「どんな盾でも切り裂けるよ」

盾を剣で切り裂き、自分の右腕に勾玉を巻きつけ、バーテックスを殴りつけた。

「こっちは終わりだね。あとは……」

残ってる敵と戦ってるのは若葉ちゃんだね。今すぐに行くから……

敵が集まっている場所にたどり着くと大型バーテックスの水の塊の中に取り込まれていた。私は剣で水の塊を切り裂き、落ちそうな若葉ちゃんを何とかキャッチできた。

「うう……誰？」

「……………若葉ちゃん、お待たせ。頑張ったね。あとは任せて……」

「その声……四葉なのか？」

もう私の姿は誰も見ることが出来ない。悲しいことだけど、仕方ないことだよ。若葉ちゃん、今はゆっくり休んで……

「あとは私が頑張るから」

私は3つの武器を一つに重ねると、白く輝く太刀に変わり、向かってくるバーテックスをすべて切り裂いた。

「神刀!! 姫葉刀!!」

大型バーテックスを全て倒し終わると樹海化が解けていった。これで戦いが終わる……そのはずだけど……

「結界の外から何かがいる」

今までであったバーテックスよりも強大で私の力によく似た存在を感じ取り、私は壁の外へと出た。そこには今までよりも巨大なバーテックスがいた。

「貴方が最後の敵ってことね」

神刀を構え、巨大なバーテックスを切ろうとした瞬間、上空から巨大な何かを感じ取った。

太陽のように眩く、全てを焼き尽くす何か……あれが……

「天の神だっというのかしら？」

『……………』

ソレは巨大なバーテックスに何か指示を出した瞬間、巨大バーテックスは炎に包まれ、太陽へと姿を変えた。それにしても太陽と言うには人々を優しく包み込む光じやなくって、人々を焼き尽くすような……

「いいわ。守り神としての力を見せてあげる!!」

太陽と天の神へと私は向かっていくのであった。

若葉SIDE

気がついた時は丸亀城にいた。あの時、私を助けてくれたのは……

「四葉!?!」

「気が付きましたか? 若葉ちゃん」

私のそばにはひたながいた。一体戦いはどうなったんだ? 四葉がなんとかしてくれたのか?

「ひなた、一体何が起きたんだ? 戦いは……四葉は……」

「そのことをお話するには……」

「おおい、ひなた」

すると私たちの所に球子、杏、友奈、歌野の四人が駆け寄ってきた。四人ともどこに行っていたんだ?

「若葉さん、目が覚めたんですね」

「良かった……若葉ちゃんも四葉ちゃんに助けられたんだね」

「みんな、すまない。教えてくれ……戦いは終わったのか? パーテックスは……世界は……」

「……………そのことだけど、もう四国以外は全て滅ぼされたよ」

歌野の言葉を聞いた瞬間、意味がわからなかった。滅ぼされたってどういう……

「やはり神樹様が言ったとおりでしたね」

「若葉さん、四国の外は炎の世界に包まれて、バーテックスに囲まれています」

「……………炎の世界？なんで!?!四葉は……………」

「神樹様曰く四葉ちゃんは結界の外で巨大バーテックスと戦い、勝利はしたのですが……………その隙を突かれ、天の神によつて四国以外滅ぼされました。神樹様は四国を守るために結界を張り続けています。ですがそれはいつまで続くか……………」

世界は滅んだ……………奴らの勝ちって言うことか……………

「四葉ちゃんは結界の外で炎を静め、眠りについていきます。またいつか戦いが起きた時に、自分の力を授けられるものが現れるまで……………」

あいつ……………本当に頑張ったんだな。それなら今度は私達が頑張る番だ。いつかあいつの役割がなくなるように……………」

「四葉、信じてくれ。私達を……………人類を……………」

『うん、信じてるよ』

どこからともなく四葉の声が聞こえた。きつと見守り続けているんだな。

それからバーテックスの進行は私達が生きていく間にはなかった。歌野と水都の二人が引き取った姫乃は四葉が消えた何年後に自分のことを『姫野四葉』と名乗るようになった。そうすればきつとまた会えるだろうし、すぐくかつこよく優しい神様のことを未来に引き継いでほしいと言う思いからだ。その結果、姫野家に生まれた長女は『姫野四葉』と名乗るように定められるようになった。

千景と神宮は結婚し、幸せな家庭を築いていたが、時折千景は四葉のことを思い出すと辛い顔をしていた。あいつ自身、何かを背負っている気がする。

友奈は自分にできることが何かと考え、勇者としての力を神樹様に全て捧げたらしい。もしかしたら未来に託したのだろうか。

今は結婚して幸せみたいだ。

球子、杏、歌野、水都の四人もそれぞれの家庭を築きながらも、未来へ何かを託していった。

そして私とひなたは……

「お母さん、これ何？」

「これはな……お守りだ。優しい神様がお前のことを守ってくれるはずだ」

「そっか、でもいいの？もらっても……」

「これは乃木家に代々伝えてほしいからな。お前が持っている」

「うん」

四葉が託したものはこれからさきの未来、託し続ける。それがお前の願いだったな。

「若葉ちゃん」

「ひなた……」

「四葉さんの形見ですよね」

「ああ、あいつが持っていたほうが良い。いつか、未来で返せば良いけど……」

「そうですね。大赦も未来に希望を託すために勇者システムの研究と……」

ひなたは一本の短刀を取り出した。だけどどこか錆びつき、戦いには向かないような

……

「二つの刀を作り出そうとしています。一つは炎を纏った刀、一つは水を纏った短刀

……でも上手く行っていないみたいです」

「神の力に近いものを作ろうとしているのか……無理だろうな」

「ええ……あとは未来に託すみたいです」

「未来か……どうか平和な世界であってほしいな」

あいつが笑顔で過ごせるような世界で……あつてほしい

21 花を結う

長い、長い時の中、私は目を覚ました。あれからどれくらい経つたのだろうか？

「あれから150年位か……起きた感じ、戦いはまだ続いてるみたいね」

未だにバーテックスとの戦いは続いている。あの時、私がすっかり勝利しておけばこんなことにならなかったのに……

「どうすれば人類は平和を手に入れられるんだろう……」

一人で呟くけど、誰も返してくれない。何とか神様って退屈なんだな……

「ただ待っているだけじゃダメだよ。何か考えないと……」

『それなら世界の可能性を見せる』

考え始めようとしたとき、どこからともなく声が聞こえてきた。この声って、もしか

して……

『別の世界で可能性を秘めたものたちが集まっている』

「あなたは……」

その声の名前を告げようとするけど、その前に私はある場所へと飛ばされるのであった。

そこは神樹と造反神との戦いを終わらせるために、時代と時空を越え勇者が集まる世界……

私はそこである人達と出会った。

一人は一人の少女の願いで勇者になり、神樹と天の神を繋ぐ勇者……境界の勇者。

彼から言われたのは私は彼の保護者のな存在であり、色々と辿ってみると、神宮と郡家が結婚し、私は彼女の約束でずっと彼を見守っていく存在らしい

一人は勇者に憧れるが、その願いは叶わなかった。そして悪意あるものにその願いを利用され、魔王システムを使い、勇者と戦った少女。

彼女は戦う力はなかったけど、それでも勇者たちの勝利を願い続けた。祈りの勇者。

一人は仲間を救うためにその生命を捧げ、女神の祝福を受けて勇者……女神の勇者。

彼は人々の思いに応え続け、仲間たちとともにいずれ戦いを終わらせるような気がする。

彼の世界の私は私ではなく、四葉姫乃として生きてみたいだ。

彼らの世界はある分岐点があるみたいだ。その一つとして、神宮家と郡家の関わり……というより結婚しているかしていないかだ。

女神の勇者の方は恋人同士になったけど、結局彼女が死んでしまった。そこから世界の分岐があるみたいだけど……

そしてそこでは更に自分たちと同じ未来を歩ませないように、彼らと戦った者たちのこともいた。

その世界から戻ってきた私は更に考えた。

「世界の分岐……私がいた世界は多分だけど桔梗がいた世界と似ているかもしれない」

とはいえ、どんな運命をたどるのかわからない。今、私が出ることは私と同じように神の力を扱え、私以上に耐えきれぬ勇者……守り神の勇者が必要なかもしれない。

「いつでも待つよ。どんな悲しい結末を見続けても……世界を……人類を……勇者たちを守ってくれる勇者が現れるのを……」

それからまた長い時が流れた。私は私の力を宿した子たちを見続け、彼女たちを遠くから看取り続けた。

どんなに悲しい思いがあっても、それでも私は負けずに待ち続けた。

『その思いがあったからこそ、お前は人の身を捨てたのだな』

またあの時の声が聞こえた。もう何を言われても私は後悔はしない。

「私が託したものを貴方も見届けなさい。神樹」

そして……

「行つてきます。お母さん、お父さん」

墓前の前にある両親の写真に挨拶をする少女、彼女は姫野四葉。本当の名前は彼女が生まれた時に『姫野四葉』と名付けられ、名前をなくした。

彼女からは私が望んだ物を持っている。

『頑張つて……貴方なら、全てを終わらせられるよ。守り神の勇者』

鷺尾須美の章

22 新たな始まり

神世紀298年、私姫野四葉は走っていた。出来る限り全力で走っていた。なぜなら……

「何で転入初日で寝坊しちゃうんだよ〜」

とある事情で私は今日から神樹館に転入することになった。そのため準備をしつかりやっていたのだけど、何故か家の時計が止まっていた。

「ちゃんと確認すればよかった……もう〜」

文句を言いながら走り続け、自分がこれから勉強する教室の扉を開けた瞬間、何故か教室にいるみんなが振り向こうとしなかった。というより時間が止まっていた。

いや三人だけ振り向いてはくれた。

「えつと……貴方はどうして……」

「久しぶり〜寝坊したの〜」

「それにしたって遅刻だぞ〜」

彼女たちはもしかして私と同じ……

すると突然花びらが私たちを包み込み、気がついたら木に覆われた世界に来ていた。
「ここが樹海……」

「ひめちゃん、久しぶり〜」

「園子ちゃん、お正月以来だね」

「何だ？何だ？転校生と知り合いだったのか？」

「うん〜お家関係でね〜」

「話は聞いてたけど、本当に園子ちゃんもお役目に選ばれたんだね」

「あの、三人共、今は……」

黒髪の子が怒った顔をしていた。そうだった。今はお役目に集中しないとね。私たちは端末を取り出し、アプリに浮かんだ紋章に触れる私は灰色の衣装に両手には勾玉が埋め込まれた拳具が装備された。

「わあ、ひめちゃんかっこいいね〜」

「そ、そうかな？」

「二人とも今は集中」

「まあ、まあ鷲尾さんも落ち着いて、ほら敵が来たよ」

またあの子に怒られちゃった。するともうひとりの女の子が間に入ってくれた。彼女はなんかいい子だな〜

でも彼女の言うとおりで敵が現れたみたいだ。

敵は大橋の方からゆっくりとこちらに近づいてきた。水の球体が両サイドについているっていうことは、水関係の攻撃をしてきたりするのかな？

「行くぞ!!おらっ!!」

間に入ってくれた女の子が斧で攻撃をするが、浅かったのかすぐに再生しまう。おまけに近づこうとすると敵の攻撃が邪魔で近づけないし……

「大丈夫?えっと……」

「銀!三ノ輪銀!」

「私は姫野四葉。どうする?水が邪魔で近づけないし……」

「だったらなんとかするしかないだろ」

そりやそうだけど……すると水柱がこっちに向かってきた。気がつくのに遅れ避けることが出来ずにいると私たちの前に園子ちゃんが出てきて、槍の先を傘みたいに広げて防いでくれた。

「これ、盾にもなるみたい……でもちよつと耐えきれない」

「園子!」

武器をある程度変えることが出来る。私は拳を構え、思いつき前に突き出した瞬間、巨大な勾玉が攻撃を防いだ。

「おお!?!すごいな四葉」

「なんとなくやってみただけ……………」

敵の攻撃がなくなった。水切れとかと思つたら、離れた場所にいる黒髪の子に向かって攻撃を始めていた。距離が遠すぎてちよつと間に合わなそう。だったら……

「鞭に代わって!!」

私が叫んだ瞬間、拳具が鞭に変わり、攻撃を食らいそうになつたあの子を鞭で縛り上げ、救出できた。

「あ、ありがとう……………」

「姫野四葉。四葉でいいよ」

「こんな時に自己紹介は……………」

「これから一緒に戦うんだから名前ぐらい知っておかないといけないから。貴方は?」

「……………鷲尾須美」

「よろしく、須美ちゃん。それでどうする?戦つた感じ、須美ちゃんの矢では攻撃が通らない。唯一攻撃が効くのは銀ちゃんの斧ぐらいだけど、近づくのは難しい」

「四葉の鞭で縛り上げるとかは?」

「普通ならそれでいいけど、縛って動きが止められるか……………」

「それだったらみんなで協力すれば良いんだよ」

園子ちゃんの言葉を聞いて、須美ちゃんも銀ちゃんもすぐに理解した。なるほどね。一人で戦ってるんじゃないもんね

「それじゃ早速!!」

私は鞭で敵の身体を縛り上げ、動きを止めるが、敵はそれでも前へと進もうとしていた。だけど園子ちゃんが一緒に鞭を持ってくれた。

「綱引きだね」

「あんまり楽しくない綱引きだけど……」

何とか進行を止めようとするけど、敵は私達に向けて攻撃を放ってきた。だけど攻撃は全部須美ちゃんの矢が撃ち落としていく。

「銀ちゃん!!今!!」

「おおおおおおおお!!」

斧の連撃を喰らわせると敵は見る見るうちに消えていき、辺りに花びらが舞った。これが話聞いた『沈花の儀』。これで私達の初戦闘は終わったんだよね。

ふつと花びらが舞う中、何かを見つけた。あれは……女の子?

『……………けた』

「今なんて……………」

花びらが私を包み込んでいった。一体あの子は……誰なの?

23 祝勝会

初戦闘も無事に終わった。うん、無事に終わったのは良いけど……

「……………はあ」

私はイネスで一人待ちぼうけをしていた。初戦闘後、私たちは大橋近くに戻され、須美ちゃんたちは先生に車で学校まで戻ったのだけど、私はと言うと転入初日でこんな事になったこともあり、転入は次の日になった。

しょうがないと思いつながら今日転入し、私の転入は終わったのだけど、休み時間のと き、須美ちゃんから祝勝会をやらなにかとのことで、私は先に待ち合わせ場所のイネスに來ていた。

「何で転入初日でバーテックスが襲ってくるんだらう？ いや、そもそも遅刻した私が悪いし……」

自己嫌悪しながら、私は首に付けていた勾玉を見つめた。

代々私の家系に伝わる家宝……長女に生まれた子は勇者の素質が高くそして……

「神の子……でもご先祖様たちはその姿を一度も見た事ないんだよね。本当に私にそんな力があるのかな……」

何だか暗くなってきた……こういう時は……でも人の目があるけどあんまり聞こえないように……

「ラ〜ララ〜」

誰にも聞こえないように私は歌を歌った。死んだお母さんが教えてくれた。辛い時や悲しいとき、気持ちが悪くなったら歌を歌ったら、そんな気持ち吹き飛ばして……

歌い終え、少し暗い気持ちが吹き飛んだ。やっぱり歌をうたうのはいいな……

「わあ〜」

気がつくと園子ちゃんが目をキラキラさせた状態でした。それに銀ちゃんと拍手している須美ちゃんもいた。

もしかして聞かれてた？うう……

「恥ずかしい……」

「いやー四葉見つけて声をかけようとしたら、ノリノリで歌ってるんだもんね」

「姫ちゃんは昔か歌がうまいんだよ〜」

「何というかプロみたいでした」

須美ちゃん、それは言いすぎだよ。私の歌声はそんなじゃないからね。

みんなに（特に園子ちゃん）に誂われながら、私たちは祝勝会でソフトクリームを食べていた。

「改めまして、姫野四葉です。本当は昨日からだだったんだけど今日からみんなとクラスメイトになります」

「私は三ノ輪銀。よろしくな、四葉」

「驚尾須美です。あの姫野さんは……」

「別呼び捨てでもいいよ。もしくは園子ちゃんみたいにあだ名とか付けてもいいし」
「いえ、それは……」

須美ちゃんは何というか固いなくもう少し柔らかくなればいいのに……

「どうして昨日遅刻なんてしたんですか？本来は昨日が転入初日のはずなのに……」

「そ、それは……朝起きたら家中の時計が止まって……」

「それは……何というか不幸ね」

まさか家中の時計が止まってるなんて思っても見なかった。おまけにパーテックス襲撃もあつたし……

「はいはい、私からいい？四葉と園子って知り合いみたいだけど、家の関係とかで？」

「うんとそんなところかな？私の家と乃木家、あとは上里、高嶋、伊予島、土居、白鳥、

藤森、神宮のお家って、物凄く昔からの付き合いでね。お正月とか集まったりして……」
「お父さんたちはお酒でワイワイしてる中、私達子供は子供で遊んだりしたもんね〜」
みんなと楽しく遊んだのは楽しかったな……そういえば今頃みんな何やってるんだろっ？

「上里家……それにさっきあげた名前って……大赦内のトップクラスの家の……」

「何ていうか園子もだけど、四葉も金持ちだったりするの……」

「いや、私は別にお金持ちって言うわけじゃないよ。色々とあつてね」

両親が死んでからずっと一人で暮らしてる。とは言っても、神宮家の人が保護者になつてくれるから生活面は特に問題なく過ごせている。ただ一人っていうのは……

「うくん、四葉!!」

「ひゃい!?!」

いきなり背中を銀ちゃんに叩かれて変な声が出た。一体どうしたんだろう？

「今日はいっぱい遊ぶぞ!折角の祝勝会だし、盛り上げていこうぜ」

「う、うん」

もしかして暗い顔をしていたから気を使われた?それはそれで申し訳ない。

四人の少女たちを密かに見つめる私、やっと見つけた。私が求めていた人を……

『彼女は一人……私と同じ……』

両親がおらず、一人ぼっちになった。だけど私にも彼女にも友達が……仲間がいた。

『どうか私と同じ運命を辿らないでね』

そう呟くが、彼女には届かない……まだ届かない。

24 姫野家について

須美SIDE

毎朝、水で身体を清める。これが私の日課。そんな日課の最中私はあることを考えていた。

それは姫野さんについてだ。彼女の大赦での立場はかなり謎である。大赦ができてから長い年月、姫野家は何かしらの役割を背負っているという話は聞いたことがある。でもその役目って何なんだろうか？

日課が終わり家族みんなで食事を摂っているとき、お父様がある話をされた。

「須美、お役目選ばれた中に姫野家の人間がいるだろ」

「はい、四葉って子が……」

「そうか……須美、彼女と仲良くな」

「それはどういう意味ですか？」

「いや深い意味はないのだが、姫野家は……彼女は代々辛い役割を背負っているから……」

辛い役割……一体それは……

お父様はそれ以上のことを教えてくれなかった。ただあの子が背負っているものについて一体何なんだろうか？

授業中、ずっと彼女のことが気になりずっと見ていた。そのせいか全然授業に集中できな……本人に聞くべきなのかどうなのか……

四葉SIDE

ずっと視線を感じていた。この視線の主は須美ちゃんみたいだけどどうしたんだろ？私、変な所あるのかな？

ちゃんと髪も梳かしたし……うくん、これは……

「とうわけで須美ちゃんが私の事見つめてるのだけどどうしたらいい？」

「須美がな〜」

「もしかしたらわっしー、ひめちゃんに恋をしてるんじゃないのかな〜」

「気になって銀ちゃんと園子ちゃんに相談したけど、失敗だったかな？特に園子ちゃんに相談は……」

「いやいや女の子同士だぞ」

「ミノさん、ミノさん、最近はそういうのもあるんよ」

「まあ確かに須美ちゃんは可愛いけど……と言うか恋から離れようね」

「え〜」

「え〜じゃないよ。銀ちゃんはどう思う？」

「私!? うくん、何か聞きたいことがあるけど聞きづらかったりするんじゃないのか？」

聞きづらいこと……なんだろう？でも気になるなら気にせず聞けばいいのに……

「あ、あの、姫野さん……」

不意に声をかけられ、振り向くと何故かもじもじしている須美ちゃんがいた。これって……

「えっと、何？」

「少しお話したいことが……」

いやいや、なんだろうこれ、園子ちゃんが言っていたみたいなことじゃないよね。

須美SIDE

意を決して、姫野さんに話を聞くべきだと思い、私は校舎裏に姫野さんと一緒にいた。何故か姫野さんは顔を真赤にさせているけど、どうしたのだろうか？

「え、えっと、お話って何？」

「あ、あの話したくなければいいのですが、姫野さん」

「う、うん」

「貴方は……姫野家って何なんですか？」

私がそう聞いた瞬間、さつきまで顔を真赤にさせていた姫野さんは一瞬で真剣な表情をしていた。もしかして私は聞いてはいけないことを……

「どうして突然そんな事を？」

「い、いえ……ただ大赦の中でも有力な家系の人たちとの繋がりがあること……お父様が言っていた姫野家が代々背負っている役割って何なのかって……」

「……須美ちゃん。軽い気持ちで聞いてないよね」

姫野さんの言葉を聞いて、私は体を震わせた。なんだろう？この寒気は……殺気が籠ってる？

もしかして返答次第で私はどうにかされるのだろうか？でも、私は決して軽い気持ちで聞いたんじゃない。

「違うわ。私は……姫野さんが背負っているものが何なのか知りたいの。そして一緒に背負ってあげられたら……」

「………そっかありがとうね。須美ちゃん。でもごめんね。詳しいことは話せないの。そう言われてるの」

それって、もしかして大赦に口止めされているということなの？

「別に大赦に口止めってわけじゃないけど、本当に長い話になるし、この事はみんなにも

知ってもらいたいの」

「みんなって言うのは……」

「私が話したい時に話すまで待つていてね。ただ今言えるのは私は……姫野家に生まれ
た長女は『姫野四葉』という名前をつけることになるのと……私は大赦から神の子……
神子と呼ばれていることだけ……」

「神子……」

「ちゃんと機会があつたら話すから……今日のこととは忘れて……」

彼女は悲しそうに微笑むのであつた。『姫野四葉』と『神子』それが彼女にとって辛い
役割だということを私知ることとはあるのだろうか……

25 合宿へ

私も学校生活に慣れてしばらく経ったある日のこと、二体目のバーテックスが進行してきた。

今回は何だか形が天秤に似ている。どれくらい前かバーテックスの名称が十二星座に適用するようになったためか、端末に映し出された名称は天秤型と書かれている。

「流石にリブラ・バーテックスは強敵だね」

「のんきに感心しないで、どうにかしろよ!!」

「あの風じゃ近づけないよ」

「姫野さん、何かいい方法は……」

そんなこと言われても、勾玉で縛り上げようとしても回転しているから弾かれるし、遠距離からだとか回転して起きた風で吹き飛ばされるし……

「ん？なあもしかして中心は安全なんじゃないのか？」

「安全みたいだけど、罨か……」

「よし、行くぞ!!」

私が言い終わるの待たずに、銀ちゃんは突っ込んでいった。ちよつと無茶すぎだっ

て……

「あなたたちね……いくら何でもゴリ推しすぎでしょ。いくつ生命があっても足りないわよ」

「「はい……」」

リブラ・バーテックスを何とか倒せたけど、流石にきつすぎた。

「連携の演習不足ね。まず四人の中でリーダーを決めるべきだけど」

安芸先生の言葉を聞いて、須美ちゃんは何だか気合が入っている気がした。もしかしてリーダーやりたいのかな？でも私的には……

「乃木さん。お願いできますか？」

「えっ？えっ？」

うん、園子ちゃんがリーダーなのは納得できる。のんびりしているけど結構私達のことと見ている。それに咄嗟の事が起きても焦ったりしないようなきがするし

「私も園子ちゃんがリーダーでいいよ」

銀ちゃんも須美ちゃんも納得していることでリーダーは園子ちゃんに決定した。そして私達の連携を鍛えるために合宿を行うことになった。

「合宿はチーム連携と個人個人の能力強化行う予定よ。練習相手も来てもらうことになっっているわ」

安芸先生はそう言いながら、何故か私と園子ちゃんの方を見た。もしかしてその練習相手って……………

合宿当日、私たちはバスで合宿先につくとそこには見覚えのある二人がいた。

「わあくたかゆーともつちやんだ〜」

「なんとなく予感はしてたけど、まさか優くと桃ちゃんが来るなんてね」

「お正月ぶり、四葉、園子」

「よろしくね。あともつちちゃんはやめて」

「あ、あの……………」

私と園子ちゃんは二人との再会を喜び合っている中、須美ちゃんが何か聞きたそうにしていた。そうだった。二人は知らなかったっけ

「紹介するね。こっちの男の子は高嶋優、ちよつと気弱そうなのは伊予島桃」

「もしかして園子と四葉の二人が前に言ってた奴らか？」

「高嶋家と伊予島家の……でもどうして二人がここに？」

「それは……」

「安芸さんに呼び出されたんだよ。合宿を手伝ってくれって」

安芸先生と知り合ってたんだ。まあ確かに個人個人の能力向上にはこの二人なら安心して任せられるかもしれないな

「というわけでそれじゃ早速始めるか。えつと三ノ輪銀って？」

「私だよ」

「よし、じゃあ勇者に変身しろ。あと出来るだけ加減するようにな」

「えっ？」

早速個人演習が始まるのであったが、優くんが勇者に変身するようになると言われて驚いている二人だけど、私と園子ちゃん、桃ちゃんの三人は特に驚かなかった。

だつて……

数分後、銀ちゃんは息を切らしながら、床に倒れ込んでいた。優くんはというと特に息を切らすこともなく、まだまだ余裕そうにしていた。

「加減しろって言ったろ。これじゃ午後からの連携演習で動けないぞ」

「ハア、ハア、どういう事……なんで勇者じゃないのに……」

「ミノさん、ミノさん。たかゆーはね、ちよつと変わってるんだよ。血筋みたいなものなんだって」

「血筋って……」

「俺の家系もちよつと変わってるんだよ。まあ俺に勝てたら話してやるよ」

「そ、それじゃ今度は私だね。えつと鷲尾さん」

「は、はい」

「そ、そんなに緊張しなくていいよ。さつきみたいな戦闘とかしないから……ただあそこにあるものを撃ち抜いたら終わりだから」

桃ちゃんがそう言って指差した方には台座がぽつんと置いてあった。もしかしてあ

の台座を撃ち抜くだけなのかな？

「あの台座を撃つんですか？」

「ううん、ここからじゃよく見えないよね。これ使って」

桃ちゃんは須美ちゃんに双眼鏡を渡し、須美ちゃんが双眼鏡で台座の方を見て何故か驚いていた。

「あ、あの、もしかして台座に小さく出ている針状のものを……」

「うん、撃ち抜いて。台座は壊したらダメだからね」

桃ちゃんが笑顔でそう告げ、須美ちゃんは顔を真っ青にするのであった。

26 合宿

「みんな、ごめんなさい。少し遅れたけど個人演習は……」

遅れてやってきた安芸先生はただただ驚きを隠せないでいた。何せ、私以外の園子ちゃん、銀ちゃん、須美ちゃんが倒れたまま動けないでいた。

「流石は四葉だな。相変わらず化物体力」

「徐々にだけど扱えるようになってきたんじゃないのかな？四葉ちゃんは」

「うーん、意識してるわけじゃないから……まだまだかな」

何というか私に宿った守り神さまの力の影響なのか、肉体面に色々と作用している。だからこの二人が出したハチャメチャな演習内容についていけた。

ただ問題があるとすれば……

「伊予島さん、高嶋さん。これはどういうことかしら？」

「あつ、えつと……四人とも演習頑張ったんですよ」

「そ、そうそう……」

「言い訳はするんじゃないやありません!!」

その後安芸先生のお説教を喰らうことになった二人のおかげなのか、私たちはちよっ

とした休憩時間をもらえるのであった。

「な、何だったんだよ。あの二人……」

「無茶苦茶な演習……三ノ輪さんと乃木さんの方がまだましよ。私なんか針が見る見るうちに小さくなっていくんだもん」

「あはは……二人は無茶苦茶なことだけじゃないんだよ。出した演習をやらせる前にちゃんとお手本を見せてくれるんだよ」

園子ちゃんと私が優くんから受けた演習は、防御に対してどこまで耐えきれるか、耐久力強化だった。何というか木でできた盾で私達の攻撃を受けきったのはすごいと思っただけど、優くん曰く技術が必要だって言うけど……

「なあ四葉。あの二人、普通の人間だよな」

「うん、そうだよ。そう見えないけどアレは努力の成果みたいなものだよ」

「努力……」

「自分たちが勇者に選ばれなくても、戦いのサポートが出来てくくらいに強くなりたかって思っただ結果なんだよ」

「他の家の子達もね」

こうして優ちゃんと桃ちゃんが手伝ってくれているという事はいつか手伝いに来てくれるのかな？ただ……神宮家の子だけには会い辛いな……

「四人とも、休憩は十分取れたかしら」

お説教を終えたのか安芸先生が私達に声をかけてきた。その後ろで正座させられている二人がちよつと気になるけど……

「それじゃ連携演習を始めるわよ。四人とも海岸に行くわよ」

「「「はい!!」」」

連携演習は銀ちゃんを中心に、園子ちゃんと須美ちゃんの二人で迫ってくるバレーボールの嵐をどうくぐり抜けるかの演習だった。

ただ不思議なのは……

「あの先生、私は？」

「姫野さん、自分に宿った力についてはわかってるわね」

「はい、教えられてきましたから」

私には勇者の力ともう一つ守り神の力が宿っている。守り神は人々を守る力ではなく、共に戦う勇者を守る力。

姫野家の長女に代々伝わるこの力を私はまだうまく使いこなしていない。

「これから先の戦いは厳しくなっていくわ。そのために力の解放の仕方を覚えられように瞑想し続けなさい」

「瞑想……………」

「300年間、貴方のご先祖様は瞑想を行って守り神の力を扱えるようになってきたわ。その最初の段階としては声を聞くことからよ」

声を聞くってどういうことだろう？とりあえずやってみることにした。

静かに呼吸を整え、何も考えないで居続けると何故か声が聞こえてきた。

『……………さい』

聞こえてきたのだけどときれどきれだった。でも何だかこの声、聞き覚えが……

『ちやんと……………すませなさい』

だんだんはつきりと聞こえてきた。すませなさいって……耳を？私は言われるまま耳をすませると声が聞こえてきた。

『どうやら聞こえたみたいね』

誰だろう？聞き覚えがあるけど思い出せない。誰なのか聞こうかと思ったけど話すこともできなかった。

『まだ声だけ聞こえるだけみたいだね。それじゃ勝手に話すわ。初めまして姫野四葉……いいえ、本当の名前で呼んだほうが良いけど、今は四葉と呼ぶわ』

この声の人、私の事を知っているの？それじゃこの声は……

『四葉、貴方は守り神としての力を目覚めるに連れて、自身の……私達の運命を知ることになる。でもね、私は信じてるから……あなたなら』

気がつくのと夕方になっていた。どれくらい瞑想していたんだろう？

「成果はどうだった？」

安芸先生は私が目覚めるのをずっと待っていたくれたみたいだった。私は笑顔でこう答えた。

「それなりです」

あの時、あの声の主が言った言葉が頭に響いていた。

『あなたなら運命を変えられるから……』

27 温泉でのひとときと深まった絆

合宿初日の夜、私は温泉に浸かりながらあることを考えていた。それはあの時守り神様から聞かされた言葉

『貴方なら運命を変えられる』

運命って何？ 姫野家にどんな運命が待っているっていうの？ それともこれから先何が起きるっていうの……

「はあ」

「どうしたの？ ひめちゃん、せっかくの温泉なのにため息しちやダメだよ」

「もしかして訓練がつらすぎて……」

「四葉ちゃん、ごめんね。無理させちゃって」

園子ちゃん、須美ちゃん、桃ちゃんが心配そうに見ていた。何だか心配かけて申し訳ないな」

「ううん、訓練が辛いって言うわけじゃないよ。ただちよつとね……」

今は話すべきじゃない。でもいつかはちゃんと話すから……

そんなことを思っていると、何かの視線に気がついた。視線の主は銀ちゃんだけど、

さつきから何を見てるんだ？

「何ていうかさ……須美も薄々思ってたけど、桃さんと四葉の二人も何気にでかいよな」
でかいって何のことかと考え込んだ瞬間、すぐに私は理解した。いくら女子でもそういう話はセクハラになるんだけど……

「私はそこまででかくないからね」

「ふ、普通くらいだよ」

「そ、それとその手つきは何かしら」

「いや、どんなものかって思ってたな」

それから銀ちゃんとは私達の胸を揉もうとしようと、ちよつとした騒ぎになり、安芸先生に怒られるのであった。

「あいつら……俺がいること忘れてないか？というか男一人つて寂しすぎだろ。もう一人くらい誘っておけばよかった」

男風呂で一人そうつぶやく優であった。

それから私たちは残りの訓練を行い、少しずつ連携が取れていけるようになった。とはいえ未だに優くと桃ちゃんの訓練は私以外の三人はクリアできずにいるのであった。流石に難易度高すぎじゃないか？

合宿が終わってから私は家で瞑想を続けていた。少しずつだけ私の言葉を守り神様に届けられるようになったのは嬉しいけど、会話するにはもう少し頑張らないと……
「守り神様。聞こえますか？」

『まだ聞き取りづらいわね。でも少しずつ成長していけてるよ』

「ありがとうございます。あのお聞きしたいことが……」

『したいこと？何かをするの？それとも聞くことでもあるのかな？』

「いえ、ちゃんとお話ができるまで聞かないでおきます」

この機会に聞くべきことがあった。それは姫野家に伝わる秘伝『神成の儀』についてだ。それを行えば今後の戦いに大いに役立つ力を得ると言われている。

その方法を知りたかったけど、まだ無理そうだ。

『まだ話できないから諦めたのかな？でもね、四葉。私と貴方は……』

守り神様が何かを言いかけた瞬間、世界の時が止まった。どうやら敵の襲撃が来たみたいだ。

「行つてきます」

樹海に訪れみんなと合流すると大橋の方から角みたいいな足が生えたバーテックス。カプリコーン・バーテックスが姿を現し、地面に四本の足を突き刺すと地震が起き始めた。

「わつと!?地震で倒そうっていうのか!」

「足元が揺れて……矢が撃てない」

「ミノさん、突っ込む?」

「園子ちゃん、それは流石に厳しいと思うよ。地震起こすだけじゃないと思うし」

私がそう言った瞬間、カプリコーンが大きく上に飛ぶと足の一本をこっちに飛ばしてきた。

園子ちゃんは咄嗟に盾を展開して攻撃を防いだ瞬間、何故か驚いた顔をしていた。

「あれ〜手加減してきたって言うことじゃないよね〜」

「どうかしたのか？園子」

「ううーんと敵の攻撃がすごく軽く感じたの」

「軽く？」

「もしかしたら訓練の成果出てきてるんじゃないのかな？カプリコーンより優くんの方が重く感じたんじゃない」

「だとしたらある意味優くんはバーテックス以上に強いってことになるような……まあ高嶋家特有のものみたいだけど……」

「だとしたら……」

私の言葉を聞いて、須美ちゃんはゆつくりと弓を引いた。そしてその目は何かに狙いを定めるかのように……

「行つけえええええ!!」

放たれた矢は角の一本に目掛けて向かっていくが、余りの高さに届かないでいた。でも、どうして角を狙ったのかな？

「須美ちゃん、何を狙ったの？」

「三ノ輪さんが敵の角の一部を攻撃した時に小さなヒビが入っているのが見えて……」

「これも特訓の成果っていうものかな？でもあの高さじゃ届かないという……」

「まずい!!三人共下がれ!!」

銀ちゃんの言葉が聞こえた瞬間、4つの角を回転させ、こっちに向かつて発射させてきた。銀ちゃんは敵の攻撃を斧で防ぐけどこれはちよつとまずいかもしれない

「私が抑えている内に……敵を!!」

「銀ちゃん……須美ちゃん。あの回転の中でさつき言っていたヒビは見えてる?」

「え、はい」

「それだつたらそこを狙つて!!少しでも銀ちゃんを楽させられる」

「ヒメちゃん、私たちは?」

「敵が怯んだ瞬間に、攻撃を仕掛けるよ」

私は勾玉の鞭の先を鋭い槍に変え、いつでも仕掛けられるように構えた。

「三ノ輪さん……銀!!今!!」

須美ちゃんの矢が角の一本に突き刺さった瞬間、大きくヒビが入り、ほんの一瞬だけ敵の動きが変わった。私はその瞬間、敵の身体に勾玉で貫き、縛り上げ、力の限り引つ張った。

「園子ちゃん!今!!」

「ハアアアアアアアアアア!!」

縛り上げた敵を私達の方まで引き寄せた瞬間、園子ちゃんの槍の一撃で敵を撃破するのであった。

戦いが終わり、私たちは大橋の近くで倒れ込んでいた。

「何だか無茶苦茶な特訓の成果がここまで出るとはな」

「うん、やってみるものね」

「そういえばわっしー、さつきミノさんの事、銀つて呼んでたよね」

「ああ、それ私も聞こえてた。どうしたの急に？」

私達がそう聞くと須美ちゃんは顔を赤らめていた。

「あ、あれは咄嗟に……」

「銀でいいよ。もう私たちは仲間なんだから」

「で、でも……」

「それじゃそれじゃ私の事そのつちって呼んで」

「そのつち、銀……四葉」

須美ちゃんに名前と呼ばれた瞬間、何だか嬉しい気持ちで一杯になるのであった。こうして私たちはこの日、絆を深めるのであった。

28 突然のお見合い

須美SIDE

ここ暫くの間、バーテックスの襲来がないとのことで私達勇者はちよつとした休息期間に入った。

休息期間中は訓練もなかったただ平和な日々が続くのであったのだが……

「須美、話があるんだ」

「話……ですか？」

「ああ、実はと言うとお見合いの話があつてな」

「お……お見合い!？」

四葉SIDE

休息期間とは言え、私は守り神の力を扱えるように瞑想を続けたり、あとは姫野家に残された書物を読み漁っていた。

「守り神が使ったと言われる3つの武器……一つは変幻自在の勾玉、一つは勇者たちを守る鏡、一つは人々を癒す剣……そしてその3つが揃ったとき……」

次のページをめくると破れていて何が書かれているのかわからなかった。何というかここまで来て分らないとなると気になってしょうがない

「勾玉って、これだよね」

私は首にかけて勾玉のペンダントを見つめた。何故か勇者に変身したときにも扱えるようになってるからこれが例の守り神の武器の一つで良いのかな？

「残り二つってどこにあるんだろう？」

できればどんなものか見てみたいけど、姫野家にはこの勾玉しかないみたいだ。もしかしたら……

「守り神の力を使えれば呼び出せるのかな？」

一人でそうつぶやくと端末にメッセージが入った。送り主は須美ちゃんからだ。何だろう？

『緊急招集願います。とても大事な話があります』須美

『どうしたんだ？』銀

『大事な話つてもしかしてわっしー、結婚するの〜』園子

『まだ小学生だから無理なんじゃないの？』四葉

『いえ、結婚に近くて遠いものです。私、お見合いすることになります』須美

お見合い……………それってつまり……………ん？えつと……………

『本当に緊急事態だね』四葉

『これは……………とりあえずイネス集合でいいか？』銀

『すぐ向かうね』園子

一体何でまたお見合いなんて言うことに……………私はすぐに支度をして出かけようとする、またメッセージが入った。

『近いうちに会えないかな？』

「……………」

私はメッセージの送り主の名前を確認し、無視をするのであった。どういう顔をして会えば良いのかわからないっていうのに……………

待ち合わせ場所であるイネスに着くとすでに須美ちゃんたち三人が来ていた。

早速事情を聞くと……………

「何だ。お見合いって聞いて驚いたけど、ただの顔合わせなんだな」

「お見合いじゃなくて、許嫁に会いに行くっていうだけなら大丈夫だよ」

「そう……だけど、何だか親が決められた相手と結婚するっていうのが……」
てつきり須美ちゃんはその親の言うことだから従うのかなって思ってたけど、やっぱり自由恋愛したよね。

『いいな、許嫁がいるなんて……私なんて恋愛せずに守り神になったのに……』

何だか守り神様の声が聞こえてきたけど、気にせず話を進めるのであった。

「相手ってどんな人なの？もしかしておじさんとか？」

「違うわ。同じ年で……名前は確か……」

私は名前を聞いた瞬間、驚きを隠せないでいた。

そして四人で話し合い、お見合いの日にみんなでどんな子か見に行くことになったけど……私としてはあんまり行きたくなかった。

お見合いの日、ある料亭で私たちは物陰に隠れながらお見合いの様子を見ていた。本当は行きたくなかったけど、友達のためだと自分に言い聞かせた。

「おっ、あれがそうか？」

「うん、わっしー、着物だ〜」

「……………」

「……………どうしたんだ？ 四葉。元気ないけど……………」

「須美ちゃんの相手の子がちよつとね」

「そっか……………苦手なんだっけ？」

「二人が知ってるって言うことは昔からの付き合いの家の子なのか？」

「うん、そうだよ〜」

「……………来たみたいだよ」

私がそう言うのと二人とも須美ちゃんがいる部屋を見つめていた。

「初めまして、鷺尾須美です」

「初めまして……………神宮桔梗です」

『神宮桔梗……………これも運命なのかしら？』

守り神様がまた何か言ってるけど、正直どう答えれば良いのか分からないでいた。

だって、彼は私にとって……

29 姫野と神宮

須美SIDE

私の許嫁らしい人は、話に聞いていたとおり本当に同じ年の子だった。だけどそれよりもっと気になったのは、彼が誰かに似ていた。

「どうかしました？」

「い、いえ、ただ……その……神宮さんの……」

「桔梗でいいよ」

「桔梗くんのご両親の姿がないのが気になって……」

てつきり両親と一緒にこの部屋に入ってくると思っていたけど、彼は一人で入ってきた。とはいえ、私も一人でこの部屋で待たされたからなんとも言えないけど……

「……僕の両親は……いないんです」

「えっ？」

「昔事故で亡くなって……」

「ご、ごめんなさい」

「謝らなくていいですよ。今はお爺ちゃんと一緒に住んでるから寂しくないし、それ

に……」

「それに？」

四葉SIDE

「何言ってるか聞こえないな」

「もうちよつと近づいてみる？」

「二人ともこれ以上近づくとバレちゃうからやめよう」

バレたらバレたで色々と問題があるし……特に私としてはね。

「それにしても須美の相手、かつこいいな」

「きょうくん、学校でモテモテみたいだよ」

「……二人とも悪いんだけど私は帰るね」

「なんで？」

「ちよつと用事があつてね」

私はその場から離れ、敷地の外へと出るのであった。

「元氣そうだったな……」

「……四葉か？」

敷地の外に止まっていた車から私の名前を呼ばれ、窓が開くとそこにはある人がいた。

「……お久しぶりです。神宮さん」

それは現神宮家当主だった。桔梗がいる時点で来ているだろうとは予想していたけど……

「お前がどうしてここにいるんだ？」

「友達の事が気になったので」

「そうか……」

「神宮さんは中に入らないんですか？」

「ああ、これから大赦に向かうからな。それより四葉、たまには……」

「神宮さん」

神宮さんの言葉を遮った私、この人が何を言おうとしているのか私にはわかっていない。

須美SIDE

「姉がいるんだ」

「お姉さんですか？」

「ああ、今は色々と事情があつて別々に暮らしてるけど……」

「別々に……」

何故か彼の姉の話聞いて、頭に思い浮かんだのは四葉だった。どうしてなのかわからない。ただそう思つてしまつただけだけど……

「歌が好きで、僕が泣いたりした時に歌を歌つて励ましてくれたりしたんです」

そして彼の話を聞くに連れてそうじゃないかと確信していく。どうして……

「あ、あの……そのお姉さんはなんて……」

「ああ、そういえばごめん。ここに来た一番の理由を忘れてた。鷺尾さん、僕は君の許嫁

の件、断ろうと思ってたんだ」

「!？」

「保護者同士決めたことだからと言って、やっぱり自由に恋愛したいだろうと思って……何だか自分勝手な理由でごめん」

「あ……あの……」

彼の申し訳無さそうな顔を見て、何故か引き止めたくなくなっていた。

「♪〜」

そんな時、外から聞き覚えのある歌声が聞こえてきた。これって……四葉の……

「この歌……」

彼は歌声を聞いて、直ぐ様敷地の外へと駆け出していった。私も彼の後を追っていくと

「姉さん!!」

そこには四葉と四葉のことを姉と呼ぶ桔梗くんの姿があった。

「………神宮くん。私は貴方の姉じゃないよ」

「まだそんなこと言ってるのかよ……」

桔梗くんは悲しそうな顔で、四葉は無表情でいた。この二人は姉弟なの？でも、どうして四葉は否定したのか……私にはわからない

「どうしたんだ？ 一体何が……」

「ひめちゃんときょうくん……どうかしたの？」

何処かに隠れていたのか銀とそのうちの二人も駆けつけてきた。何とも言えない空気の、四葉は一人歩き出した。

「神宮くん、私は姉じゃない。私は姫野として生きていくために家族を捨てたひどい子だから……」

四葉はそう言い残して何処かへ行くのであった。私たちは追うべきなのだろうけど、何故かそれができなかつた。

桔梗くんはただその場に立ち尽くしたままだった。

「な、なあ、姉ってどういうことなんだ？」

「私にもわからない。そのつちは知ってるの？」

「……一応はね。でもきょうくとひめちゃんの関係がここまでだったなんて知らなかつた」

一体姫野と神宮って何なんだろうか？

『まだ話せそうにないので独り言です。姫野家と神宮家は300年前に結ばれて、一緒になつては離れ、一緒になつては離れてを繰り返してきた』

守り神様は本当になんでも知ってるな……神宮家に生まれた子供と姫野家の養子に……保護者は白鳥家のものだったけど、その二人が結ばれて子供が生まれて……

300年間、神宮家と姫野家は同じ家柄だった。そして今も……
だけど私は……

『宿命だからですか？宿命だから神宮の子を弟だと思わないようにしているんですか？』

違う。私は……姫野の役割を知って、神宮の名前を捨てた。だから……

『……姫乃はこんな事望んでないよ』

私はどうすればいいんだ……

30 二人の問題を解決しよう

須美SIDE

お見合いの日から3日経った。四葉はあの日から学校にも来ていない。桔梗くんと会ったことで何かしらあったのかな？

お見舞いに行くべきなのだろうけど、行っても会ってくれるかわからない。

「はあ」

「どうしたんだ？須美」

「わっしー、元気ないよ〜それに考えすぎて眉間にシワ寄ってるよ〜」

そのつちが眉間のシワを伸ばそうとしてきたが、私はそのつちの手を掴んだ。

「ねえ、四葉のこと心配じゃないの？」

「そりゃ、心配だけどさ……」

「昨日ミノさんと二人で会いに行っただけど留守みたいなんだ〜」

二人で会いについて……何で私を誘ってくれなかったのだろうか？いや、今はそのことより留守って……

「先生に聞いたら神様の力を扱えるように特訓してるって」

「でも安芸先生はすごく心配してるんだよ。今の精神状態だと危険だとか何とか……」
本当にどうにか出来ないものか……どうにか……

「そんな事を考えていると教室に先生が入ってきた。まだ授業の時間じゃないけど、早く来たのかな？」

「鷺尾さん、乃木さん、三ノ輪さん、お客様が来てます。授業は大丈夫なので、来賓室に行って下さい」

「「お客様？」」

「誰だろうか？もしかして……」

「三人で来賓室に行くとそこには桔梗くんともうひとり巫女装束を着た女の子がいた。誰だろうあの子……」

「「いめん、急に呼び出して……」」

「いえ、大丈夫だけど……」

「きょうくん、カイちゃん、久しぶりだね〜ふたりとも学校はお休みなの？」

「園子……行ってやるなよ」

確かにそのつちの言うとおり、この二人同じ年なのに学校へ行かずここに来ていいのかな？そのつちと四葉の話じゃ大赦の中では偉い家系なのに……

「ちゃんと許可はもらってるよ。というか同じ学校だし」

「私はそもそも学校に行っていないから大丈夫です。ああ、自己紹介まだでしたね。私は上里海。大赦では巫女をやっています」

大赦の巫女……それに上里って大赦では乃木と並ぶトップの家系じゃ……それなのに学校に行っていないから大丈夫って……

「かいちゃんは巫女の役割が大変で学校に行きたいけどいけないんだよね〜」

「中学生になったら通うので大丈夫です」

「須美、深く考えるのはやめたほうが良いぞ」

「そうね。銀の言うとおりにするわ。それでどうして私達を？」

「実はね。いい加減この姉弟の問題をどうにかしたいんですよ。こつちも忙しいのにも関わらず、話を聞かされて色々溜まっているんです。もう爆発寸前です」

海さんは桔梗くんのことを睨みながらそう言い、桔梗くんは居心地悪そうにしてい

た。というか私達は巻き込まれたと言うべきか。でも四葉としつかり話すいい機会だ。

「分かったわ。何とか二人の関係をどうにかするわ」

「お願いします。鷺尾さん、三ノ輪さん、園子ちゃん」

こうして私達は海さんの依頼で四葉と桔梗くんの問題を解決することになったのだった。

その日の放課後、先生に四葉の居場所を聞くと今日は自宅に戻っているらしく、私、そのうち、銀、桔梗くんの四人で四葉の家の前に来ていた。

「なあ、須美」

「何?」

「桔梗のやつ、一緒に連れて行く必要ないんじゃないのか?」

「気まずくって会えなくなるよ」

「それは……二人はちゃんと話し合うべきだから……」

「須美さん、ありがとうございます」

「ううん、気にしないで」

「おや？」

「あれ々お見合いしていい関係に々」

このままだと詭われる可能性が出てきた。私は急いで呼び鈴を押すと、しばらくしてから玄関が開いた。

「誰………須美ちゃん達………それに桔梗………」

四葉は桔梗くんの姿を見て、直ぐ様扉を閉めようとした。だけど私は直前に扉を掴んだ

「四葉、閉めないで!!」

「………悪いけど今は話すことは………」

「何があつたか知らないけど、ちゃんと話し合わないのはおかしいことよ」

私は四葉の腕を掴み、声を上げた。

「四葉のことは何も知らないけど、それでも桔梗くんと四葉は姉弟なんですよ。それだったら仲良くするべきことよ!!」

「そうだよ。四葉。私も弟がいるから分かるんだ。喧嘩することもあるけど、お前みた

いにいないことにされるのは物凄く辛いことだと思う……」

「ひめちゃん、姫野家としての役割は大切かもしれないけど、それでもきょうくんのことを蔑ろにしたらダメだよ」

「……………」

四葉は黙ったままうつむいていた。すると桔梗くんは四葉の目の前に立ち

「姉さん。姉さんは姫野の役割を背負うために僕のことを捨てたひどい子だって言ったよね。それは違うよ。僕の姉さんは優しくって僕のことをいつだって思ってくれている優しい人だって……だから自分のことをそんなふうに言わないでよ」

「……だってお母さんとお父さんが死んで悲しい思いをしている貴方をひとりぼっちにしたんだよ。そんな私は貴方の姉だって……」

「それでも……姉さんは僕の姉さんだから……」

桔梗くんは笑顔でそう告げた瞬間、四葉は涙を流しながら桔梗くんを抱きつくのであった。

とりあえず姉弟問題は終わったのかな？

四葉が落ち着くと何だか恥ずかしそうにしていた。何だか私達が見ている前で泣いたことが今になって恥ずかしくなったらしい

「ひめちゃんは意外と泣き虫なんだね」

「言わないでよ……」

「そうだ。姉さん……これを」

桔梗くんはポケットからあるものを取り出した。それは剣の形をしたアクセサリだった。

「神宮家に伝わるお守りなんだけど、これは姉さんが持っていて……」

「ありがとう。あれ？でもこれ……」

四葉はアクセサリを見て何か考え込んでいた。そして……

「あれって……」

そのつちも同じように考え込んでいるのであった。

3 1 またね

敵の進行もなく、私達はここ何日かちよつとした休日を満喫していた。とはいえ、普通に学校があるから休日と言えるのかどうかわからない。

私は家で桔梗からもらったアクセサリーを見つめていた。

「神宮家に伝わるお守り……でも何であのとき……」

もらったとき、守り神様は何だか懐かしみ、そして嬉しそうに言っていた。

『そっか……持ち続けてくれたんだ……』

あれってどういう意味なのかな？

そんな事を考えていると端末にメッセージが入った。相手は銀ちゃんからだ。

銀：今家族と買い物ちう

園子：私はその辺ふらふらしてるよ

須美：銀はお疲れ様、そのつちは迷子になったら名前を連呼するのよ

四葉：流石に6年生になって迷子には……

園子：乃木園子です

園子：乃木園子です

園子：乃木園子です

何で言った側から迷子になってるのよ。これは合流しに行つたほうが良いかな

園子ちゃんを探しに出かけると銀ちゃんとその家族さんと園子ちゃんが楽しそうに話していた。

「あれ？四葉、どうしたんだこんな所で」

「どうしたって……園子ちゃんを保護しに来ただけど、銀ちゃんが保護してくれたのね」

「ああ、偶然な」

「ミノさんのおかげで助かったよ」

「どうか迷子になるなよ……」

「それにしても勇者が集まるって言うとな須美ちゃんも……」

「そのうち、銀、四葉!!」

噂したらなんとやら、須美ちゃんも来てくれた。何だかんだで勇者全員揃つちやつた

「須美ちゃんも園子ちゃんが心配で？」

「うん、でも良かった。銀が保護してくれたの？」

「ああ、何だかんだで四葉も須美も園子の事心配なんだな。好きなのか？」

「好きっていうか……」

「まあ親友だからね」

「親友くえへへ」

園子ちゃんが嬉しそうにするのであった。

銀も用事が終わったので、みんなで遊ぶことになった。こうして戦いも訓練もない日々は今日でお終いだけど、またいつかこんな日々があったらいいのにな……

そんな事思いながら、みんなとの帰り道、夕暮れに照らされた銀は

「私はここでお別れだな。須美、園子、四葉、またね」

銀は笑顔でそう告げる中、突然須美ちゃんが帰ろうとする銀ちゃんの腕を掴んだ。

「須美？」

「あ、ごめん。ちよつと……」

「何だよ。もしかして私と別れるのがさみしいとか言うなよ」

「そ、そんなことは……」

「わっしーはミノさんみたいな人が好きなの？」

「それは大変ね。桔梗に教えとかないと」

「だから違うって……ただその……銀がどこかに行っちゃいそうで……」

どこか行っちゃうって……もしかして須美ちゃんが何故かそんな風に思えちゃったのかな？

銀ちゃんはため息をつきながら、須美ちゃんの頭をなでた。

「大丈夫だって、私はどこも行かないし、それに明日また学校で会えるだろう」

「………そうね。そうだったわ。またね、銀」

「おう」

そんな休日から数日後のこと、みんなで遠足に行った帰り道、敵の襲撃が来た。私達は樹海に行き勇者に変身して敵を待っていた。

「遠足帰りに襲ってくるなよ」

「折角楽しい遠足の最後にこんなやつてないよ」

「二人とも、切り替えて」

「まあ二人が怒るのは無理ないけどね」

そんな事を話している内に敵が姿を表した。今回は二体同時に襲撃。一体は周りに変な鱗みたいなものを付けたやつと、サソリの尻尾みたいな敵だ。

サソリみたいなやつは私たちの姿を確認するやいなや攻撃を仕掛けてきた。私達は攻撃を避けると須美ちゃんが分析を始めた

「あの針、どう見ても危険ね」

「私達に当てる気満々みたいだしな」

「それじゃあの針に気をつけて戦えば良いんだね」

「針は私の勾玉で縛るとして、もう一体がよく分からないわね」

「もしかしたらもう一体は防御中心なのかもしれない。矛と盾みたいなものよ」

だとしたら、まずは矛を倒せば良いんだね。盾はみんなで力を合わせれば倒せるし

そう思い、攻撃を仕掛けようとした瞬間、空から何かが降り注いできた。私達は咄嗟に避けるが、避けた方向に針がついた尻尾が私達を吹き飛ばしてきた。

「がはっ!?!」

「うぐつ、四葉……大丈夫か？」

「私は何とか……でも二人が……」

二人は血を流し、意識を失っていた。そして私と銀は敵の方を見ると奥からもう一体、矢みたいなものをつけた敵がやってきた。

「三体か……四葉……二人のこと頼めるか？」

「銀？」

「見た感じ私が一番怪我が少ないからな。二人のこと頼んだ。四葉」

一人であの三体を倒そうとしているの？そんなの無茶に決まっている。でも、あのと
き降り注いだ矢が右肩に刺さっていて、私もちやんと戦えるかどうかわからない

「須美、園子、四葉……またね」

「銀!？」

銀は迫りくるバーテックス三体に向かっていった。駄目だ、銀一人じゃ倒せても死ん
じやうかもしれない。こんなときどうすれば……

『役割を果たすときですよ。四葉』

3 2 友を助けるために

突然聞こえた守り神様の声。役目を果たす時って、どういう意味なのかわからない。だけど銀ちゃんを助けられるって言うなら……

「守り神様、どうすれば……私の友達を……銀ちゃんを助けられるの？」

祈りを捧げた瞬間、ポケットに仕舞ってあった桔梗からもらったお守りが飛び出してきた。私はお守りに触れると同時に光りに包まれた。

銀SIDE

「どうだ!!」

血だらけになりながらも、敵にダメージを与えていくが、流石に三体同時だとかなりきつい。逃げ出したい。痛みで思いつきり泣きたい。

「だけど私の後ろには守るべき人がいるんだ。だから……」

「泣き言言ってる場合じゃないよな。見せてやるよ。これが人間様の意地つてものを!!」

もう一度敵に向かつていこうとするが、敵はそれと同時に攻撃を仕掛けようとする。ああ、ここで私は死ぬんだ。ごめん。須美、園子、四葉。一緒に帰れそうにない

諦めかけたその時、しつぽ付きのパーテックスが真つ二つに切り裂かれ、誰かが私の事を抱きかかえていた。

「意地を見せる前に、生きて帰れることを考えたほうが良いよ。銀ちゃん」

その声は優しく、温かった。助けに来てくれたんだ

「四葉……」

四葉SIDE

ギリギリだった。ギリギリの所で銀ちゃんを助けられた。私は抱きとめた銀ちゃんを下ろし、残った二体のパーテックスを睨みつけた。

「あの矢を飛ばすやつと変な鱗持ちちね」

「気をつける……あの鱗みたいなやつ、矢を反射して来る」

ということとは自由に軌道を変えられるっていうことだ。私は銀ちゃんの方に剣を向けると、白い障壁が現れ、銀ちゃんを包み込んだ。

「温かい……それに痛みが……」

「まだ使い慣れてないからかな？ある程度は治癒できるけど、腕が取れたり、骨折とかは治せないみたい」

「初めて使ったのに、なんでそんな事がわかるんだ？」

「えっと……守り神様が……」

言いかけた瞬間、無数の矢が私達目掛けて降り注いできた。私は勾玉を取り出し、全ての矢を弾いていった。

「勾玉も威力が上がってる……とりあえずまずは……」

私は無数に降り注ぐ矢を剣で弾きながら、鱗持ちのバーテックスの前まで移動し、

「厄介な奴から切り裂く!!」

大きく剣を振った瞬間、バーテックスが真っ二つに切り裂かれた。これではらくは行動不能になったはず。あとは……

「あの矢を放つやつを……」

矢持ちのバーテックスの方を見ると、何か嫌な気配を感じた。あの口から飛び出ている矢が何だか発射してきそうだった。まさかあれで一気に倒すつもりなの？

「防ぎきれるかな？」

やってみなきゃわからないよね。

私は剣を構えた瞬間、バーテックスの口から巨大な矢が発射された。私は剣で矢を防ぐけど、威力が強すぎてそのまま後ろにふっ飛ばされそうになる。

このままだと剣が折れるか壁に激突するか……どっちも嫌だな

「うおおおおおおお!!」

後ろから叫び声が聞こえた瞬間、誰かが支えてくれた。振り向くとそこには腕が折れているのに私を支える銀ちゃんだった。

「銀ちゃん!」

「二人で頑張るなよ……お前のことを支えるくらい私だって」

「二人でつて……それ……」

「ミノさんが言う？」

更に声が聞こえた瞬間、巨大な矢をへし折られた。折ったのは傷だらけの園子ちゃんだった。

「もう二人とも無茶すぎだよ」

「園子……」

「銀と四葉ががんばった分、トドメは……私が!!」

青白い矢がバーテックスを貫いた瞬間、花びらが舞った。敵を退けたって言うことだよ。これ……

そう思いながら、私の意識は薄れていった。

『頑張ったね。四葉』

気がつくくと私の目の前に、私に似た女の子が椅子に座っていた。彼女がまさか……

「守り神様?」

『せいかい』

何だか思っていたより明るい人なんだけど……こうもつと神秘的に雰囲気をもつと人かと思つたのに……

『コレが始めましてになるのかな？それとも会つたこと覚えているかな？』

「会つたことありましたっけ？」

『覚えてないか。そういう処置をしたつて言うことなのか？まあそこら辺は追々ね。それで四葉、三体同時進行を友達と一緒に乗り越えたね』

「は、はい」

『剣は本来は癒やし力なんだけど、攻撃として扱うなんてことやったのは四葉が初めてだよ』

私が初めて……でもこの剣は神宮家のお守りだから私のご先祖様たちは今までどうしていたんだろう？

『あとは鏡だけ……焦ることはないけど……四葉、もし身体に異常があつたらすぐに言つてね』

「身体に？」

『神の力はすごく危険だから、なるべく異常が出たら私に伝えて、力を抑えるようにするから』

「は……はこ」

て……
神の力が危険って……どんな風に危険なんだろうか？それにさつき言っていた鏡つ

33 銀の道

バーテックス三体との戦いから2日がたった。私はあの戦いの後、少しの間眠りについてみたみたいだ。

先生が言うには今までより強い神の力を使ったことによる後遺症みたいだ。今の所他に変化はないから大丈夫みたいだけど……

「……………銀ちゃんのお見舞いに行かなきゃ」

私は銀ちゃんが入院している病院へと向かった。

あの戦いで銀ちゃんは死にかけていた。それを私が剣の力で何とか助けられることが出来た。だけど……

「銀ちゃん、大丈夫」

「よお、四葉。お前は無事そうだな。全く倒れたって聞いて吃驚したぞ」

銀ちゃんはいつもと変わらない笑顔を向けてくれた。だけど私は銀ちゃんの身体に

巻き付いた包帯に目をやった。

全治半年。剣の力で治しても、今の私にはこれが限界。そして大赦はある決定を下した。銀ちゃんは怪我が治っても、今後の戦いには参加させない。つまり戦線離脱だ。

「ごめんね。私がつとしつかり力を使えたら……そんな風にボロボロになつてなかつたよね」

「四葉……」

銀ちゃんと一緒に戦うことができなくなつてしまった。私が頑張つていれば……

泣きそうになる私だったが、銀が思いつきり頭にチョップをしてきた。

「いたっ!」

「何言つてるんだよ。お前がいなかったら私、死んでたかもしれないんだぞ。お前に謝ってもらう理由はない。逆に四葉、助けてくれてありがとうな」

「銀ちゃん……」

「それにな。大赦の人から聞いたんだけど、私の勇者システム、次の勇者に渡すために色々と改良するんだつてさ。そうすればその人が私の分までみんなの事を守つてくれるつてことだよな」

「そうだね……」

「だからお前や須美、園子は私の分まで頑張つてくれよな」

「……うん」

銀ちゃんの思いは次の勇者に、私達は銀ちゃんの分まで頑張らないと……

「そうだ。さつき謝った罰として一個頼んでいいか？」

「えっ？」

罰ってなんだろう？もしかして物凄く嫌なことでもされるのかな？

「歌、聞かせてくれないか？」

「歌？」

「お前、歌うのが大好きなくせに私たちの前ではあんまり歌ってくれないじゃん。たまには聞かせろよ〜」

うう、歌か……恥ずかしいけど、これは罰だもん。歌わないと……

「♪〜♪〜」

私は何も考えず、歌った。病室内に私の歌声が響き、ある程度歌い終わると……銀ちゃんは何故か泣いていた。

「ご、ごめん。下手だった？」

「いや、何ていうか心にぐつと来てさ……」

そ、そんなにすごいのかな？私の歌って……ちよつとうれしくなってきた。

「四葉、頑張れよ」

「うん」

須美SIDE

病室の外で銀と四葉の会話を聞いていた私とそのっち。本当に銀は……

「私たちも頑張らないとね。そのっち」

私はそのっちの方を見ると、そのっちはペンダントを見つめていた。あのペンダント、どうしたんだろう？

「そのっち？」

「あつ、どうしたの？わっしー」

「何だかボーとしてたけどどうかしたの？」

「いつもボーとしてるよ私〜」

そ、それはそうかも知れないけど……でも何だか気になる。本当にどうしたんだろう

?

「そのペンダント……」

「あ、これ？これはね。乃木家に代々伝わる由緒正しきお守りなんだ」

「お守り……」

「確か桔梗くんが持っていたあの剣の形をしていたペンダントもお守りって……大赦の有名な家系はそういうお守りを持っていることが多いのかな？」

「わっしー、頑張ろうね」

「うん」

「この時、私はもっとしっかりそのつちからお守りのことを聞いておけば、違った未来へ行けたのかもしれない。」

34 対話と選択

須美ちゃんと園子ちゃんの二人が次の戦いに向けて、訓練を頑張っている中、私は芸先生と一緒に大赦に来ていた。

「新しい勇者システム……ですか？」

「ええ、既に二人には渡しているところよ」

新しい勇者システム……それさえあれば今後の戦いが有利になる。ただ気になるのは私だけ新しい勇者システムが組み込まれた端末をもらっていないことだ。

「あの先生。私の……」

「今回あなただけここに呼んだのは、ある選択をしてもらったためです」

「選択？」

「こちらです」

先生に案内された部屋に入るとそこには海ちゃんともう一人の巫女装束を着た少女、藤森けいなが待っていた。これは……

「先生……これは……」

「姫野四葉様、今回お呼びしたのはあなたに選択と対話の機会を与えるためです」

「選択と対話……」

海ちゃんの前には会ったときとは違う口調で話していた。真面目モードということか
「ひー……姫野さん。ここにあなたの新しい勇者システムが組み込まれた端末があります」

けいなちゃんが端末を見せながらそう告げた。わざわざ渡すためだけにここに呼んだだけじゃないよね。まさか……

「上里様、藤森様。あなた方が言いたいことはわかっています。その勇者システムを手にすれば、私は須美ちゃん、園子ちゃんと同じ力を扱えるということですよね」

「……はい」

「だけど問題がある。それはその勇者システムと私の守り神としての力は同時に使えることはできない」

「その通りです。本来勇者システムは神樹様の力を借りてのものです。守り神の力と混ぜ合わせることは不可能なのです」

けいなちゃんの言葉を聞いて、私の予想は当たっていた。守り神の力を捨てない限り、私は新しい力を得ることはできない。

新しい力を得たところで、私は守り神の力を扱えない。これが与えられた選択……

「今、貴方がすべきことは……」

「わかっています」

私は目を閉じ、守り神様に呼びかけた。

『話は聞きましたよ。四葉』

「勇者として戦うために、力を得て、力を捨てるか。今までと同じように戦うか……前に守り神様は言ってくれました。私には運命を変える力があると……」

『はい。その通りです。貴方はこれまでの姫野と比べ、守り神の力を扱えるようになっていきます。ですが現時点では完全には扱えない。初代姫野は勇者の力と守り神の力を同時に扱えていました』

初代……私のご先祖様……今の私はご先祖様に劣っている。だとしても……

「守り神様、今の私ではどちらかを選ぶしかない。そうですね」

『はい』

「でも今この場で、その二つの選択を打ち破ります」

私は目を開け、勇者の端末を手にするのであった。

須美 side

新しい力『満開』でバーテックスを一体撃退する中、私の両足が動かなくなった。そしてそのつちも目が見えなくなるといふ現象に陥っていた。

「わっしー、なんだかおかしいよ。こんな戦い方でいいの?」
「わからない。でも今は……」

奥にいる巨大なバーテックスが巨大な炎の塊を発射しようとしている。このままだと元の世界で私たちのことを気にかけてくれる銀や家族のみんな……そしてこの場にまだ現れていない四葉のために……

「そのつち、私があれば止めるから、後はお願いね」

「わっしー!!」

「満開!!」

私は満開し、巨大戦艦に乗り込み、こちらに向かってくる炎の塊に向かって、砲撃で防いでいく。

「このまま……終わるわけには……」

炎の塊と砲撃が消えると同時に、私の満開は消えた。あとは……任せたよ。そのつち……

気を失いかけながら、地面まで落ちていく私。だけど何かがそつと私を抱きとめた。

「……四葉」

「ごめんね。遅くなって……」

「ううん、信じてたから……そのつちのことお願いね」

「……須美ちゃん、また歌を聞いてね」

「うん」

私はゆっくり目を閉じた。最後に見た光景は白い装束に、髪を一つにまとめた四葉の姿だった。

四葉 side

私は須美ちゃんをゆっくり地面に下ろし、園子ちゃんの所に向かった。園子ちゃんは壁の近くまでバーテックスを押し戻していた。

「四国の壁……」

私は壁の外に出ようとしたとき、園子ちゃんが戻ってきた。だけど園子ちゃんの様子がおかしい

「ひめちゃん……壁の外が……」

「何があつたの？」

「実は……」

園子ちゃんが何かを言いかけた瞬間、壁の外から炎の弾丸が飛んできた。私は鏡を取り出し、防いでいった。

そして壁の外から今まで退けてきたバーテックスがすべて現れた。まさか……再生している？

「園子ちゃん、須美ちゃんの所に行つて」

「ひめちゃんは？それにその衣装……守り神の力を捨てたの？」

「ううん、違うよ」

私は持っていた端末を見せた。そこにはガーベラの花の紋章と勾玉と剣の紋章が映し出されていた。

「勇者の力と守り神の力を無理やり混ぜてみたの。だから園子ちゃんたちよりちよつと強いかな」

「で、でも……そんなことひめちゃんにできないって聞いてるよ……なのに……」

園子ちゃんはきつと私の体のことを心配してくれている、ごめんね、実はものすごく体が痛いし、気を抜くと意識がなくなりそうだった。

でも弱音は言ってられない。

「あとは私に任せてね。園子ちゃん」

35 笑顔の君に会うまで

迫りくる十二体のバーテックスに向かって、私は剣を取り出し、ピスケスバーテックスを切り裂くが、後ろから無数の矢が降ってきた。咄嗟に鏡を作り出し、防いでいくがすぐに鏡は壊れてしまった。

「初代姫野が使っていた鏡の力だけど、すぐに壊れちゃうな……」

守り神様曰く勾玉と剣は初代が持っていたアクセサリーらしい。だけど鏡だけがまだ私の手にはない。だから私は守り神の力で鏡を作り出すけど、完全じゃないか

「それだったら勾玉!!」

勾玉を無数に出現させ、降り注ぐ矢を全て撃ち落としていった。更に剣を手にし、大きく振った瞬間、キャンサーバーテックスとサジタリウスバーテックスを切り裂いた。

「あと9体……うぐっ?!」

体中に痛みが走る。無茶なことをしたからその反動が出てきている。精霊の力があから死ぬことはないらしいけど、無理やり力を組み合わせたから精霊の力が上手く扱えない

「変身解除したいけど、ここで負けるわけには……」

私は剣を構えた瞬間、ヴァルゴバーテックスとアクエリアスバーテックスがなにかに貫かれた。あれは槍？

「ひめちゃん!!」

「園子ちゃん……須美ちゃんは……」

「聞いて、ひめちゃん。新しい勇者システムと壁の外のことを……」

「何かあるの？」

「満開は私達に絶大な力をもたらすけど、その反動で私たちの身体の一部を犠牲にしていくの……私の目も、腕も……それにわっしーは両足と記憶が……」

「……その身を犠牲に……そうまでしないと倒せないってことなのかな？」

「それにね。壁の外は炎に包まれた世界だった……私達が知っていることとは全然違ったの」

大赦は私達に嘘ついていたりっていいのかな？でも、それでも……

「園子ちゃん、大赦は満開のことも壁の外のこと隠していた。だけど真実つて時には残酷らしいよ」

タウロスバーテックスとスコープオンバーテックスを勾玉で縛り上げ、バラバラにしながら私はそう告げた。真実を隠していたのはいけないことかもしれない。だけどそれでも私はきつと戦っていた。だって……

「園子ちゃん、私達は何だったっけ？」

「えっ？」

「人間で、勇者だよ。どんな事があっても挫けず戦おう。みんなの笑顔のために……」

「ひめちゃん……うん!!」

私と園子ちゃんは残りのバーテックスに向かっていった。戦いが終わったらまたみんなと笑い会える日々に戻れることを信じて……

園子SIDE

あの戦いから一ヶ月、私は身体の殆どを動かすことが出来なかった。満開と散華……大赦が隠していた真実の一つ。

「ミノさん、大丈夫？重くない？」

「大丈夫だって、園子こそ大丈夫か？ 身体……」

「私は大丈夫く痛みはないし……」

私はミノさんに車椅子を押してもらいながらある場所に向かっていた。そこは一人の少女が眠る場所……私の親友の姫野四葉が眠っていた。

「来たよ〜ひめちゃん」

「まだ眠ってるんだな」

「あの時、ひめちゃんは守り神と勇者の力を無理矢理混ぜ合わせたから、その反動で眠りについてるんだって……」

「四葉も須美も……前みたいに遊べないな」

「仕方ないよ〜でもいつかきつと……四人で遊べるように願ってしよう」

「ああ」

あの戦いでわっしーは記憶を失い、東郷美森として生きている。でも私達は会うことすら許してもらえてない。いつか散華で失ったものが戻ってくることを信じて……

「きつとまた会えるよね。笑顔の君に……」

私はひめちゃんにそう言うけど、答えてくれない。もう一度遊んで、歌を聞かせてほしい。

「行くうか」

「うん」

『止めることが出来なかった……無茶したら止めるようにしてたのに……』

「そんな悲しそうにしないで下さい。私は私が選んで道を進んだだけです……」

『でも……貴方はいつ目覚めるかわからないですよ……もしかしたら……』

「あのね、何となくだけどこの眠りは反動からきたものじゃないと思うの」

『とうとうと……』

「あの時、無理矢理混ぜ合わせていたけど、いつかまた敵が攻めてくるまで、私が守り神

の力と勇者の力に耐えきれないように力を蓄えているのかな」

何となくだけど、そんな気がしていた。この前みたいに体中に痛みが走るようになるんじゃない、精霊の力も守り神の力も完全に扱える状態にまで、私は眠りにつき成長しようとしている。

「だから大丈夫です」

『四葉……それでしたら眠りについていてる間、私が色々と教えます』

守り神様が剣を取り出し、私も白い衣装に変わった。

『とある世界である二人を鍛えたくらいですから……厳しいですよ』
「覚悟の上です」

結城友奈の章

36 目覚めた勇者

あれから二年ぐらい経つたらしい。らしいというのはこの空間において時間の流れとかよくわからないからこういう言い方しかできないからだ。

『……………時が来ました』

「どうしたの？ 守り神様、急に真面目そうな声を出して……………別に雰囲気作りとかいいからね」

『いや、たまには神様のなことをしようと思って……………』

ずっと対話と訓練を続けてきて、わかったことがある。守り神様は私達とそう変わらない。何というか神様というよりは普通の人間に近い感じだった。

「それで時が来たって……………」

『そうでした。今神樹から聞いたのですが、敵の進行が近い内にあるみたいです』

「敵……………それじゃ私が目覚められるの？」

『はい、この二年間、頑張りましたね。二年前と違い、勇者の力と守り神の力を混ぜ合わせた状態で戦えますが、くれぐれも満開だけは……………』

「満開……絶大な力と引き換えに自身の体を蝕んでしまう……」

『使わないようにといたいたいですが、貴方はきつと使いそうですね。だから本当にいざという時に使って下さい』

「はー」

『それでは私は見守っています』

守り神様の姿が消えると同時に、私の目の前に白い穴が空いた。戦いの日々がまた始まるのだろうか……私はきつと守ってみせるから……

園子SIDE

「神託があつたんだね」

私はベットの前に立つ仮面を付けた少女にそんな事を言っていた。そしてその少女の後ろには似たような仮面を被った人たちもいた。

「はい、近い内に敵の進行が……」

「勇者候補は？」

「それは……犬吠崎風様の担当地区です」

「そっか、狙い通りなんだね。適正値が高いこの近くに彼女を送り込んだ……」

「その……乃木様。どうしてその適正値の高い……」

「……彼女は大赦に伝わる風習にならって付けられた名前を持っている」

生まれた時に逆打ちをした少女にとある名前をつけるといふ風習。そして逆に男の子だった場合は『ゆう』という名前をつけるという……

「高嶋優くんも似たような感じだけ……彼は勇者になれない」

何というか何でこんなつまらない話をしているのだろうか？ 私は目の前の少女に向かってあることを告げた。

「敵が現れたって言うなら、あの子も目覚めるのかな？」

「……病院からはなんと……」

「私は信じてるから……目覚めることを……」

四葉SIDE

目を覚まし、気がつくとは私は樹海にいた。敵が来たと同時に送られたということか

……

それにしてもちよつと気になることがあった。

「病院にいたからなのかな？病院着のまま送られるなんて……」

せめて私服に変えてほしかった。そういうところは融通聞かないな神様って……

『聞こえてますよ。四葉』

やばい。聞こえていた。

『こつちとしてギリギリに間に合うようにしたんですよ。服装関係は神樹に文句言つて下さい』

そ、それはそれでちよつと気がひけるけど……とりあえず勇者に変身するために端末を取り出した。

「久しぶりの変身……行くよ!!変身!!」

まばゆい光と共に私は白い衣装に姿を変え、両手には勾玉型の鉄甲と腰には白い剣が装備された。

「基本的に勇者ベースだけど武器は守り神なんだね」

私は端末でこつちに来ているであろう勇者たちを探した。遠くの方に二人、近い所に二人。近い所にバーテックスが近づいてきている。急がないと……

私は全速力で走っていると反応があつた場所に着いた。すると一人の女の子が勇者に変身し、バーテックス……あれはヴァルゴ。ヴァルゴバーテックスを殴った。

「私は讃州中学勇者部!結城友奈!私は勇者になる!!」

高らかに宣言を上げた。うくん、ちよつと私の見せ場が無かつたかな

『彼女はまさか……!?!』

「どうしたんですか?守り神様」

『い、いえ、それよりもまだ敵は生きています』

守り神様の言うとおり、ヴァルゴは傷ついてもまだ卵型のミサイルを飛ばそうとしていた。私は咄嗟に両拳を構え、思いつき駆け出し、ミサイルの発射口を殴りぬいた。

「誰？」

「お姉ちゃん、私たちの他に勇者が？」

「ううん、私は聞いてない。誰なのあの子……」

黄色い衣装の子と緑色の衣装の子がこっちに來てそう言っていた。仕方ない。自己紹介でもしておくか

「初めまして、私は姫野四葉。勇者です」

「あ、私、結城友奈っていいいます。あのさつき助けてくれてありがとうございます」

「敬語はいいよ」

「ちよつといきなり來て早速仲良くなるのはいいけど、敵はまだ倒せてないわよ」

バーテックスの方を見ると何だか再生している。何というか前に比べて倒しにくくなつた？

「今から封印の儀を始めるわ。準備はいい」

今はとりあえず言うとおりににしたほうがいいと思い、私は言われるまま彼女たちと同じように敵を囲んだ。

そして端末に映し出された祝詞を唱えた。

「かくりよのおおかみ あわれみたまい」

「めぐみたまい さきみたま くしみたま」

「おとなしくしろ〜!!」

「ええ〜、それでいいの!?!」

「要は魂込めれば、言葉は問わないのよ」

「何というかそういう事は最初に教えてほしかった。そうこうしている内にパーテックスから四角錐の物体が現れた。」

「なっ、なんかベロンと出た〜!」

「封印すれば、御霊がむき出しになる。あれはいわば心臓。破壊すればこっちの勝ち!」

「それなら分かりやすい!!」

私は御霊を勾玉で縛り上げ、逃げられないようにした。それを見て友奈ちゃんが思いつきり殴るが、硬すぎてヒビすら入らなかった。

「かたああい!! これ硬すぎるよお〜!」

「それだったらもう少し縛りをきつくして……」

縛りをきつくするとみるみるうちに御霊にヒビが入っていった。私は友奈ちゃんに合図し、友奈ちゃんは思いつきり御霊を殴るのであった。

37 二年の歳月

友奈ちゃんのパンチがヴァルゴバーテックスの御霊を破壊し、何とか撃退することに成功した。

「これが今の勇者……」

「今のつて、あんた何を言ってるの？そもそもあんたは……」

黄色い子が何かを言いかける中、世界が樹海から二元の姿に戻っていった。

気がつくときどこかの屋上に来ていた。ここから見える風景的には学校の屋上みたいだけど……

「……あれ、ここ学校の屋上？」

「神樹様が戻してくださったのよ」

「東郷さん無事だった？ 怪我はない？」

「友奈ちゃん……友奈ちゃんこそ大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

「うん、お姉ちゃんは何ともない？」

「平気平気」

「怖かったよお、お姉ちゃあん。もう訳わかんないよお」

「……よしよし、よくやったわね。冷蔵庫のプリン、半分食べていいから」

「あれ元々私のだよお」

うんうん、何だか仲のいい感じだな。ただあの東郷って呼ばれている子……あの子だよ。記憶がないって聞いているから過去のことを話すのはまずいだろうな

「ほら、皆見てみなさい。あれが今日私達が守って街よ」

四人が屋上から街の景色を眺めているけど、個人的にはちよつと今はやめてほしい

「あのくごめん。ちよつと手を借りていいかな？」

「「えっ？」」

私は近くにあつた壁に体を預けた状態で四人に声をかけた。樹海に行つた時はそれでもなかつたのに、こつちに戻ってきたらものすごい疲労感が襲つてきていた。

「だ、大丈夫？ 四葉ちゃん」

友奈ちゃんが私に肩を貸してくれた。まさかここまで体力が落ちているとは……

『二年間眠っていましたからね。肉体面に関しては徐々に戻ってくる感じですよ』

それはそれで助かるけど、できれば早めに戻してほしいかな。

「あんた、姫野だっけ？その服……病院着よね」

「えっと、色々とあつて……できれば大赦の方に連絡お願いします。きつと病院中大騒ぎになってると思うので……」

「そうね。ああ、私は犬吠埼風。こっちは妹の樹」

「風さん、樹ちゃんね。詳しい話をしたいけど、できれば明日でもいいかな？」

「分かったわ。あんたの今日の戦いやら落ち着いた感じを見る限り、私達より情報を持ってるそうだしね」

それから私は風さんに呼んでもらった大赦の車に乗って、自宅へと戻るのであった。

自宅に戻るとそこである人達が待っていた。

「おかえりなさい。姉さん」

「全くいきなり病院からいなくなつたと思つたら……大變だつたみたいね」

「まあまあ今は勞つてあげようよ」

「桔梗、渚、奏。来てたの」

私を待つていたのは桔梗、土居渚、白鳥奏の三人だつた。というか私が目覚めてここに集まるの早すぎない？

「姉さん、ほら、まだ身体が」

「ありがとう。桔梗」

私は桔梗の身体を借りながら、家に入るのであつた。

家に入り、桔梗がお茶を用意してくれる間、家の中を見つめていた。二年間眠つていたからホコリとか何やらがすごいと思つていたけど、意外と綺麗だつた。もしかして掃除してくれてたのかな？

「それにしても讃州組が勇者になるなんてな〜」

「渚は納得してないんだね。仕方ないよ。あそこには友奈と鷲尾……東郷がいるから」

「大赦は風習によつて付けられた女の子を勇者になる確率を上げるために、須美ちゃん……今は東郷さんだっけ？彼女を近くに？」

「そうそう、二年前の記憶がないから色々都合がいいからみたいだけだ」

奏は何だか気に入らないみたいだ。もしかして勇者になれなかつたことがそんなに

……

「姉さん、一応大赦から伝えるように言われてることがあるけど、大丈夫？」

「うん、いいよ」

桔梗から聞かされたのは、東郷美森……鷺尾須美に対して失った記憶について触れないこと、理由としては記憶のことに触れて精神的に不安定になってしまうこと。

乃木園子、三ノ輪銀との接触は禁じるとのこと。現状乃木園子は祀られている。おいそれ会える立場ではないということだった。

「何というか時間って残酷だね。友達に会えなくなるなんて……」

「姉さん……」

「何て言ってる場合じゃないよね。今は勇者としてパーテックスを倒さないと……」

「今やるべきことをやれば、きつと園子ちゃんに会えるはずだ。今は頑張らないと……」
『……………時の流れは残酷……………か。それだけじゃないよ。あの世界で彼らから聞いた話が正しければ、四葉、私は貴方が運命を変えられるかどうか見届けますね……………』

次の日、守り神様の力なのか衰えていた身体がもう普通の状態に戻り、私は讚州中学に来ていた。

「何というか大赦も準備が早すぎるってというか……転入手続きするの早いな」

明日から転入することになったけど、これから一緒に戦う人たちに挨拶をしないと、

私は先生にみんながいる場所を聞き、勇者部部室に行くと東郷ちゃんと友奈ちゃんが何故かどこか行く姿が見えた。

「何事？」

「あれ？貴方は……昨日」

「姫野四葉……だったかしら？何で普通に歩けてるのよ」

「樹ちゃんに風さんでしたっけ？そこら辺の説明とこれからのために挨拶をと思ったんですけど、お取り込み中？」

38 戦い再び

居間の勇者たちに会いに行った私だったけど、どうやら問題が起きたみたいだった。話を聞く限り、須美……東郷ちゃんが勇者部のこと、自分たちが集められたことについて隠し事をされたことについて怒っていたみたいだった。

「まあ大赦からしてみればみんなに余計な不安を持たせたくないからって言う配慮だからね」

「でもやっぱり黙っていたことについて、東郷が怒るのも無理はないわ」

「いきなり話して信じろって言われてもしょうがないとおもうし、風さんのやり方は間違っていないわよ」

「あ、あの……」

風さんの相談に乗っていると樹ちゃんがおずおずと手を上げて、何か言いたそうにしていた

「どうしたの？ 樹」

「なにか質問？」

「四葉さん、ものすごく馴染んでませんか？」

「確かに……初対面じゃないとは言え、会って間もないのに馴染んでるわね」

「それは……まあ性格上の問題だよ。それにこれから一緒に戦うんだから仲良くならな
いといけないからね」

「そうですけど……」

「そうだ。樹、どうすれば東郷に謝れるかタロットで占ってみて」

「タロット？」

「樹は占いが得意なのよ。だからどう謝るべきか占ってもらおうと思ってるね」

占いか……ちよつと興味あるな。どんな風にやるのか覗き込んだ瞬間、樹ちゃんが
持っていたタロットが止まり、端末からアラームが鳴り響いた。

「敵の襲来!？」

「昨日の今日で!？」

二人が驚く中、私は今回の敵の襲撃が早いことに疑問を覚えた。不定期に襲ってくる
とは言え、一週間から一ヶ月後くらいかと思っていたけど、なんだか敵も焦っているみ
たいだった。

「2日連続か……がんばりますか」

私達は樹海に訪れると友奈ちゃんと東郷ちゃんと合流した。

「東郷さん、待っててね。倒してくる」

「っ！ 待って、私も……」

東郷ちゃんは自分も変身して戦おうとするけど、昨日の戦いの恐怖を思い出して震えていた。

あの彼女がこんなに震えるなんて……記憶がない影響なのか……でも普通はあんな化物にあつたら当然の反応だ。

「大丈夫だよ、東郷さん。……行ってくるね」

「友奈ちゃん……！」

友奈ちゃんは恐怖なんて吹き飛ばすくらい笑顔で東郷ちゃんに向けて変身した。彼女は強いな……

『どの世界でも彼女は彼女のままですから……本当に強い子ですよ。彼女もそしてあの子も……』

守り神様は何の話をしているんだろうか？ どの世界って一体……

『そうですね。あなたはあのこと覚えてないですもんね』

一体何の話だろうな？とりあえず私たちは勇者に変身し、敵に向かっていくのであった。

敵は三体……キャンサー、スコープオン、サジタリウス。あの時銀ちゃんと二人で戦った奴らだ。

「復活したのね」

「復活？」

「なんでもないわ。風さん」

今は伝えるべきじゃないと思った瞬間、空から無数の矢が降り注いできた。私は勾玉で全て撃ち落とし、みんなは精霊のバリアで防いだ。だけど私と友奈ちゃんは風さんと樹ちゃんの二人と分断されてしまった。

「撃つてくる奴を何とかしないと！」

友奈ちゃんはサジタリウスを倒そうと大きくジャンプした瞬間、スコープオンの尻尾が友奈ちゃんを打ち落とし、地面に倒れた友奈ちゃんに向かって尻尾の針を刺そうとしていた。

「うくっ」

「友奈ちゃん!？」

私は助けに行こうとするけど、サジタリウスの矢が妨害してきた。

「剣で……発動できない!？」

『忘れたのですか? 力をつけましたが剣は攻撃用ではないんです。本来の使い方をしないと発動は出来ません』

「くっ!？」

勾玉でなんとかするしかないのだけど、どうすれば……

「……やめろ」

突然東郷ちゃんの声が聞こえた気がして、東郷ちゃんの方を見ると彼女は何かを叫ぼうとしていた。

「友奈ちゃんをいじめんなああああ!!」

東郷ちゃんの方に向かっていった攻撃が卵型の精霊に防がれた。友達のために戦う決意をしたっていうの……

「本当に変わらないな」

「私、いつも友奈ちゃんに守ってもらってた。……だから、次は私が勇者になって、大切な人たちを、友奈ちゃんを守る!!」

東郷ちゃんはまだ優しい光に包まれ、卵型の精霊の他にタヌキ型の精霊と青白い炎の精霊が現れた。

「もう、友奈ちゃんには手出しさせない」

彼女はスコープピオンに向かって二丁の銃で態勢を崩し、更に追撃として散弾銃で攻撃を加えて友奈ちゃんを助けた。

「東郷さん……」

「友奈ちゃん……私も一緒に戦う」

「うん」

「仲いいね。二人とも……」

「四葉ちゃんも一緒に行こう」

羨ましそうに言ったら、友奈ちゃんが手を差し伸べてくれた。優しい子だな。

「それじゃ勾玉で縛り上げて、風さんたちの所まで運びますか」

私は態勢を直そうとするスコープピオンを勾玉で縛り上げ、友奈ちゃんたちと一緒に風さんたちのところへと向かうのであった。

39 守り神の転入

友奈ちゃんと東郷ちゃんと一緒に風さんたちの所に行くとサジタリウスの攻撃から逃げ続けていた。

友奈ちゃんはスコープピオンをキャンサーの方に投げ飛ばし、スコープピオンはキャンサーの上に落ちるのであった。

「そのエビ運んできたよ」

友奈ちゃんは大きく手を振るけど、あれはエビじゃなくなつてサソリなんだけどな……

「あんた達、無事だったのね。それに……」

「東郷先輩」

「遠くの敵は私が狙撃します」

「一緒に戦つてくれるのね。みんな行くわよ」

「それじゃ早速！ 樹ちゃん、合わせて」

「えっ、はい」

私は樹ちゃんと一緒に三体のパーテックスをワイヤーと勾玉で縛り上げ、風さんと友

奈ちゃんの二人で封印の儀を行い、御霊を取り出した。

「出た!!」

「行くわよ!!」

友奈ちゃんと風さんの二人で御霊を2つ破壊し、残った一つを壊そうとした瞬間、遠くの方からの狙撃で御霊が撃ち抜かれた。

「東郷さん、すごい」

「さすがね」

こうして私たちの二度目の戦いは終わりを告げるのであった。

二度目の戦いから数日後、私はようやく讃州中学に転入することになった。
「初めまして、姫野四葉です」

簡単に自己紹介を終えると、クラスの中に東郷ちゃんと友奈ちゃんの姿があった。これも大赦が気を利かせたと考えるべきなのだろうか？

まあ確かに一緒にいたほうが色々都合がいいだろうけど、東郷ちゃんが須美ちゃん
の時の記憶を思い出す切っ掛けになったりしないか心配だった。

放課後になり、私は勇者部の入部届を持ってきて、改めてみんなに説明することにし
た。

「それじゃ四葉が入部したということ、私から質問いいかしら？」

「質問？」

「あんた、前に私達のことを見て、『今の勇者』って言ってたけど何者なの？」

うーん、うっかり言っちゃったりしてたから言い訳しようがないし、記憶関係に気を
つけながら話さないとな。

「そうだね。実はというところは二年前に勇者として戦っていたの」

私の言葉を聞き、その場にいた全員が驚いていた。いや、東郷ちゃんもでしょって言
いたいけど、我慢しないと

「というところは四葉ちゃんも先代ってことになるの？」

「まあそうなるかな？でも先代とかそういうの気にしないで」

変に気を使われたりするのほちよつと嫌だ。でも友奈ちゃんを見ているとそんな事
するように思えないけど……

「先代……それにしても封印の儀とか知らない感じがしたけど、それはどうなの？」

「風さん、二年前はバーテックスを倒すつてことは出来なかったの。やれたとしたら追い払うだけ。しかもこの間の戦いとかで精霊がみんなを守ってくれていたけど、二年前は精霊のバリアとかなかったから」

「それじゃ初めて四葉さんと会った時に病院着を着ていたのは……」

あれ？私、戦いで負傷して病院に入院していたことになってる？ここはちゃんといふべきなのだろうけど、守り神については話すと長くなるな」

「そうそう、それで二年ぐらい入院してたの。そしたら……」

「それにしても最初の戦いで倒れたりしていませんでしたっけ？」

「久しぶりの戦いで疲れちゃって……」

「あれ？すぐに元気になったような気がするけど」

わー東郷ちゃんと友奈ちゃんのせいかな守り神のことバレそうだな……

「そこら辺は追々話すよ。それで勇者部って何をする部活なの？」

「話を変えたわね」

「話を変えましたね」

風さんと東郷ちゃんの二人がそう言うけど、本当に今話すべきことじゃないから、できればみんなに話しても大丈夫かどうか信じられるくらいまでになつたら話すから

「まあいいわ。とりあえず勇者部は人々のためになることを勇んで実施すること。言う

なればボランティアね。学校内だけじゃなく街でも困った人から依頼を受けていく感じよ」

「ボランティア……それとあそこに書かれているのは？」

私は壁にはられた勇者部五箇条に目をやった。なんだか良いことが書かれている。

「あれは勇者部のモットーみたいなものよ」

「モットー……」

一、挨拶はきちんと、一、なるべく諦めない、一、よく寝て、よく食べる、一、悩んだら相談！、一、なせば大抵なんとかなる

「なんだか良いね」

「四葉ちゃんもそう思う？」

「うん」

「それじゃ今日の活動は四葉の入部記念ということで亀屋に行くわよ」

何だかんだでみんなにうどん屋で歓迎パーティーを開いてもらうことになった。今の勇者……ううん、勇者部のみんなは本当にいい子だ。

だからこそ私は彼女たちを守らないと……そう守り神として……

40 勇者任命

あの戦いから一ヶ月が過ぎようとしていた。特にバーテックスの進行もなく、私は勇者部で依頼をこなしていたある日のこと、私は大赦から呼び出された。

一体何の用なのか思いながら用意された部屋で待つっていると、仮面を付けた神官と見知らぬ女の子が部屋に入ってきた。

「おまたせしました。姫野様」

「そんなに待つてないです。所でその子は？」

「こちらは新たに勇者になった三好夏凜様です」

新しい勇者……何でまた

「二ヶ月前の戦闘記録から戦力増強をするべきという案が出ました。そのため、予てより勇者候補の訓練を行った結果、彼女が任命されました」

「よろしく。姫野」

「(いちらい)そ」

握手を交わす私達、神官は私に彼女を勇者部のみんなに紹介しに行くように言われ、一緒に向かうのであった。

「姫野って、あの姫野家よね」

「あのってどのかしら？」

「高嶋、神宮、土居、伊予島、白鳥、藤森の6つの名家に並ぶ家のよ」

「名家って、私はそんなんじゃないよ。私一人だし……」

「あんた一人って……」

うーん、姫野家のことについては詳しく話すと長くなるし、学校まで行くのにはちよ
うどいいかもしれないけど……

「元々姫野家は神宮家に生まれた長女が姫野家に任命されるっていう話があったの」

「神宮家……あいつね。あいつにはかなり痛い目をあわせられたわ」

痛い目って……桔梗は何をやらかしたのかな？少し前に聞いた限りだと訓練に協力
してるって言うけど、それって三好さんたちのことだったんだな

「あく何だかごめんなさい」

「何であんたが謝るのよ」

「えっと……」

私がいいかけた瞬間、端末から警報が鳴り響いた。一ヶ月ぶりの戦いか

「三好さん、突然で悪いけど」

「ええ、分かってる。私の初陣ね!!」

何だか頼もしいな

樹海へ訪れ、早速勇者に変身した私と三好さん。三好さんの戦装束って銀の奴に似てるけど、もしかして……

「ねえ三好さんの勇者システムって……」

「ん？ああ確か前に勇者やってた奴のものを最新鋭にしたものよ。この端末を渡された時に会ったし……」

「なんか言ってた？」

「何かって……まああんたらのこと頼んだって言われたわね」

「そっか……」

全く心配性なんだから……

そうこうしている内に敵の姿が確認できる場所にたどり着いた。ちよつと離れた場所にはみんなもいる。

「早速仕掛けるわよ!!」

「了解!」

三好さんは刀をカプリコーン・バーテックスに投げつけ、私はさらに勾玉で攻撃を加えた。

「ふん、ちよろい!!」

更に何本もの刀をバーテックスを取り囲むように地面に突き刺す。もしかして封印の儀を行うつもり?

「封印開始!!思い知れ!私の力を!」

バーテックスの中から御霊が出てきたが、御霊は煙を吐き出した。もしかして目くらましをして逃げるつもりか?

「そんな目眩まし!気配で見えてんのよ!!」

三好さんは御霊を一刀両断した。

「殲滅!!」

『諸行無常』

何だかすぐに決着が着いちやつた。これが三好さんの実力……

三好さんと私はみんなの近くに降り立つと

「揃いも揃ってぼーとした顔してんのね。こんな連中が神樹様に選ばれた勇者ですつて」

「何でいきなりそんな事言うかな？」

「だって本当のことじゃない」

「もう」

「ねえ、四葉、あんた普通に喋ってるけど、こいつ誰よ？」

「私は三好夏凜。大赦から派遣された正真正銘、正式な勇者。あんたたち用済み。はい、お疲れ様でした」

「三好さん、そんな話、聞いてないけど……」

「うっ……」

ツツコミを入れると段々元の世界に戻ってきた。

元の世界に戻ると私は讚州学校の屋上にいた。三好さんの姿はないか……

「四葉、あの子は誰よ？」

「先輩、彼女は今度新しく勇者になった子です」

「私達が用済みっていうのは……」

「大丈夫よ。東郷ちゃん。私はそんな話は聞いてないから」

「良かった〜」

友奈ちゃんは安心した表情をしていた。さてさて三好さんはみんなと仲良くなれることやら……

『それは大丈夫じゃない？彼女は彼女で楽しくやれそうよ』

守り神様、何でそんな事がわかるのやら？もしかして未来を見れるとか？

『思い出さないか。まあ思い出したら思い出したで困惑するからいいけどね』

4 1 三好夏凜つて子

三好さんとは戦いの後、離れ離れになってしまい、次会うのはいつなのか考えながら、その日眠りにつくのであった。ちなみに桔梗が三好さんにどんな風に痛い目を合わせ

たか聞くと、どうやら剣術勝負で圧倒しまくったとか……一応気をつけるようには言っておいたけど

そして次の日のこと私たちのクラスに一人の転入生が来ていた。それは……

「三好夏凜です。よろしくお願いします」

まさかまさかの次の日にすぐに再会するなんて思ってもみなかった。というか私含めてこのクラス、転入生多くない？

放課後になり三好さんは勇者部部室に来ていた。どうやら色々説明をしてくれるみたいだ。

「そう来たか〜」

「転入生のフリをするのも面倒くさい。でもま、私が来たからもう安心ね。完全勝利よ」

「何故今このタイミングで？ どうして最初からきてくれなかったんですか？」

「私だっですぐに出撃したかったわよ。でも大赦は二重三重に万全を喫しているの。最強の勇者を完成させるためにね！」

「最強の勇者……」

「そう。あなたたち先遣隊の戦闘データを得て、完璧に調整された完成型勇者。それが私。私の勇者システムはバーテックス用に最新の改良を施されてあるわ。その上、あなたたちトーシロとは違って、戦闘のための訓練を長年受けてきている！」

桔梗にボロ負けしたのにといいは言わない方が良いよね。流星に可哀想だし……

「よろしくね。夏凜ちゃん」

「いきなり下の名前!？」

「嫌だった？」

「フン、どうでもいい。名前なんて好きに呼べばいいわ」

三好さんの返事を聞いて、笑顔になる友奈ちゃん。何とか友奈ちゃんのこという所に勝てる人っていないよね。

「それじゃ夏凜ちゃん、ようこそ勇者部へ！」

「部員になるなんて話、一言もしてないわよ！」

「え？違うの？」

「違うわ、私は貴女たちを監視するためにここにきただけよ」

「え、もう来ないの？」

「……また来るわよ。お役目だからね」

三好さんと友奈ちゃんの会話を聞いていると、何だか昔園子ちゃんに聞いたツンデレっていう言葉が思い浮かんだ。なるほど夏凜ちゃんみたいな子をツンデレっていうのか

「じゃあ部員になっちゃった方が話が早いよね」

「確かに」

「まあいいわ、そのほうが貴女たちを監視しやすいでしょうね」

「さつきから監視監視ってあんたねえ、見張ってないとアタシたちがサボるみたいな言い方止めてくれない？」

「それ以外になんて言い方すればいいのよ。貴女たちどうせまともな訓練してないんですよ？ トーシロの癖して大きな顔するんじゃないわよ」

「三好さん、三好さん」

「何よ？」

「三好さんの精霊食べられてるけど、大丈夫？」

三好さんの精霊、義輝が友奈ちゃんの牛鬼に思いつきりかじられていた。何だか可愛いな……

「何してんのよ、このクサレ畜生!!」

『外道め』

「外道じゃないよ牛鬼だよ。ちよつと食いしん坊くんなんだよね」

「自分の精霊のしつけも出来ないなんてやっぱりトローシロね!」

「牛鬼にかじられてしまうから、みんな精霊を出しておけないの」

「それだったらそいつを引つ込めなさいよ!」

「この子勝手に出てきちゃうんだ」

「はあ!? アンタのシステム壊れてんじゃないの!?!」

『ゲドウメ』

「そういえば、この子喋れるんだね」

「ええ、私の能力にふさわしい強力な精霊よ」

三好さんは誇らしげに言う中、友奈ちゃんはあることを告げた。

「あ、でも東郷さんには三匹いるよ?」

さつきまで誇らしげにしていた三好さんだったけど、それを聞いてなんとも言えない

気持ちになつていた。

「そういえば私の精霊は……」

私は自分の精霊を出すと卵に天使の羽根が生えた精霊だった。これって何の妖怪がモチーフなんだろう？

「何だか変わった精霊ね」

「もしかしたらそのうち卵から生まれてくるのかな？」

「それだと東郷の精霊も生まれてきそうね」

それはそれで面白そうだけど……

「うう、わ、私の精霊は一体で最強なのよ。言つてやんなさい」

『諸行無常』

「どうしよう、夏凜さん」

「今度は何よ!？」

「夏凜さん死神のカード」

「勝手に占つて不吉なレッテル貼らないでくれる!？」

何だか一日でもものすごく馴染んでるよ。三好さん……

何だかんだで騒がしい一日だけど、三好さんが入ってくれたおかげで、これから先の戦いも何とかかなりそうだ……

「だけど守り神の役目として、頑張らないとね」

もう前みたいに関係と離れ離れになるのは嫌だ。私はそう決意しながら眠りについた。

これは夢、何故か勇者部に桔梗がいて、今日と同じやり取りをみんなとしている。それに気がついたことが一つ、どうして桔梗の右腕がないの？

場面が急に変わり今度は桔梗では海ちゃんによく似た男の子が今日と同じやり取りをしている。

この夢は……一体……

『もしも守り神としての力では対抗できなくなった時の……』
守り神様は何かを告げていたけど、一体何を……

42 おめでとう

「仕方ないから情報交換と共有よ」

次の日、三好さんが勇者部にやってきた。何だかんだ言って来てくれるなんて……
「分かってる？あんたたちがあんまりにも暢気だから今日も来てあげたのよ」

「ニボシ？」

風さんは三好さんが持つているニボシの袋が気になっていた。普通女の子があんなふうに着干しを食べたりするものだろうか？

「何よ。ビタミン、ミネラル、カルシウム、タウリン、EPA、DHA。ニボシは完全食
よー！」

「……まあいいけど」

「あげないわよ」

「いらないわよ」

「じゃあ私のぼた餅と交換しましょう？」

東郷ちゃんが重箱に入ったぼた餅を取り出した。前にもらったけど結構美味しかった。何というか神がかった出来栄えだった。

「……何それ」

「さつき家庭科の授業で」

「東郷さんはお菓子作りの天才なんだよ」

「い、知らないわよ！とりあえず話を戻すわよ」

とりあえず三好さんはみんなに改めて話を切り出した。

「いい？ バーテックスの出現は、周期的なものだと考えられていたけど、相当に乱れる。これは異常事態よ」

「確かに一定期間おいてから出現するのにもかかわらず、今回は不規則すぎるよね」

「二年前のことを思い出すと、一定の周期があったりしたけど、戦いが激化していったらその周期が乱れた。それってつまり敵が焦ってきているということなのかな？」

「それに帳尻を合わせるため、今後は相当な混戦が予想されるわ」

「確かに、一か月前も複数体出現したりしましたしね」

「私ならどんな事態にも対処できるけど、あなたたちは気を付けなさい。命を落とすわよ！ 他に戦闘経験値を溜めることで勇者はレベルが上がり、より強くなる。それを

『満開』と呼んでいるわ」

「そうだったんだー」

「アプリの説明にも書いてあるよ」

「そうなんだ!」

『満開』を繰り返すことでより強力になる。これが大赦の勇者システム」

「へー。すごい」

感心する友奈ちゃん。でも満開は……

「三好さんは『満開』経験済み何ですか?」

「……私は、まだ」

「満開は……」

私は満開について言おうとした瞬間、何故か言うべきではないと思った。強力すぎる力にはそれなりの代償がある。だけど強力だからこそ使わないといけなくなることであった。それだったら今止める必要はない。

「四葉ちゃん?」

友奈ちゃんが心配そうにしていた。私はすぐに笑顔で答えた。

「ううん、なんでもないよ」

「四葉ちゃん……『なせば大抵なんとかなる!』」

突然友奈ちゃんが大声で勇者部五箇条を述べた。

「大丈夫だよ。みんなで力を合わせて頑張れば、大抵何とかなるよ!」

みんなで力を合わせればか……確かにそのとおりかもしれない。いい言葉だね。

「『なるべく』とか『なんとか』とか、あんたたちらしい見通しの甘いふわっとしたスローガンね。全くもう、私の中で諦めがついたわ」

「私らは、その……あれだ。現場主義なのよ！」

日曜日、私達は密かに三好さんの誕生日を祝おうという話になり、幼稚園のボランテニアを利用して誕生会を開く準備ができていたのだけど、何故か三好さんは来なかった。

「全く、あの子は何やってるのよ。準備万端だつて言うのに……」

「何かあったのかな？」

「もしかしたら病気で倒れていたり……」

「そんな……」

「風さん、様子見にいきませんか？」

「そうね……帰りにでも寄ってみようかしら」

私達はボランティアの後、入部届に書いてあった住所を頼りに三好さんの家まで来ていた。

風さんは何度もチャイムを鳴らしていると木刀を持った三好さんが出てきた。

「誰よ!!…あれ? あんた達」

「あ、あんたね、何度も電話したのに、なんで電源オフにしてるのよ!」

「そ、そんなことより何」

「何じゃないわよ。心配になって見に来たの」

「心配? あ……」

「良かったら寝込んだりしたんじや無かったんだね。」

「え、ええ。」

「んじや、上がらせてもらうわよ」

風さんは何も言わず部屋に上がり込んだ。流石に了承を得てからにしましょうよ。

「あ! ちよつと! 何勝手に上がってるのよ! 意味わかんない!!」

私達もつられて上がり込んだ。三好さんの部屋は何とこうものかこうものがあんまりなかった。

「はあ…殺風景な部屋。」

「どうだつていいでしょ!」

「まあ、いいわ。ほら、座つて座つて。」

風さん、それ三好さんのセリフだからね

「これすごーい!プロのスポーツ選手みたい。」

「勝手に触らないでよ」

樹ちゃんはトレーニングマシンを触る。

「うわー、水しかない。」

「勝手に開けないで!!」

友奈ちゃんは友奈ちゃんで冷蔵庫を勝手に開けてるし、東郷ちゃんはそれを見てニコしてるけど……止めたほうがいいんじゃないのかな?

「三好さん、諦めて」

「あんたね……」

気がつくともテーブルの上にたくさんのお菓子とかが並べられていた。そういえば本来の目的忘れてたよ。

「ね、やっぱり買ってきて良かったでしょ。」

「なんなのよ。いきなり来て何なのよ!!」

「あのね、ハッピーバースデー、夏凜ちゃん。」

白い箱を取り出してその箱を開ける友奈ちゃん、箱の中にはバースデーケーキがあった。

「え？」

驚いたまま固まる三好さん、うん、やってよかったかもしれないな。

「夏凜ちゃん、お誕生日おめでとう」

「おめでとう」

「え？どうして？」

「あんた今日、誕生日でしょ。ちゃんところに書いてあるじゃない。」

風さんは入部届を見せながらそういった。

「友奈ちゃんが見つけたんだよね」

「えへへ」

「あつて思っちゃった。だったら誕生日会しないとって。」

「歓迎会も一緒に出来るねくて。」

「うん。」

「本当は、子供達と一緒に児童館でやろうと思ってたの。」

「当日に驚かせようと思って黙ってたんだけど…」

「でも、当のあんたが来ないんだもの。焦るじゃない。」

「家に向かえに行こうと思たんだけど子供達も激しく盛り上っちゃって。」

「結局この時間まで解放されなかったのよ。ごめんね。」

三好さんは何故か固まっていた。もしかしてこういうの嫌いだったりのかな

「夏凜ちゃん？」

「あれー？ひよつとして自分の誕生日も忘れてた？」

「アホ…馬鹿…ボケ…おたんこなす…」

「え？」

「何よそれ！」

「誕生日なんてやったこと無いから…なんて言ったらいいかわかんないのよ…」

「お誕生日おめでとう、夏凜ちゃん。」

それからみんなで誕生日会を盛大に盛り上げるのであった。私はちよつと疲れ、外の空

気を吸っていた。

「やっぱりこういうのいいなくあのとときもやっておけばよかったかも……」

二年前のことを思い出しながらそう呟いた瞬間、何故か涙が溢れてきた。駄目だ。お

めでたい時に泣いたりしたら……

「……四葉さん？どうかしたんですか？」

ふいに声をかけられ、振り向くと樹ちゃんが心配そうにしていた。見られなくなかつ

たな……

「ううん、ちよつと思ひ出しちゃつて」

「思ひ出してつて、何か悲しいことをですか？」

「そんなところだよ。こんな風に誕生会とかやつたことがないから……私も……だからかな？あの時もこんな風にやつておけばよかつたつて思つてね」

「四葉さん……あの、だつたら、これからたくさんやつていきましょう」

「これから……？」

「はい、これから先みんなで……」

「気弱そうに見えてすごいことを言うな……そうだね。これから先みんなでこんな風
に楽しい事が出来るように……」

「そうだね。楽しみにしてるからね」

「はい」

43 四葉の歌

ある日のこと、勇者部部室でみんなと集まっていると何故か樹ちゃんが暗い顔をしていた。

「はあ〜」

「どうしたの？ 溜め息なんてついて」

心配そうに風さんがそう聞くと、樹ちゃんが落ち込んだ声で答えた。

「うん。あのね、もうすぐ音楽の歌のテストで上手く歌えるか占つてただけど……死神の正位置。意味は破滅、終局」

「な、何ていうか不吉だね」

「気にすること無いでしょ」

「そうだよ。こういうのつてもう一度占つたら全く別の結果が出るもんだよ」

私たちがそう言うと、樹ちゃんは三回占うと三回とも死神のカードが出た。これは不吉すぎないかな？

「だ、だいじょーぶ。フォーカードだからこれはいい役だよ」

「死神のフォーカード」

「ああ、いや悪い意味じゃなくて」

「これはもうどうにかしれないと思っただのか、風さんは今日の議題として樹ちゃんの歌の特訓をすることになった。」

「アタシたち勇者部は、困ってる人を助ける。もちろん、それは部員だって同じよ」

「歌が上手くなる方法か」

「まず、歌声でα波を出せるようになれば勝ったも同然ね」

「α波……」

「いい音楽や歌というものは、大抵α波で説明がつくの」

「そうなんですか!?!」

「んな訳無いでしょ」

「樹一人で歌うと上手いんだけどね。人前で歌うのは緊張するっただけじゃないかな?」

「そっか。それなら、習うより慣れろだね」

ということでも友奈ちゃんの提案でカラオケに来ることになった私達、これは特訓だから遊びというわけじゃない。そう、決して遊んでるわけじゃないよね。

「イエー——イー！ 聴いてくれてアリガト!!」

うん、完璧に遊んでるようにしか思えないよ。

風さん、友奈ちゃんと三好さんのデュエットが終わり、次は樹ちゃんの番になったのだが、どうにも緊張していてもうまく歌えない感じだった。

「やっぱり堅いかな」

「誰かに見られてると思ったらそれだけで……」

「まあ今はただのカラオケなんだし、上手かろうと下手だろうと好きな歌を好きに歌えばいいのよ。はい、次、四葉」

「私?」

私もこういう場所で歌うのは苦手なんだけどな……とりあえず気にせず歌ってみよう。

「♪~~~~♪~~~~」

歌い終わると何故かみんな静まり返っていた。もしかして下手だったかな？眠っていた間歌うことがなかったし……

「す、すごいよ！四葉ちゃん！」

「まさかこんな所に逸材がいるなんてね……」

「何だかプロみたいだったわ」

「ま、まあいい声だったんじゃない」

だから東郷ちゃん、プロみたいって二年前と同じことを言ってるけど、それにしても
思いついてはくれないか。

すると樹ちゃんが私の目の前に立ち、

「あ、あの私に歌を教えて下さい」

「え、ええ……」

それって弟子入りってことなの？ どうしよう……

とりあえず樹ちゃんに歌を教えるのを引き受け、今日は何故か風さんの家に泊まるこ
とになった。

「悪いわね、泊まりに来てもらって、着替えとか樹の借りてね」

「は、はい」

樹ちゃんの着替えて、いや、確かに体つきとか似てるけど……何だか悲しくなってきたんだけど……

『ま、まあ、これから成長期ですから』

守り神様にも慰められた。

「それで夜通し樹ちゃんにレッズンをするってわけじゃないですよ。風さん、カラオケの最中、大赦から何か連絡でもありました？」

「……あんたも夏凜も鋭いわね。大赦から次の進行ではかなりの乱戦が予想されるって……」

「風さんはみんなを死なせたくないんですか？」

「そりや当たり前でしょ。みんなのリーダーだし、それにっらい思いだけはさせたくないから……」

っらい思いか……そうだよ。私もこんな気持で戦っていたことが有る。

「それと四葉、大赦に聞いたけどあんたの守り神の力って何？」

「……それは」

私がいいかけた瞬間、お風呂場から歌声が聞こえてきた。この歌……

「私、教えることないんじゃない？」

「まあ、樹がどうしてもって頼んでるからね……」

「それはそうですけど……」

いい声だからこそ、後は緊張しないようにか……

樹SIDE

小学生の頃、知らない大人たちが家にやってきたことがあった。私はお姉ちゃんの背中に隠れているだけで、後でお姉ちゃんがお父さんとお母さんが死んだことを教えてくれた。

それからはお姉ちゃんは私のお姉ちゃん、お母さんでもあつて……ずっとお姉ちゃんの間で安心できる場所だった。

でも、私一人ではお姉ちゃんを支えることは出来なかった。

目を覚まし、お姉ちゃんが用意してくれた朝食を食べようとした時だった。「ちよつと動かないで」

私の寝癪を直してくれた。寝癪を直し終わるとお姉ちゃんは笑顔で……

「よし、今日も可愛いぞうありや？元氣ないね、どうした？」

「あのね……あのね、お姉ちゃん。ありがとう……」

「何、急に？」

「何となく言いたくなつたの。この家の事とか、勇者部のこととか、お姉ちゃんにばかり大変なことさせて……」

「そんな、私なりに理由があるからね」

「理由って？」

「まあ簡単に言えば、世界の平和を守るためかな？だって、勇者だしね」
「でも……」

「何だつていいよ。どんな理由でも、それを頑張れるならさ」

「どんな……理由でも？」

理由って……私にとって理由ってなんだろうか？

4 4 樹の歌

四葉SIDE

樹ちゃんに呼び出された私。一体何の話かと思うと…………

「頑張れる理由か…………」

「はい、私はみんなみたいに世界のためとか平和のためについて思っても頑張れている自信がないんです」

「そっか…………多分だけど樹ちゃんはまだ気がつけてないだけだよ」

「気がつけてない？」

「今は焦ることじゃないと思う。樹ちゃんならいつか気づけるよ」

「…………そうでしょうか？」

「そうよ」

だって、理由なんて誰にだっていつかわかる時が来る。それは誰かに教えてもらえることじゃない。自分で知ろうとしないよね

「あの、四葉さんはどんな理由で…………」

「私？私は…………みんなのためにな」

私はみんなのために、世界のために、守り神としてすべてを守るために頑張っている。

樹SIDE

勇者部の依頼で子猫を預けてくれている家に私とお姉ちゃんが来ていた。

「すいませーん。讃州中勇者部です。仔猫を引き取りに来ました」

インターホンを鳴らすと家の中から女の子の声が聞こえた。

「やだ、ぜつたいやだ。この子をあげるなんてわたしが飼うからあ」

「……でもね、家では飼えないのよ」

「もしかして子猫連れて行くのいやだったのかな?」

「あちゃーもつとちゃんと確認しとけばよかった」

「どうしよう」

「大丈夫。お姉ちゃんが何とかするわ」

お姉ちゃんはやんは家に上がり込み、あの子の母親に説得をした。やっぱり私はお姉ちゃんのことを後ろからしか見つめることしか出来なかった。

帰り道、何とか説得に成功したことに対して喜んだ私。だけどお姉ちゃんの表情は暗かった。

「ごめんね、樹」

「何で謝るの？」

「樹を勇者なんて大変な事に巻き込んだから」

お姉ちゃん、ずっとそんな事を思っていたの？

「さっきの家の子。お母さんに泣いて反対してたでしょ？それで思ったんだ。樹を勇者部に入れろって大赦に命令された時、私やめてっていえばよかった。さっきの子みたいに、泣いてでも、もしかしたら、樹は勇者にだってならず普通に」

「何言ってるのお姉ちゃん！……お姉ちゃんは、間違ってるよ」

「でも……」

「それに私ね。嬉しいんだ。守られるだけじゃなくて、お姉ちゃんとみんなと一緒に戦えることが」

「ありがとう」

「どういたしまして」

私達は互いに笑顔になった。

そしてテスト本番、あんなに練習したのに、やっぱり緊張してしまう。そんな時、教科書から一枚の紙が落ちた。私は慌てて拾い上げると……

『テストが終わったら打ち上げでケーキ食べに行こう・友奈』

『周りの人はみんなカボチャ・東郷』

『気合いよ』

『自分の歌声に自身を持って・四葉』

『周りの目なんて気にしない！ お姉ちゃんは樹の歌が上手だって知ってるから・風』
みんなからのメッセージを見て、私の緊張は和らいだ。そうだ、そうだよね。私は一人じゃない。みんながいるんだから、勇者だって、この歌だって

放課後になり私はみんなに合格できたことを伝えた。そしてその帰り道、お姉ちゃん

にあることを伝えた。

「あのね……私、夢ができたんだ」

「夢？どんなの？聞かせて」

「えつと……まだ内緒」

「ええ〜」

だってまだ本当に夢と呼べるものかわからない。だけどきつといつか、お姉ちゃんに伝えるからね。私が頑張れる理由を……

四葉SIDE

「樹ちゃんのテストが受かってよかったな〜」

私は一人、帰り道を歩いていると突然電話がかかってきた。電話の相手は非通知でわからないけど、試しに出てみると……

『四葉……』

「その声……もしかして……」

聞き覚えが有る。この声は私の大好きな親友の……

『よく聞くんだ。今のままじゃだめなんだ』

「だめって……何が？」

『桔梗や他の人達が頑張って姫野家の文献を探ってわかったんだ。お前は今のままじゃ……』

通話が突然切れ、気がつくと私は樹海に来ていた。

「……帰ったら話を聞くね。銀ちゃん」

私は勇者に変身して、みんなのところに向かうのであった。

45 決意

樹海へと訪れ、端末を見ると残りのバーテックスが攻めてきていた。

「あの時と似た状況か……」

あの時、園子ちゃんと須美ちゃんは二人で数体のバーテックスと戦い、私もまた力の限り復活してきたバーテックスを倒した。

これで繰り返される戦いが終わるかどうかわからないけど、今、勇者部みんなの戦いはこれで終わるはずだ。

「残り七体。全部来てるんじゃないの？ これ」

私達は一斉に変身し、敵を見つめていた。

「敵ながら圧巻ですね」

「逆に言うとき、こいつら殲滅すればもう戦いは終わったようなもんでしょ」

「殲滅ね！」

「皆、ここは、あれいつときましょ」

「あれ？」

「あれって？」

私と三好さん以外のみんなが円陣を組んでいた。何だかこういうのは悪くないかもしれない。

「え、円陣？それ必要？」

「決戦には気合いが必要なんでしょ？」

「夏凜ちゃん！」

「たく、しょうがないわね」

「あんた達、勝つたら好きなもの奢って上げるから、絶対死ぬんじゃないわよ！」

「よーし、美味しいものいっぱい食べよう！肉ぶっかけうどんとか！」

「言われなくても殲滅してやるわ！」

「わ、私も叶えたい夢があるから」

「頑張つて皆を、国を守りましょ」

「よーし！勇者部ファイト!!」

掛け声とともに、みんな互いの持ち場につくとまず接近してきたのはアリエス・バーテックスだった。三好さんと東郷ちゃんの二人が一撃ずつ攻撃を与えるが、動きが止まる様子はなかった。

私は剣を取り出し、二人が攻撃した箇所をもう一度攻撃させた瞬間、風さんたちが封印を開始し、御霊が出現した。

友奈ちゃんと東郷ちゃんの二人が協力して御霊を破壊すると今度はタウロスバーテックスが攻めてきて、頭上の鐘を鳴らした瞬間、耳障りな音が響いて私達の動きを止めた。

「音はみんなを幸せにするもの。こんな音……こんな音！」

樹ちゃんが糸で頭上の鐘を縛り上げ、私は勾玉で鐘を貫いてなんとか音波攻撃を乗り越えるが、どうにも敵の動きがおかしい。

「風さん、敵の動きが……」

「わかっている。というか見えている」

見えてる？ 私は風さんが見つめていた場所を見るとレオバーテックスと残りのバーテックスが合体していく。

「二年前はこんなのがなかった。ううん、見せようとしなかったのかな？ それだったら……」

私は勾玉で合体バーテックスを縛り上げようとするが、合体バーテックスから無数の炎の玉が放たれ、私達を吹き飛ばした。

「うくつ……このままだと……」

風さんが立ち上がり、再度攻撃を仕掛けようとするがバーテックスから放たれた水の玉に閉じ込められた。

「……風さん、みんな……」

銀ちゃんが何を言おうとしたのかわからないけど、このままみんなを見殺しにする訳にはいかない。

「お願い……みんなを助けて……満開!!」

私がそう叫んだ瞬間、まばゆい光に包まれ、神秘的な衣装と錆びついた剣が握られ、私は錆びついた剣を振った瞬間、風さんを閉じ込めた水球を破壊した。

「けほっ、けほっ、四葉!?!あんた……」

「あのバーテックスは私が押さえ込みます。ううん、他のもすべて……」

私は合体していないピスケスバーテックスとジェニミバーテックスに向かって剣を振り、二体のバーテックスを撃退した。

『だめです。このままだと四葉……聞いて……』

「大丈夫。まだ大丈夫」

私は自分にそう言い聞かせながら、合体バーテックスが放ってきた巨大な炎の玉を受け止めた。

「みんな、今のうちに……」

「四葉……あなたの頑張りを無駄にしないわ……みんな、封印を開始!!」

風さんの掛け声とともに、みんなが封印を開始した瞬間、合体バーテックスの御霊が

園子SIDE

大赦のある部屋で私は勇者たちの報告を聞いていた。

「多数のバーテックス撃退確認しました」

「撃退……違うよね。今の戦いが終わったただけだよ」

「園子様、そうは言いますが……」

「誰か満開を使ったの？」

「……はい、姫野四葉様が……」

それを聞いた瞬間、私は後悔した。ミノさん、間に合わなかったんだ……

「彼女は どうしてるの？」

「……限界まで力を使ったせいなのか……左目、味覚、声帯、左耳の機能を失っていません」

「四回も使ったの？」

「いいえ、犬吠埼風様からの報告では、彼女は一回しか……」

「やっぱり神の力を無理矢理引き出したんだね……」

私は首につけているネットワークスを見つめた。このまま誰かが真実に気がつけば……

いつか今以上なことは起きる。そのためにはこれを渡さないと……

4 6 残された時間と2本の刀

あの決戦から数日がたった。勇者部のみんなは特に怪我もなく良かったのかもしれない。

だけど私は満開の後遺症で左目、味覚、声帯、左耳の機能を失っていた。

「全く、無茶すぎよ」

『ごめんなさい』

話すのに不便がないように私はスケッチブックを使って会話していた。

「でも良かったね。すぐに退院できるんだよね」

『友奈ちゃん、ごめんね。もう少し検査入院が続くみたいなの』

「そっか……でも毎日お見舞いに来るね」

『ありがとう』

私はスケッチブックに書いた言葉と同時に笑顔を向けるのであった。

「四葉さん、部室で待ってますから」

「まあ気長に待ってるわ」

樹ちゃんと三好ちゃんの二人がそう言って、みんなが病室から出ていくのであった。

その日の夜、ベッドで本を読んでいると病室のドアをノックする音が聞こえた。もう面会時間が過ぎてるのに誰が来たんだろう？

「お邪魔します」

訪ねてきたのは東郷ちゃんだった。こんな時間に一人で病院に来るのは大変じゃないのかな？

『どうかしたの？』

「……四葉さん、聞きたいことがあるの」

私は首を傾げると、東郷ちゃんは私のことをじつと見つめ、あることを告げた。

「満開の後遺症……でいいんだよね。それは……」

みんなには戦いの疲労でこうなってしまったと伝えたのに……彼女は気がついていてた。

私は頷くと東郷ちゃんは悲しそうな顔をしていた。

「あなたはそうなるかと知っていて、満開を使ったということなの？」

『そうだよ。私は全てを聞かされていて、知った上で満開を使った』

「やっぱり……」

『東郷ちゃんはよく気がついたね。このことを……』

「体の機能を失ったことについて分かっているはずなのに、貴方は辛そうにも悲しそうにもしていない。ただ私達が満開をしなかったことに関して、安心した顔をしていたことが気になっただけよ」

私つて、顔に出やすいのかな？もう少し隠すようにしないといけないよね

『聞きたいことはそれだけ？』

「もう一つ……それは治るの？」

『今は大赦が調べてる』

「そう……」

『東郷ちゃん、もし私のことで悩むようなら気にしなくていいよ。私が望んだことだから』

「望んだこと……」

私は東郷ちゃんに笑顔を向け、東郷ちゃんは病室から出ていくのであった。

そう、これは私が望んだこと……みんなを守るために……

『四葉……それはいけないことです』

守り神様……どうして？

『そのみんなには……いいえ、これは貴方が自分で気づくこと……』

守り神様はそう言い残して行くのであった。

夏休みに入り、私は未だに入院をしていた。こうまで長引くのがどうしてなのか大赦に確認するが、未だに返事が返ってこない。何か隠しているのかな？

病院生活は退屈だけど、友奈ちゃんが毎日のようにお見舞いに来てくれた。でも今日はまだ来ないけど、部活で忙しいのかな？ 私はこの間勇者部のみんなが海に行ったときに送られてきた写真を見ていた。

そんな時、病室に見覚えのある巫女服の少女と私と同じくらいの身長の大赦の幹部が訪ねてきた。

「お久しぶりです。四葉さん」

『上里ちゃん、それにあなたは?』

「私は上里様のお付きです」

仮面越しだから声が聞き取りづらかったけど、どうにも聞き覚えのある声だった。

『何か用事?』

「お伝えしなければいけないことがあります」

『伝えたいこと?』

「遠まわしに言うのは私は嫌いなので、はつきり告げると……大赦と病院側で貴方の現状を調べた結果……もう貴方は長くはありません」

『そっか』

なんとなく理解していた。神様の力は強大だけどそれなりのリスクがあると薄々感じていた。だからこそ今もこうして入院しているんだ。

「勇者として戦う分には良かったことだったけど、おま……貴方は満開を使用した結果、体にかかる負担が想定していたものより大きく……その結果が」

『私はどれくらい生きれるのかな?』

「それは……わかりません。ですが短くても半年……長くても中学校を卒業できるかどうか……」

『そっか、十分生きたほうかな?』

私はそう微笑んだ瞬間、大赦幹部が私の胸ぐらをつかんできた。

「お前……どうしてそんなに諦められるんだよ!!死ぬんだぞ!!怖くないのかよ……」

「……………」

「やめてください。貴方を連れてきたのは喧嘩するためじゃないですよ……」

上里ちゃんがそう告げ、大赦幹部は私の胸ぐらを離れた。諦めているか……怖くないか……

『怖いよ。あきらめたくないよ。けどもうどうにもできないと思ってる。だから……………』

「四葉さん、貴方が生き残れる方法が2つあります」

『2つ?』

「一つは守り神ヒメノ様が扱ったと言われる神器……今の貴方は剣と勾玉を持っていきますね。残った一つ、鏡を手に入れば……あなた自身の体の負担もへり、減ってしまった生命力も元に戻ります」

『鏡はどこにあるの?大赦が一生懸命探してるんだよね』

「はい、でも、手がかりとしてはヒメノ様……貴方のご先祖様が大切な親友に渡したという情報が……」

『大切な親友』

それって誰のことだろう？ヒメノ様に聞いて見る価値はあるかもしれない。そして残ったもう一つの方法は？

「そしてもう一つは……この2本の刀です」

上里ちゃんは2本の刀……一つは水色と白の短刀、一つは真つ赤な刀。これは……

「大赦が密かに作った対天の神の武器です。これが完成すれば、失った生命力を元に戻すだけではなく、3つの神器を手にしなくても、貴方は守り神としての力を扱えるようになります」

『完成……それはまだ未完成なんだね』

「はい、見た目は完成していますが、神に匹敵する力を宿すことができていません」

望みはあるけど、期待しないほうがいいかな？

『できるだけ頑張ってください。それと私の寿命については彼女たちには秘密に……』
「わかりました」

病室の外

「……そんな……四葉ちゃんが……」

「こんなことって……」

友奈と東郷の二人が四葉たちの話を聞いていたのだった。

姫野四葉の章

4 7 先代からの願い

友奈SIDE

私と東郷さんは病室で聞いた四葉ちゃんの残された時間のことを部室で風先輩たちに話した。

「そんな……」

「どういうことよ……あいつが死ぬって……」

「もしかしてこの間の戦いで満開をして……」

「私達が聞いた話では、四葉ちゃんは勇者とは違う特殊な力を持っていて、その特殊な力を無理やり引き出した結果……」

みんなが暗い顔をする中、私はあの時間こえてきた四葉ちゃんを救う方法を話すことにした。

「実は助かる方法があるの。それはその守り神様の力を安定させる3つの神器があつて……四葉ちゃんはその3つの内、2つは持っているの」

「残り一つは、四葉ちゃんのご先祖様の親友に預けているらしいです」

「それなら……四葉さんを助けられるんですね」

「ちよつと待ちなさい。その先祖とかどうとかって話つて下手すれば大昔も前の話じゃない」

「下手すれば無くなっている可能性があるわね」

「助ける方法はあつたけど、3つ目の神器はどこにあるのかわからない。私達はどうすれば……」

『みんな……来て』

突然誰かの声が聞こえた瞬間、私達はまばゆい光に包まれた。

ヒメノSIDE

あの子が悲しみに包まれている中、私は一人ある世界を見つめていた。これはちよつと先の未来……境界の勇者と女神の勇者が手を取り合い、呪いに苦しんだ彼女を救うために戦った世界……

私は彼の心の中で優しく微笑んでいた

「ここは……」

「お疲れ様」

「何だか大変なことになったみたいだね」

「ええ、貴方の方は？」

「私の方は……というより未来を託した子孫は頑張っているよ。彼女の場合は今回みに他の世界の勇者たちと一緒にいることは出来ないけど……」

「でも信じているから……きつと彼女なら大丈夫って」

「……」

「これから先は大変だけど、私は見守っているから……」

「ええ、がんばりますよ。 姫野」

彼らがいればこんな悲しい運命ならずに済んだのかな？

???
SIDE

あのときの光景を思い出した僕。何であいつは笑顔なのに悲しそうにしてたんだよ。

「……………全く先輩の卒業式のときの恩を返しておくべきだよな。天の神いるよな」

「全く急に呼び出して、迷惑だと思わないのかな？」

「お前……大体急に來たりして迷惑かけてるよな」

「あはは、何のことかな？こっちでは迷惑をかけてはいないよ。言うなれば彼の世界ではだけど……」

「またいじめてたのかよ……」

「それでそんな話をするために私を呼んだんじゃないよね」

「……あの時の戦いで消えた天神刀と祝水神刀はどこにあるんだ？」

「……もう必要ないのに何に使うつもり？」

「恩返しのために……」

「そう……それだったら今はある世界に新たに作り直されてるけど、あの2つは女神や神の力がなければ完全な形に作り直されることはないわ」

「そのために必要なことは……」

「それは簡単。願ってあげなさい」

「……わかった」

友奈SIDE

気がつくくと私達は大橋の近くに来ていた。そして私達の目の前にはベッドに横たわる一人の少女がいた。

「会いたかったよ。わっしー」

少女は東郷さんを見てわっしーと呼んでいた。東郷さんは戸惑いながら、

「私は東郷美森です」

「……美森ちゃんか。いい名前だね。初めまして友奈ちゃん、樹ちゃん、風ちゃん、夏凜ちゃん。ひめちゃんを助けたいんだよね」

彼女は四葉ちゃんのことを知ってるの？もしかして……

「あんた、もしかして四葉と一緒に戦った先代の……」

「うん、私は乃木園子。ひめちゃんとは親友で……あなた達と同じ彼女を救いたいって思ってる一人だよ」

「乃木って……ううん、今は関係ないわ。救う方法を知ってるの？そのために私達をここに呼んだのよね」

「救う方法はあなた達が知っていることと同じ……だけど救う鍵は私が持っている」

私は園子ちゃんの首にかけているペンダントに気がついた。あれってもしかして

……

「美森ちゃん、これを受け取って」

「は、はい」

東郷さんはペンダントを彼女から取った。そのペンダントには小さな鏡がついていた。

「3つ目の神器……全てが揃った今……あの子を救って……」

園子ちゃんが優しく微笑んだ瞬間、私達の端末からアラームが鳴り響いた。

「これは……」

四葉SIDE

(……この感じ、バーテックス!?)

『四葉、天の神が動き出しました。守り神である貴方が弱った今を狙って人類を滅ぼすために……』

(そっか……それだったら)

私はゆつくりと手を握り、開くといつの間にか回収された端末が握られていた。

(もう寿命がないからかな。神の身に近づいてるからこんな事ができるようになったんだね)

『四葉……』

(これが最後の戦いだね。人類のために……勇者のみんなのために……守り神として頑張るよ)

私は勇者に変身し、樹海へと向かうのであった。

48 絆

樹海へ訪れた私。眼の前には今まで倒してきたバーテックスと初めて見るバーテックスがいた。

(あれは……)

『そんな……どうしてやつがここに……』

守り神様はあのバーテックスのことを知っているみたいだ。一体やつは……

『気をつけてください。あれはレクイエム・バーテックス!!ある世界では造反神が作り出したバーテックスです。強さは……』

(よく分からないけど、かなり強いんだよね。それだったら……)

私は剣を抜き、思いつきり降った瞬間、何体かのバーテックスを切り裂いた。今のこの状態なら何とか……

『待って!?奴らの動きが……』

気がつくくと切り裂いたバーテックスが直ぐ様再生し、無数の矢が降り注いできた。私は勾玉を盾に変え、矢を防いでいった。

(威力が強すぎる!?)

不意にあたりが暗くなり、後ろを振り向くと巨大な尻尾がこっちに向かって落ちてくる。

防御しようとするが間に合わず、私は巨大な尻尾の一撃を喰らってしまい、そのまま地面に叩きつけられた。

(うくつ……神の力を前に出しすぎて……精霊の防御が発動しない……このままだと死んじやいそうだな……)

痛く、苦しく、どうすることもできない。ただどこそのまま死ぬ訳にはいかない。だつて……みんなを守らないといけないから……

レオ・バーテックスが炎に包まれ、レクイエム・バーテックスの前には巨大な光の玉が出現していた。

私は立ち上がり、勾玉を構えた。

(声が出なくてよかった。悲鳴をあげることもできないから……ちよと残念なのは……気合を入れられないことだよね)

レオバーテックス自身の巨大な炎の玉とレクイエムバーテックスのレーザーが私に向かつてくる。私は勾玉を大きく広げて防ごうとする。

(みんな……守るんだ!!)

「勇者。アアアアアアアアアアアンチ!!」

攻撃が迫ってきた直前、どこからともなく聞こえてきた声とともに、レオバーテックスを吹き飛ばし、レイクエムのレーザーを喰らわせた。

そして私の前にはみんなが立っていた。

「ごめん。遅くなつて」

「一人で背負い込んだりするからだよ」

「全くみんなを守るのはいいけど」

「もつと一番大切にしないといけないことがあります」

「あんた自身も守ることを忘れるんじゃないわよ」

どうしてみんながここに……もう戦ってほしくないのに……

「四葉ちゃん。自分のことが守れないなら……これからは私達が四葉ちゃんを守る」

友奈ちゃん……

「さあて、勇者部!!行くわよ!!」

「「「オオオ———!!」」」

園子SIDE

「これでよかったんだよね。ミノさん」

「ああ、あいつらならきつと四葉を助けてくれるさ」

私とミノさんはただ帰りを待つことしかできない。でも信じることはできる。みんなが無事に戻ってくるって……

「あいつに渡したんだよな。お前の大切にしていたペンダント」

「うん、必要になるから……」

「それで何とかなるのか？」

「……わからない。神託ではこれまで以上に勇者たちは苦戦するって……」

「そっか……」

ミノさんは悔しそうにしていた。私も悔しいよ。一緒にみんなと戦えたら……

「園子さん、銀さん」

不意に声が聞こえると私達の前に2本の刀を持ったかいちゃんがあった。

「渡さなかつたの？」

「断られました。生き残ることよりすべてを終わらせたいと……」

「あいつ馬鹿だよ……本当に馬鹿だよ」

私達がどうすることもできない中、突然まばゆい光が私達の前に現れた。

『届けてやるよ。それを』

この声……どこかで聞き覚えがある。まばゆい光はかいちゃんから2本の刀を受け取り、どこかへと消えていった。

「今のは……」

四葉SIDE

みんなでバーテックスを倒していくが、すぐに再生していき体力が減る一方だ
「キリがないわね」

「夏凜!? 諦めんじやないわよ」

「そうです。なんてたって」

「勇者部五箇条!! 一つなるべく諦めない」

みんなが必死に戦う中、東郷ちゃんが私の前に来た。

「四葉ちゃん、これを……」

それは鏡がついたペンダント……もしかしてこれは……

「乃木園子が貴方に……」

(園子ちゃんが……)

「私ね。あの子とは初めて会った気がしないの。それに彼女が話してくれた満開の後遺症について……もしかして私の記憶がないのは……」

(東郷ちゃん……あなたも思っているとおりにだよ。だけどね。絶望しないで………思い出せなくても私達は貴方の大親友だって)

端末で打ち込んだ文字を見せると東郷ちゃんは泣きそうにしながらも笑顔で頷いた。

「……うん」

私はペンダントを受け取り、3つの神器を握りしめた。

(お願い……みんなを守る力を貸してください)

みんなは私が守る。みんなが私を守ってくれる。だからこそ……今を終わらせるた

めに……守り神の力を私に……

『四葉……もう大丈夫ですよ』

守り神様の声が聞こえた瞬間、私と東郷ちゃんの前にまばゆい光が包み込み、光が消えた瞬間、私の目の前に守り神様が顕現していた。

「守り神様……あれ!? 声が……」

『貴方の後遺症は治しました。さあ終わらせましょう』

49 守護の勇者

私と東郷ちゃんの前に、私に似た少女が立っていた。そっか、彼女は……それに私はある世界で戦ったことがある。

『こうして貴方と会うのはあの世界以来ですね。四葉』

「はい……守り神様」

『東郷美森……彼女の親友でいてください』

「は、はい……」

『私はこの戦いを終わらせませす』

守り神様はそう言って、大型バーテックスへと向かっていった。私と東郷ちゃんも行くこうとするけど、何故か私は勇者の姿から元の姿に戻されていた。

「そんな……」

守り神様は私もう戦わないように勇者の力も全て持っていたの

「どうすれば……私もまだ一緒に戦いたい……」

「四葉ちゃん……」

ヒメノSIDE

再生を繰り返すバーテックス。ここまで厄介なの久しぶりな気がする

『本気で戦うのは若葉ちゃんたちを助けた時以来かな……』

私は3つの神器を一つにし、一本の白く輝く刀に変えた

『神刀!! 姫葉刀!!』

姫葉刀を構え、私は何体ものバーテックスを一気に切り裂いていく。切り裂いた瞬間、バーテックスは再生しようとするがその前に光になって消えていった。

『無理だよ。今の私は天の神と神樹の上の力を持つてる。もしも女神とか邪神がいたらそれと同等くらいかな』

姫葉刀の刀身が白い光の玉に変わり、レクイエムバーテックス以外の大型を全て消し去った。そして私は戦っている勇者たちの周りに障壁を張った。

「ちよつと、これ……」

「あの人がやったの？」

「あれが大赦に伝わる守り神なの……」

「もしかして一人で終わらせようと……」

勇者部のみんな……あとは私に任せて……

私はレクイエムバーテックスを見つめた。レクイエムバーテックスは何度もレーザーを放ってきた。

『終わらせる……』

四葉SIDE

守り神様が一人で戦ってる。私も一緒に戦いたいけど……もう戦う力がない
「どうすれば……どうすれば……」

「四葉ちゃん……勇者部五箇条!!なるべく諦めない!!」

東郷ちゃんが突然五箇条を言った。何で……ううん、諦めない。そうだまだ諦めない。諦めたくない

「戦う力がなくつても、それでも私はみんなを守りたい!!神樹様……お願い。私に力を……みんなを守る……守り神様をも守る力を……」

私は必死に祈った。神樹様に届くまで必死に祈った。

その時だった。私の前に光の玉が現れ、一人の少年に変わった。私はその人を見て驚いていた。

「桔梗?」

『別の世界のだけだな。あんたとこうして話すのは初めてだけど……僕のことを覚えてるか?』

「……もしかして守り神様と一緒にいた……」

『届け物だ。今なら扱えるはずだ。天の炎を宿した刀を、女神たちの力を宿した短刀を……』

少年は私に赤い刀と水色と白の短刀を渡し、姿を消した。私はそれを手にとった瞬間、全てを理解した。

「ありがとうございます……守り神様……今行きます!!変身!!」

まばゆい光とともに私の姿は真っ白な勇者の衣装に変わり、両手には受け取った刀が握られていた。

「四葉ちゃん……」

「行ってくる。そして必ず帰ってくるから……」

「うん」

私は守り神様の元へと向かうのであった。

守り神様はバーテックスの攻撃を受け続けていた。私は赤い刀を大きく降った瞬間、炎が出てきて、バーテックスの攻撃を防いだ。

『これは……』

最終話 守ってきたもの

あの戦いから一週間が過ぎた。

あの日、守り神様は壁の外へ向かったきり、私の中に戻ってこない。

「ここが守り神様が戦った友達が眠る場所……」

私は英霊碑に来ていた。そこには乃木若葉、高嶋友奈、伊予島杏、土居珠子、白鳥歌野、上里ひなた、藤森水都、神宮千景、そして姫野四葉の名前が刻まれていた。

「ご先祖様……世界はどうなったのかわからないです。ただ大赦が言うにはもう天の神と戦う必要がなくなたって……」

あの日、壁の外の炎はすべて消え去り、滅びる前の世界が広がっていた。今は元に戻った世界がどんなものか調べていた。

「みんなの勇者システムは回収されたけど……何故か私だけ戦う力が残ってる。これって……」

「それはね〜きつと選ばれたからじゃないからかな?」

不意に声が聞こえ、振り向くとそこには園子ちゃん、銀ちゃん、東郷ちゃんがいた。

「みんな……」

「あの日、須美の散華も治ったのは守り神様の力ってやつなんだよな」

「多分そうね。だから銀やそのつちたちのことを思い出せた」

「園子ちゃん、選ばれたって？」

「ヒメちゃんはね。もしかしたらだけど守り神様を守護する勇者に選ばれたんじゃないかな？」

「守護する……」

「あとは……例外的な存在になったからとか？」

「例外？」

園子ちゃんが言うには、世界はいくつもある。その中で死ぬはずの運命を変えることができる例外たる存在。それはもしかしたら世界そのものを救えてしまうかもしれない

「例えば天の神様と神樹様が仲直りしてくれるように頼み込んだ例外とか」

「それって……」

あの子のことかな？でも私はあの子の事をよく知らない。いや、知ってるけど、あの子はどんな戦いをしてきたのかを知らなかった。

「返さないよね」

私は2本の刀のキーホルダーを見つめた。いつか返しにいかないよね。

更に一週間、あれから守り神様は戻ってこなかった。いや、もしかしたら壁の外を作り変えるために限界まで力を使い果たしたのかな？それとも神様として私達を見守ってるのかな？

「守り神様……」

今はみんなで勇者部の依頼をこなしていた。ちなみに新入部員として園子ちゃんと銀ちゃんの二人が入部し、毎日賑やかだった。

「四葉……ってかあんた、もうお役目とか関係ないから本当の名前教えなさいよ」

「えっと、本当の名前ですか？」

「そうだよ。ずっと『姫野四葉』って名前を引き継いできたんだよね。戦いが終わったんだからこれからは……」

「何というか面倒な風習ね」

「東郷先輩たちは知らないんですか？」

「私達も知らないわ。そのつちは？」

「私も知らないよ」

「いい加減教えろって」

「え、えつと……」

「そうだよ。もういい加減名乗るべきだよ。私の本当の名前を……」

「私……私は神宮蕾です」

「神宮……蕾……か。いい名前ね」

「はい」

『そう……いい名前ね。蕾』

守り神様の声が聞こえてくると同時に園子ちゃんももっていたサンチョが動き出した。

『ふう、いい依代がなくなつて……』

「うおおおお、サンチョが喋つて動いてる」

『あつ、どうも。守り神のヒメノです。ようやく安定してきたのでこれからは蕾と一緒にいることにしました』

な、何とかというか物凄いことに……でもこうしてまた逢えてよかった。

「ヒメノ様。おかえりなさい」

『ただいま』

ヒメノ様曰く天の神の怒りを鎮めるために力を限界ギリギリまで使ったらしく、戻ってくるまで時間がかかったらしい。

だけでももう戦う必要がなくなった以上、ヒメノ様はサンチョを依り代に私といるようにしたらしい。

これが私達が守ってきた平和……世界なんだよね

因みにヒメノ様は私と一緒にいたほうがいいとなり、園子ちゃんからサンチョを受け取るのであった。

「そういえばヒメノ様」

『何?』

「私だけまだ勇者に変身できるのはなんでですか?」

『それは……いつか貴方が持つているものを返すときがくるかもしれないから』

そっか、いつか返すときにか……今度は彼らと一緒に戦う日が来ることを願うよ。守護の勇者として